

「本多庸一君の人物見立。雜誌「成功」の問に答へて本多忠勝、諸葛孔明、華盛頓、モーセ、ゴル
ドン將軍の五人を擧ぐ、今この順序を案するに、君幼にして祖先(?)の高風に感じて志を立て、
封建時代の忠誠を以て志となし、維新の風雲に際會しては王佐の才を思ひ政界に入りて自由の木
鐸、新天地の創始者を夢み、翻然として天道を覺るや、民族の主導者を追慕し、盤根錯節の世に
當りては異域に戦ひ重圍に陥り、尙ほ泰然として悠々道を樂しめる將軍に私淑せらるゝにや、然
も此五人者何れも奇氣磅礴たる人傑に非ずして、渾然たる巨人たること、その何れも戦雲中の人
にして然も誠良の士たること亦留意すべきなり。君また曰く、「或意味にて申せば毎日會見する友
人と青年學生の間には大人物雲霞の如し」と或意味の三字意味深長なりといふべし」

護教五七八號(三五年八月二三)、五九七號(三六年一月三)、五九八號(同月十)、六一六號(五月
十六)、六一七號(同月二十三)、の五號に亘り基督教問答講義と題し、三十一年英國福音主義教會
發行、翌三十二年植村正久譯述の問答書に就て、本多が九段教會の夜の説教に連續講義せるを青山
學院在學の堀口彌摩吉が筆記せるものが載せてある。これは第一問「基督教とは何ぞや」第二問
「神に就て如何に考ふるや」のみを講じたものでそれ以下に及んで居らぬを遺憾とする。若し完
成したのであつたら通俗的なれど彼の體系的の考が知られたのであらう。尙ほ此頃の説教にして堀
口の筆記によりて傳へられ遺稿に載れるもの少しとせぬ。

十二年前にジョン・ウエスレー死後百年を記念したメソヂストは今彼が誕生二百年を記念するこ
ととなつた。本多遺稿には「ウエスレーの新生に就て」及びその「母スザナに就て」の二篇を載せ
てある。時は六月共に記念演説である。ウエスレーに關しては彼がその日記により一七三八年四月
ピーター・ベエラーに邂逅し心靈の覺醒を見たる要點を説き、この新生なかりしならば今日のメソ
ヂスムなかりしを示した。スザナに關してはその一生を頗る詳に説いて終に云ふ、「現今女子教育の
日に月に隆盛に赴くは喜ぶべきも、その任にあるものは尙も母を教育しつゝあるを忘れてはならぬ。
母を教育するは子たる者の運命を決し、國家の興亡を豫定する。天下多數の子より一のヴォルテ
ーラを出すと、一のウエスレーを出すと禍福の由つて來る所、實に意量の外にある」と。

八月中彼は歸省し弘前、仙臺、盛岡等にて演説し十月再び仙臺に赴き又翻て名古屋地方に赴いた。
三河の西尾にも至りて長篠の古戰場を見た。先づその地形を察し城は東西二方は斷崖で堅固なるも
周圍七八町の小城なるに四方の丘陵悉く城中を瞰下すを以て籠城の難思ふべく、城主奥平九八郎が
僅か二十一二歳にて四百の士卒を勵まし甲軍二萬の進路を遮り孤城を守ること十六日、よく友軍を
勝利に導きしは感すべく、特に城外に出で援軍の近きを探り捕へられて殺されし鳥居強右衛門勝高
の墓を見れば感慨深く、更に翻て武田軍の無謀を制し得ずして戦死せる馬場信房の墓を見て、「思切
迫し眞の武士道の高潔なる弓矢の人の哀を懷はざるを得ず、武士には天を突くの鋭氣あるべし、然

れど武士は亦涙にも富める者ぞかし。忠臣義士の身を捨て節を全ふするを見れば、誰か其美を慕はざらん、誰かその衷に鬱勃たる意氣を感じざらん、誰か其の凜然として千歳の模範たる善徳に化せられざらん」といひ、更に進んで、

『鳥居の壯、馬場の烈、是れ皆人格の餘光にして三百星霜を透逆して今日猶吾人の心根を射る者あり、人格の勢亦大なる哉。抑世上競争の數多しと雖、歸する所は人格の競争なり。吾人は今や日露の戦争を豫想して艦船幾隻、歩騎砲若干、軍資幾何と云ふ。嗚呼是れ皆目前暫時の競争のみ、其勝敗朝夕に變ずべし、勝も頼むに足らず、負くるも屈するに足らず、唯だ國民人格の競争に至ては永久の勝敗なり。百年を待ちて其の進退を見るべきなり。……然れば國士をして最も深く考へしめんと欲するは吾人と子孫の人格なりとす』と結ぶ。

十九、日露戦役の時(一)、韓國行等

一月六日の日記にいふ。「近衛(篤磨)公爵の薨去は實に遺憾なり。斯時に斯人を失ふ。上下共に哀む。落合の公爵邸より谷中迄徒歩、柩に隨ふ、一時より三時半迄かゝれり。五時歸途に上る、上野山下より電車をとれり、萬世橋にて市街鐵に乗替へ四谷傳馬町に來りしがポケットをスラレたるを發見し徒歩にて歸宅せり。公爵の葬儀質素にして嚴肅なりき。多數の學生中清國人も二百名位あり

しを認む。」

これによつて貴族院議長たりし公爵の人物、特にその東亞問題に留意せることを知る、電車は此頃はじめの敷設であつた。交通は尙ほ頗る不便であつた。彼の懷中に對する關心の程もまた窺はれる。

前年に於て彼も豫想したる日露戦争は此年に勃發した。東亞の空を掩へる暗雲は遂に亂れて戦争の狂嵐となつた。二月十日宣戰詔勅下り翌日の紀元節は常ならぬ祝節となつた。

此日青山では院長の演説あり、その直後從軍すべき著者の行を送られた。此時我が本務は陸軍の學府にあつた爲、開戦となると共に第一軍の司令部に附して出征したのであつた。故にこの非常時に於ける彼の行動を目撃し得なかつたが書信によつて其行動や感想を知ることが得た。

彼の日記を見るに二月のはじめ彼ははやく大山巖侯を訪ひ軍隊慰問の計を講じた。續て井上馨侯、首相桂太郎、陸相寺内正毅、參謀次長兒玉源太郎等を歴訪した。青年會館では屢々教徒の軍事委員會を開いた。

此月三月に嘉永四年締結の日本條約の爲五十年紀念會があつた。四月には青山にて美以教會員に對し、『恩惠の二十五年』と題し彼は自己の過去の經歷の要略を談つた。その終の方にメソヂスト三派合同の問題に言及ぼして居る。これは餘り人爲を用ふるは宜しからずと思ひ時を待つて居た。神學校の合同すら輕々しくは受けずに居た。然るに二年前より意外にも宣教師の間から此運動が起つ

たので最早黙すべき時ならずと思ひその事實とならんことを祈りありといふ。その結末に云く、「今日私の祈は合同の成就と日本軍の勝利とより重大なるものは無い。日露の戦は如何にしても勝ちたい。一言を以て之を言へば合同問題は母教會に對し報恩の最良法である。日露の戦争は日本の自衛とその天職の爲に避くべからざるものである。而して若し露を愛するならばその敗軍を祈らねばならぬ。彼が負けてこそ自由も行はるべく堅固の國ともならう。彼は破るれば東洋に手を出し得ずなり、彼の爲によく、また日清韓の爲によい。これ即ち敵を愛する所以である」と。

更に詳なる意見は遺稿中の征露論に見ゆる。其要旨は、(一)正しき目的の爲に避け難き争闘は教祖も是認せられた、(二)征露の第一目的は日本帝國の存立を鞏固にせん爲である。(三)また隣國友邦の安全と其進歩發達を圖る爲である。その効果如何といへば、(一)韓國の事大家をして國民の大小を知るべき眞の標準を知らしむる。(二)清露の二大老國の頑冥の夢を覺し得るといふにある。外に征露と傳道と題する一篇がある。

戦時の教徒の實際事業としては青年會同盟委員長たる本多は福音同盟會長たる小崎と共に基督教徒の共同的奉仕に就て檄を發し、

- 一、從軍布教師又は軍隊慰問使を派遣すること。
- 二、軍人の出入頻繁なる地方に於て特に獎兵又は傳道の方法を盡すこと。

三、軍人用小冊子を印刷し内地及戦地にて適宜配布すること。
而して此目的の爲の募金の要あるを公告した。

日露戦争は日清戦争と異りて異色人種の争として、また異宗教民族の闘として見られ、歐米には較もすれば黄禍、異教の名を以て我を目するものがある。我國內にも遍狹にして之に反対反感を抱くものがある。首相桂太郎は先づ之を憂とし、宗教者にも告げて、内外人種及宗教の異同より感情の衝突を起し、事情を紛糾し國策の遂行を妨害するなきを求め、基督教方面へは特に本多に逢ひて此趣旨の傳達を求めた。それは四月八日であつた。

大日本宗教大會なるものが企圖せられたのは同じ頃であつた。帝國の安全と東亞の平和の爲の戦争が、外には露佛等の新聞によつて黄禍視せられ異教の反抗と見られ、また内には偏狹の我が教徒が外教を迫害するの兆候ありとして、之を除かん爲に神佛基督教者の大會を東京に開き、決議宣言するところあらんとした。四月十五日發表の同大會開催趣旨書に發起人として記されしは神道側は千家尊弘、平田盛胤等、佛教側は石川素童、大内青巒、島池黙雷、黒田眞洞、村上專精、前田慧雲等、基督教側は本多、江原、海老名、小崎、植村、元田等、外に學者として井上哲次郎、姉崎正治等があつた。此會は五月十六日芝彌生館に催され來會者千餘名、平田、小崎、村上、大内、及び佐治實然、柴田禮一、イムブリー等の演説あり、府知事千家尊福、市長尾崎行雄等も之に臨んだ。本

多は此時既に韓國に向つて出發した後であつた。此會が發表した宣言書は、
 「日露の交戦は日本帝國の安全と東洋永遠の平和とを畫し、世界の文明正義人道の爲に起れるものとして毫も宗教の別、人種の異同に關する所なし、故に吾儕宗教家は宗派人種の異同を問はず此に相會し、各自公正の信念に懇へ相與に奮つて此交戦の真相を宇内に表明し以て速に光榮ある平和の克復を見んことを望む」といふにあつた。此會合は後年の三教者會同を暗示するものであつた。尙近くは翌三十八年に於ける本多、井深の海外行も此會とは關係無きも趣旨は同一であつた。

五月一日鴨綠江の會戦の捷報に接し其翌日本多が認めた書簡を著者は鳳凰城で得た。其中にいふ。
 「偕て久しく待ちたる陸戦として昨日は九連城を占領相成候由、本日の公報にて一同の喜び云はん方無之候。一昨日來の戦鬪は敵味方十萬計りの對戦と思はれ候。且つ海軍さへ參加いたし候事とて定めて非常の壯觀なりしならん、殊に敵は要地に據り利器を用ふ、流石に支那軍とは異り候はんも、我も廿七年の時よりは大に進歩いたし居り、且つ數倍の大軍にて其旺盛なる事言ふも愚と存じ候。死傷も七百計りとは中々烈しき戦鬪と存じ候。廿七年には十月末に鴨綠紅を渡り十一月初めには花園河口の上陸と相成候が此度も第二軍の上陸近きにあるならんと待佗しく存候。日本海にては露艦未だ運盡きず。去廿五日には濃霧の中に我が第二艦隊をやりこかし元山に五洋丸、新浦沖に金州丸を

撃沈して一中隊の大坂兵を海死せしめたる悲惨の技を演じ候は近頃苦々しき事に御座候得共終は冥土に極まり居る露艦の事故暫く跋扈を許し候も恐るゝに足らずと存じ候。……布教使は今以て出來され共暫時の後慰問使として特に許さるべき様陸軍大臣の内諾を得居り候間其中誰か御見舞に罷出可申候。小生は近日傳道用にて木原外七氏と共に渡韓可致候間都合よければ平壤邊迄又は猶先きまで參り慰問致し度考に御座候得共朝鮮人の教會を訪問せんと考も有之候間或は戦地には參り兼候も難計候……近頃は頻りに露探騒ぎ有之妄誕無稽笑止千萬の浮説多く有之残念至極に御座候、是實に露探の流言なるべしと存候、甚しきは某師團長某少將等皆露探の嫌有之候様申傳へ抱腹絶倒何とも申兼候、我國民も未だ實に幼稚なり戦に勝ちても逆ても誇ること出來不申候、陸海軍の程度に比しては萬事非常に低度に御座候」云々。

五月、日本福音同盟會は左の書狀を韓國諸教會に發した。文章は本多の自作であらう。

「拜啓、東洋古今未曾有の事變に際し、大日本帝國に於ける福音的諸教會及團體を聯合せる福音同盟會が、本多庸一、中田重治の二教師を委員として、大韓國に在る諸教會を訪問せしむるに當り謹んで愛敬する兄弟諸君に一書を呈し委員差遣の要旨を左に略陳す。

一、韓日兩帝國は古來深厚なる關係あり。別て近き二十年間に於て修交新に近密を加へ、政事商業及文武教練等は勿論、邦家の存在領土の保全に至るまで其利害を共通するの事情に在り、特

に本年兩帝國同盟の約成るに及で列邦間比類なきの間柄となれり。此際に於て秀高なる意義を以て兄弟姉妹の關係ある吾儕基督信徒たる者は漫然として経過すべからず、速かに一般兩國民に過ぐるの交情を耕養すべきは理の當さに熄むべからざる所なりと信ず。是委員差遣の急なる所以なり。

一、日露の交戦は韓日兩帝國の安全と東洋の進歩平和とに關し免るべからざる所となれり。而して不幸にして韓國の領土に於て開仗する事となれり。之が爲めに韓國全般と共に、主に在る兄弟姉妹をして幾多の迷惑を感じしめたるは、在日本兄弟姉妹の同情に堪へざる所なり。是慰問を急にする所以なり。

一、韓日兩帝國は天祐を享受すること甚だ久しと雖ども、眞神の道未だ普及せず、人道亦未だ甚明かならざる所あり。實に兩國の大患なり。而して吾儕基督信徒は衆同胞に先て恩寵を受けたり。宜しく同心協力して與に聖道傳播に勉むべし。是修交協同の急なる所以なり。

一、韓日兩國に在る福音的教會は、多くは英米兩國に在る諸教會の傳道に由る者にして、其教理主張共に開化文明の進歩趨勢に適合する者なり。吾儕は幸にして内外に此好關係を有せり。宜しく東西歩武を一にして東洋の進歩祝福を圖るべし。殊に戦争終局に歸し韓滿兩地の平和全く回復し東洋全般洞開の日に至らば、韓日人の往來は勿論歐米人の兩地に來往する者一層多かる

べきは自然の勢ひなり。吾儕は豫め備へて健全なる修交を圖り、天父を奉じ天下を家とするの博愛と地上を天となすの清操を以て、神榮を顯彰せざるべからず。是祈禱を一にし修養を與にするの急なる所以なり。

最後に表明せんと欲する吾儕の願望は他なし、在天の父と主耶蘇基督の恩寵と平安とは、常に在韓國兄弟姉妹の上に在り、神國の擴張日々に進歩して息まざらんことを誠實切望する所也。

頓首謹言

明治三十七年五月

大日本福音同盟會

大韓國基督教會兄弟

玉机案下

此月美以教會日本年會の任命したる韓國傳道委員は本多を委員長とし、韓國傳道開始を企てしめた。此目的に加ふるに軍隊慰問と朝鮮教會訪問との目的を以て彼は中田重治と共に五月十一日東京を發した。翌朝名古屋にて小方仙之助及び中田の兄久吉に逢ひ、京都にては大學にありし子息二郎に逢ひ、十三日大阪にて生江孝之、堀峯橋等に迎へられ關西學院の吉岡美國、ニュートン等と會合し生田教會にて祈禱會に臨んだ。日記によれば、此日彼は桂首相に書を送り、日本の貴族や高官が女性の出席、ある公會で喫烟する惡習に就て注意を促した。十四日早起して町田才之亟に書狀を認

めしと日記にあるは郷里の邸宅に關してと思はれる。午前關西學院で演説し午後筑後川丸に乗船、十五日船中にて説教、馬關に上陸を試み其夕出船、十六日釜山に着し上陸して日本基督教會の秋元重雄及び滯在中の陸軍主計正大江玄壽に會つた。大江は秋元が注意人物となつて居ると告げたので直に領事有吉明に逢つて見ると秋元は歸國するを最良とすといはれた。之に關し彼は植村正久に書状を送つた。これは基督教會に對しての何等かの官憲の疑であつたかと思はれる。釜山で青山出身の小林與三郎及び船引夫妻に逢つた。十七日木浦、十八日仁川に達し、開戦に際し撃沈されし露艦ワリアグ、コレアツ、スングリの憐なる姿を見た。外國軍艦も四隻居た。其夕京城に入り青山出身にして第一銀行京城支店長たる高木正義に迎へられ其家に泊した。當面の要件は三つあつた。

(一)は木原外七の在韓日本人に對する傳道開始である。高木に導かれ木原と共に美以兩傳道會社の代表者を訪ひ我が領事館附近に講義所を開き、外に牧師館を借り公開演説三日、五月廿九日公會禮拜説教をなし五十人の出席を見た。宣教師シャープ、ベック等からは非常に同情され、各個人資を投じて補助された。青年會の萬國書記ジレットも助力した。高木正義は助力至らざる無く一行を官邊に紹介し、自宅に宗教的集會を催し、園遊會も舉行しなどして大に努めた。

(二)は韓國駐劄軍隊慰問である。先づ寺内陸相の書を携へ駐劄軍司令官原口兼濟少將を訪ひ、その許を得、在京後備諸隊を訪ひ小冊子を配附し、二十六日には歩兵第廿四聯隊第一大隊に於て中田

重治と共に慰問演説を爲した。尙ほ木原を紹介し爾來時々木原は軍隊を訪ふた。廿八日には龍山に至り鐵道隊を訪問し、鐵道監山根武亮少將を尋ね午餐を共にした。

(三)は韓國教會の訪問である。先づ美以長老兩派の宣教師を訪ひ、また我が林公使に請ひ韓廷外務部から内地旅行の護照を得て、諸教會を訪問することゝした。京城南大門内と貞洞には美以の二大會堂あり、日曜には各五百名も集つた。長老派の教會は數ヶ所あるうち最大なるは明洞の濟衆病院に屬するものであつた。何れも演説する機會を得て韓人信徒に喜ばれた。長老派の韓人有志は爲に慰勞會を催し、美以の傳道士勸士等數十名とも集合して意見を交換した。學校は京城學堂と培材學堂を訪ひ學生に演説した。

六月一日再び原口少將を訪ひ此行のことを告げた。因にいふこの將軍は後に樺太征討軍の司令官となつた。同日午後本多、木原は仁川にゆき武川盛四郎宅にて演説し一泊した。武川の新樓は仁川港内を見下すので、さきに海戦ありし時は好箇の觀戰場であつた。一家を擧げて女中も觀戦したと聞いて『好戰の人民なること知るべし』と彼は日記にしるした。

二日京城に歸つたが午後より迅雷風雨、三日も雨で延期し、四日京城を發し、義州街道を乘馬北進した。通譯として雇入れし韓人朴成圭及び勝俣喜十郎も途中まで従つた。夜坡州に泊して始めて朝鮮にあるの想をなした。五日沿道の軍隊を訪ひ臨津江を渡り開城に至り、六日滯在開城學堂を訪

ひ、七日工事中の鐵道線を左に見つゝ金川に向ふ。路は山間を經過し、馬夫は美聲にてよく謡ひ封建時代の旅を思はしめた。金川より禮成江を渡り猪灘洞の牧師館に泊し、八日は瑞興教會に泊し、小集に臨み、九日鳳山に至り兵站部に泊し、當番卒を附けられて歡待され、十日仙洞嶺を越え黃州に至りまた兵站部に泊した。中田は齒痛に苦しみ、朴は昨日川水に浴せし爲不快となつた。軍隊と教會とで共に演説した。十一日途に平原を横り中和を過ぎて日清役に斥候が先づ此地に衝突したるを想ひ遂に平壤に入つた。兵站部の周旋で大同江畔のさくら屋に泊した。

十二日の日曜には朝鎮衛隊に至り大隊長を訪ひ美以教會の禮拜に臨むだ。千人を容るる大會堂こゝで朴の通譯にて説教、午後長老教會の禮拜で男女約五百人に説教した。此日の午前こゝでも百三十人の受洗者ありしと聞いた。其夜本多はドクトル・モフェット方に、中田はイー・デイ・フォルウエル方に移つた。翌日は過勞の爲靜養した。

十四日二個の中隊を訪問して乙密臺に上り平壤の景勝を見て、山水の美絶倫と思つた。城壁に沿ふて歩いて箕子廟を望み七星門内を過ぎて宿に歸つた。

平壤はこれより二ヶ月餘以前に著者が第一軍に従つて十餘日滞在したところである。山腹の鎮衛隊營は我司令部であつた。丘上に最も顯著なるは長老教會と美以教會堂で予も宣教師を尋ね、教會内も見したが、朝鮮では男女相見ることなき爲に前者は堂の隅に教壇を設け、對角線に布を張り、後

者は普通の位置に壇を設け布にて堂を左右に二分して男女の席を分つてあるを見て奇異の感があつた。丘上の大觀は如何にも雄大であつた。大同江は洋々と流れ牡丹臺、乙密臺は聳え、裏面には林間に箕子廟があつた。歴史で知れる豊公の朝鮮征伐の時も思はるゝが、それより近き十年前の日清役の戰場として正面よりは大島旅團、左側より野津本隊、右側より立見少將の朔寧枝隊、後より佐藤大佐の元山枝隊が時を同うして四面合撃したる戰略は歴々地形によつて徴し得た。唯だ奇なるは城が江の右岸にあつて、昔は南下する外敵を顧慮したるべきにそれに對しては防禦の効少しと思はるゝことであつた。本傳の人物は今此城に立つてまたかゝる想を抱いたかも知れぬ。

平壤で更に日語學校卒業生趙架鴻を雇ひ、行動を二分して中田はさきの朴と共に北進して義州に至り、本多は趙と共に十六日に北進順安に至り、十八日平壤に戻り、尙ほ會堂と軍隊とにて演説し、二十一日元山路の小村なる士會洞に至り、二十二日大同江右岸の閔波に至り翌日また平壤に歸り、廿四日西方太平洞を経て江西に至り、廿五日咸從に至り、女教師全三徳の學校を訪ひ、三和に至り、二十六日同所にて禮拜演説し集るもの二百餘、午後甌南浦に至り牧師館に投じ、夜は長老美以兩會員を合して二百五六十名に説教した。驢馬の旅はこゝに終り翌日乗船南下仁川に向つたが濃霧に閉ぢられ廿時間の航程に意外の時を費し七月二日に仁川に着した。此間船量と下痢とに苦んだ。二日の夜京城に着し高木の家に宿した。中田は陸路安東縣に至り、それから乗船して一日後れて仁川に

着し京城に入った。

二人は再び別れて中田は敷設中の京釜鐵道の幾分を利用して南下することとし、本多は東北方六十里の僻陬の路を踏んで元山に出づるに決した。こゝで従來の朴と趙とを解雇し別に中田は鄭、本多は全といふいふ通譯を伴つたらしい。以下日記によれば七月八日曇天時に細雨朝來荷造りせしも馬夫發足を肯せず明朝發とす。九日曉天強雨五時頃より細雨となり七時發す、木原は小東門まで見送つた。十二時議政府に達し晝食、二時立ちて七時半抱川兵站司令部ある場巨里に達す。兵站部より宿舍を供せられ、石井守備隊長(特務曹長)より蠟燭と罐詰を贈られた。此日行程十一里、屢々川を涉つた。また鐵原地方の信者に逢つて慰問狀數葉を托して其地の傳道者に贈つた。

十日日曜六時發六里にして松亭里といふ十二戸の小村に至り樹間にて晝食、電柱用の材木が多く山間より運ばるゝを見た。莞浦兵站支部で鬼塚中隊長に面會、四時發二里二十八丁にして地境洞に達し、鄭永俊なる人を訪ひ會堂に投じ晩の集會にて演説した。この會堂は南美以に屬し信徒三十名内外、此夜は二十五名位(男女等分)が集つた。二三年前全焼した後の新築會堂は幅三間長六間で價二百圓であつた。此日も屢々川を涉つたが馬が小さくて度々不安の念があつた。

十一日、昨夜より秋冷を感じた。蚊は無くなつた。午前八時地境洞を發し坦道を行く一里半にして南大川の支流幅五六十間ある川に達し、渡れば即ち新酒幕、此處の信者某を訪へば、不在なりし

爲慰問狀をその妻に渡して去つた。一里三十町で金化に達した。此邊の山水は美しかつた。後年同志社及び青山學院の生徒監となつた基督教徒たる歩兵少佐宇野重喜が兵站司令官で郡守の私邸に寓して居たので其處に迎へられた。入浴の後午後六時から司令部で慰問演説を爲した。此邊は際立つて清潔であつたのは兵站部の盡力であつたらう。宿舍は新會堂で今夜は臭蟲の害は免れると思つたがそれは仇であつた。

十二日滞在、午前八時司令部で宗教談、冷氣の爲風邪の氣味且腸胃もよくない、晝食は司令部員と共にしたが午後二時寓に歸り假床にて休息、八時寓所にて小集を開き、附せられた從卒星野宗太郎に洗禮を施した。此夜は絶食であつた。

十三日、稍快方なれど全快せぬので滞在、宇野司令官方で郡守李源根に面會、桂首相に書を軍事郵便で送つた。此頃郭公と鶯とは毎日庭に鳴いて居た。

十四日、午前八時半金化司令部員及び郡守李源根に送られて金城に向つて出立した。宇野少佐は郊外一里位まで騎馬にて送つた。以前の行程より一層風致ある山川を眺め午後一時半一の長き假橋を渡り鎮西門の額を懸けた樓門を入りて金城に達した。東北西に凸凹變化多き山を負ひ南は川流に對し風景よく、郡衙がある。兵站支部長少尉山口辨太郎(本官は判事にて妻は浸禮の信者といふ)に逢つた。夜は郡衙の廣場を借り守備隊に演説した。通信部長青山某の父は淺草明星教會の古き信

者なりしと。

十五日夜來降雨斷えず諸川澎湃、今日は牛に騎して出立すべかりしを雨の爲空しく滞在、雨の小止みの頃支部長以下渡船保護に盡力せるを見たが増水且つ急流（北漢江ならむ）の爲容易に目的を達せぬ。午後六時宇野少佐と電話にて談つた。雨間を利用して二三の手紙を認めた。夜半よりまた降り出で往來も皆川となつた。

十六日夜來降雨續く、昨夜蚊張内にて大に臭蟲に苦しめられた。蓋し毛布に着いて居たのであらう。守備隊の盡力で渡船は成就したが郵便は未だ來らぬ。雨の爲に紀行を書いて半に至つた。

十七日雨止みたれどまだ日光青空を見ぬ。午後郡衙の廣間で守備隊長以下二十名に宗教談をなした。金城金化間の郵便は通じたが迎松津からは未着である。

十八日晴天、朝宇野少佐と電話で談り、七時過出發、村を出で近路を取ると直に急坂を登つた。小川は多けれど徒涉に差支ない。川の外は道が善い。一時半灰峴着、食後少尉櫻井龍之助及軍曹と共に二十町を距つる迎松津に至り演説し五時半宿舎に歸つた。蠅が頗る多い。昨日の馬を兵站部で雇ひ次でくれた。

このあたりから少し東に金剛山の絶勝があるがそれを見ずに彼は進んだ。十九日晴天朝七時灰峴を發し、一の急坂を下り迎松江の深淵を船にて越し又急坂を上りて廣野に出た。電信工事を見た。

また松の樹上に鶴の群るを見た。三里餘にして昌道といふ市場を過ぎ一時過に淮陽に達し兵站支部で食事、更に馬を雇ひ次ぎ鐵嶺で日は没した。七日頃の上弦の月が出た。嶺上平坦なれど上下路特に下路は悪かつた。（此夜の宿舎は記して無い）。

二十日朝七時司令官岡大尉を訪ひ八時出立、昨日の馬を用ゆ、半里にして川あり、橋無き急流であつた。上流を徒涉した。首乗をして僅に足を濡らしたのみだが危険であつた。午後一時南山に達し井關少尉の室で午餐を喫し、同前の馬で元山に向つた。是より平野が遠く連り水田が多い、八時元山居留地長崎屋に着した。

行旅七日滞在五日で六十里の偏僻の旅を了つた。兵站線を過ぎて便宜を與へられはしたが、頗る昔の旅の如く然も至る所に道を説いたのは使徒時代をも思はせる。著者はこれより三月許り前に平壤より義州へ略ぼ京城元山間と同じ里程を八日を費して行軍したのでこの、彼の朝鮮の偏僻の旅を想像し得る。然も彼は孤影悄然として旅した。それは若し軍人となつたら正に軍司令官位であるべき五十八歳の彼であつた。齡を比ぶれば、第一軍司令官黒木爲楨は彼より五年前に生れたが、第三軍司令官乃木希典は彼より一年若かつた。

七月二十一日より七日間、彼は元山に滞在した。此間宣教師フート、ハアデイ、マクラエ、グリ

アスン等に逢つた。二十三日フート方に移つた。

翌日曜には長老教會連合會に臨み大雨なりしも百五十人許り集り、彼は禮拜説教を爲した。韓人全はよく通譯した。夜も同所にて長老美以浸禮三教會の百五十人に説教した。二十五日夕ハアデー方に招かれジアドイン、ハウンシヤルと共に會食、夜満月を踏でフート方に歸つた。二十六日夜副領事大木安之助に招かれ會食した。前々日集會の集金を教會の執事持參し旅の費用に供すといひしを一旦受けて更に教會に寄附した。廿七日内海重男の饗應を受けた。夜一里を距てた新風里の祈禱會に往復して雨に逢つた。廿八日韓船蒼龍丸に乗つて元山を發した。大木副領事夫妻、内海重男、陸奥小二郎、齋藤巡查等に送られた。

三十日午後二時釜山に入つて上陸、陸路を來りし中田は五六日滞在し數日前迄ありしと聞いた。通譯全を船で仁川に歸すことゝした。全は彼より與へし金額は過多なりとて固辭したので少し減じて與へねばならなかつた。この寡慾は共に旅しての感化であつたかも知れぬ。

釜山では五月に上陸の際逢つた小林與三郎及び船引夫妻に迎へられた。三十一日の日曜に聖公會の小禮拜堂で勸話をなし、夕筑後川丸に乗船五時馬關に向ひ出帆した。五月十八日仁川上陸以來在韓正に七十五日であつた。説教演説は三十餘回に上つた。

彼は歸國しても直ちに歸京せず。門司に上陸して長崎、熊本、福岡に至りて演説し、歸路神戸、

大阪にても演説し、歸宅したのは八月九日であつた。

朝鮮に同行した中田重治は弘前の人、其の兄久吉も傳道者であつたが此年十月名古屋にて逝去した。重治は青山學院にありし頃失戀の事あり。本多は彼を見て、「如何する」と問ふた。彼は「我慢します」と答へた。「それはいかぬ、じつとして居て出来るものでない。旅行してくるがよい」かく云うて旅費を與へられた。彼は後に千島に傳道した。此行に従ひ歸つて人に談つていふ。「先生は武官や役人に對して非常に鄭重に禮儀を正した。かうしておけば喜んで居るといはれた。宿に就き床に横はれば直ぐに寢入つて鼾聲雷の如しだ」と。

本多は歸國して朝鮮傳道を談りて云ふ。

「朝鮮は事情全く我國と異なる。傳道の最盛に行はるゝ平安道に於てすら、其宣ぶる所は極めて單純平易なる福音に過ぎぬ。信者に聖書一と通り讀むことを教ふるすら大事業である。未だ講壇の力を増進せざるべからざるの域に達せぬ。……朝鮮の傳道の進歩元より遅々たれども然も外部の進歩に比すれば其速力到底比すべきで無い。彼の國にて逢ひたる男女の宣教師にその生活、その旅行等の困難なるに同情を表して慰めたるに、彼等却て一點の不滿も無くて衷心より喜と望に充ちて働き居ると答へられた。蓋し内部の喜樂多きを以て、外部の困難を左程感ぜぬのであらう。翻つて我國の有様を見ると外部の進歩常に駿々として止まず、動もすれば基督教の勢力及び進歩

は社會の下風に立たねばならぬ。吾人傳道の任にあるものは奮勵一番せねばならぬ。吾人は日本に生れ且つ今日の如き時世に生活しつゝあるを榮譽として謝すると共に、今一層その盡すべき責任義務を明にして、協心同力大に救世の事業に従ふべきである。』

八月には米國美以教會より日本及朝鮮の宣教監督として任命されたエム・シー・ハリスが來朝した彼はさきに明治六年に日本に來り、一度歸國してカリフォルニア沿岸の邦人の爲に盡し今また來朝したのであつた。本多とは久しき以前よりの親友であつて、其居を青山に定めて今は隣人となつた。九月六日には本多はまた箱根に開かれた夏期學校に臨みて韓國視察談をなした。同月米人エー・デー・ペリーが青山に來た。後長くその神學部長となつた。

九月廿七日發丈餘の長簡を予は沙河の南岸で受けた。之によれば本多は去月九日歸朝して青山に根據を占めた。青山は神學部十七人、高等科百六人、中等科二百九人に達した。一高の畔柳都太郎、立教の野々村戒三も講師となり、青山出身の舟橋雄は米國より歸つて教授となり、安井有恒は幹事、石井佐助は舍監となつた。震災後の校舍再建の計は進行中であつた。韓國旅行に就ては曰く。

『小生は平壤に二週間止まりて附近の教會を訪問し大に得る處有之候、牧者なき亡羊が神の檻に入りたるの眞相彼地の教會に顯れ居り可憐可愛の群に御座候、地上に國家無き民は神の王國を地

上に見出して喜ぶは當然なり、或は迷も亦此間に生ぜんか、併し無理ならず候、日本人は如何に幸福なるかを朝鮮に參る毎に感じ申候、然れども又驕ればカペナムと同じ運命ならんかと大に恐れ候。

遼陽の大捷は先づ賀すべし、全きを望むは貪欲なり、若し我軍に二三倍の騎隊あらしめば何れの戦にも數倍の大捷を得せしむべしとの評蓋し眞ならん、敵は退軍に巧(古より)にして我に逐ふべき足ならず、否寧ろ無しと云ふ方適當ならん、好い加減のものに御座候、物の具あるものに牙なし、餘類を世に残すの大法ならんか。

此頃は毎日旅順の報知のみ相待ち居候、蓋し遠きにあらざるべし、唯今米國のガウチャー氏より來狀あり、日露兩國の劍を得て自家のミュージアムに光輝を添へ度しとの望に御座候、戦に用ゐられたる劍の意ならん、若し軍紀を犯さず甚しき御迷惑もなくして右の品御手に入ること有之候はば誠に幸甚に候、殊に愛兄の御採集に係る物に候得ば一段の喜と存じ申候、入費は遠慮なく申越せとの事に御座候、猶ほ氏のミュージアムには既に歐米史中著名の戦争紀念品有之由に御座候、御歸陣迄に御心懸け被下候様相願候。……

東京豫備病院所管中の傷病者一萬三千人、全國にて四萬五千人、此割にては旅順の方は遼陽よりも餘程多からんと想像仕候。

三十餘萬の壯丁を海外に出して、都下には六萬五千の書生あり、四億の金を既に消費して究乏の相無し、年は開闢以來無比の豊熟(五千萬石)なりとは慥に天命我にあり、感謝奮闘すべし。然れども天命我にあり我は天に在らざることを忘るべからざるなり。

長谷川大將韓國に駐在すべしと、是れ最良案なり、小生も韓地に在りて窃に之を思へり、或所へは言ひもせり、輿論も此點にあり、遂に事實となれり。韓地にては餘り多く言ふに及ばず、實際仁政を布きて動かざれば天下の事定まる、滿洲もまた然らん、租借も何も要なし、支那と離れざる關係を附けて難事を我に任ずれば足れり、此點より見れば戦争が少し長きは利なるべし、左れど此大仕懸を此まゝ永く續くる事は困難なり、大破潰を仕遂げたる上は大兵にあらずして戦争の状態を維持することを得候へければ、事件の長き程經營上に利ありと存じ候、併し是は老書生の空案而已、御一笑可被下候。

陸軍大臣は小生に韓國丈の慰問を許したれ共未だ遼東に慰問使を送ることを許さず、過日外國新聞記者を饗應したりとの事新聞に見え申候、少し氣附きたることもあらん様に相見え候、

小生の書齋に居れば霞町龍土邊の物音能く聞こえ申候。此頃は第三聯隊の練兵の音も聞こえ申候、號令は號外の如く「旅順、旅順」と響く様に御座候。

今朝の新聞には浦鹽の敗艦も修繕既に成りスクルドルフ提督も乗艦將旗を掲げたりとあり、彼等も中々さる者に御座候、もう一度日本海に出で可申か、どうやら我が〇〇艦隊には物足らぬ心地致候。

名古屋の牧師中田久吉氏チブスにて病死致候。東海道の真中にも撒彈が命中するの恐れ有之候必ずしも滿洲の野のみならず、覺悟は何時も同じ事と存じ候』

此書中ガウチャーの所望の白露の劍には稍や當惑した。敵の銃劍はいくらも戰場に遺棄してあるので得易いが我が軍の劍は皆實用されて居るので得らるまいと思つた。然るに沙河會戰の際に東北の松永旅團が激戦したる三城子山を過ぎしとき、我が歩兵銃劍の切先六七寸が、如何に激しく闘ひしか折れて地上に墜ちあるを見て拾ひ取りて敵の銃劍及び彈丸と共に、折しも歸國する英國デーリ・クロニクルの從軍記者ドノホーに托して東京に送つた。

十月十九日發の書は續て來た。我が書に對する答である。

『十月四日の貴書は沙河會戰酬なる十三日に相達し大興味を以て熟讀仕候、教員諸氏にも回覽致し候、戰圖は特に興味を覺え候……』

過日朝日新聞に我同郷人一戸兵衛少將が旅順某高地の占領に勳功ありしことを讀み、少將に贈れる書中に申して曰く「腹の中から帶刀して生れたる身に候得共、生涯未だ戰功なる者の味を知ら

す、頗る遺憾に存じ候、此頃は同郷將士の戦功を以て我物の如くに心得満足仕り候」と……
沙河會戦の結果は遼陽に數倍するものにして實物よりはモラル上の影響猶大なることと存候、我軍の艱難も亦數層の事と存候。毎日の戦報死傷者の姓名を精査いたし候處最早二人の知人を見出し候。ウエリントン公曰く、武士の最哀しきは敗軍の時なれど、之に次ぎて哀しきは戦に勝てる時なりと。實に然り然り將士の心推計られて無残と存じ候。』

此書中に彼の情況判断がある、先づ沙河は渡河の困難なき故に小河ならんといひ、沙河堡や林盛堡の位置が不明で、良地圖なくして戦報を読むの難を嘆じ、さて曰く、『敵の殿軍は流石によく戦ふと見え候、大國には馬場美濃守幾人もあるべきかと存じ候、去るにても勝頼然たる黒鳩將軍は今後如何すべき、彼果して渾河に據つて得意の防守をなすべき乎、若くは高飛に鐵嶺まで引擧ぐべき乎、今後は容易に會戦を試みざるべしと思はれ候。左すれば沙河の打撃は少しく強過ぎ候て再び快戦するの機會を没せしやの憾なき能はずと存じ候杯は壘の上の注文にて一笑に付する値も無之と存じ候。』

次に明治學院出身の一年志願兵少尉樺引信一が旅順新砲臺にて負傷し赤十字社病院にあるを訪ひ、該方面の困難を開き守將ステッセルの豪膽聲望に感じて大に之を稱揚し、彼は何處まで東洋的なるや未だ明ならざれども恐くは城山の西郷に類する終を遂ぐるものか、去りとは惜むべき勇

士、又伴ふ萬餘の將卒も憐れむべきものと記してある。この推測は當らなかつた。
また敵將クロパトキンが沙河に於て政策の爲に見込なき會戦をなせりとの説には七八分の眞理あるべく、左すれば彼は命を惜む處丈け異なる新田、楠の類ならんといひ、但し命を惜むも種々の意味あれば匹夫の決闘を以て論すべからずといひ、何れにしても沙河會戦がかの老大妖怪帝國の基礎に一震蕩を與へたる大功は世界の爲に賀すべしといふ。

なほ、安東縣に設けたる基督教青年會の慰勞天幕は大に人望あり、毎日數百人の將士出入して通信や娛樂の益を受けあり、更に尙ほ準備整はば營口にも開く積りといひ、また云ふ。

『國民は殊勝にも戦争に對しては何事も忍ぶの慨あり、實に天祐なり、露國が百萬の軍を擧ぐるも恐るゝに足らず本年は五穀豊熟貿易繁昌、疫病無し、戦争には勝つ、國家萬滿の時に御座候』十一月十四日の書には我が英國通信員に托して送りし日露の劍と彈丸は先月末日に着し、天長節の祝會に全校生徒に示したりと云ひ、内地には恤兵の擧も盛に行はれ自家より毛布數枚を寄附したれば以て寒夜の兵士を慰ぶべしといひ、慰勞的天幕は鳳凰城と營口にも開くに至れりと報ぜられた。此天幕事業は日本基督教青年會同盟の事業であつて、彼はこの同盟の委員長として指導した。後に皇室より同盟に金壹萬圓を下賜せられ、寺内陸相は懇篤なる感謝狀を同盟委員長に寄せた。滿洲に於て直接に此事業に當りしものゝ中に弘前の人にして青山學院を出でし藤岡潔があつた。米國人

ではヒバード、グリアソン等が此に加はつた。此事業は後年世界大戰に於て英米の青年會も之に範を採りて、戦線の後方に於て之を實施した。

本多の日記には此年四月十五日唯一館にて日本宗教家大會の發起人會ありしと記してある。之に關聯しての次の記事は特に注意すべきものである。これは希臘正教の山田慥亭なる人が本多の死後横濱貿易新聞に投じたるを弘前の川村敬三の弟で青山出身なる川村銀平が注目して先年著者に送れるものである。この外方よりの交渉は特殊のもので自ら逆境の經驗多き爲に逆境にあるものに對する彼の同情の篤きを示し殆ど涙なくして讀み難きものである、こゝにその全文を掲げる。

本多監督を憶ふ

山田慥亭

「自分が本多監督を識つたのは日露戦争の際からである、日露戦争は人種や宗教とは何等關係の無い事は言ふ迄もないのが、而も當時露國に於ては往々宗教的反感に訴へて其國民の敵愾心を鼓舞する一部の人士があり、又我が國內に於ても敵國に對する反感其度を逸して所謂ニコライ教會に對する面白からざる事件の發生一度二度ではなかつた。

三十六年中滿洲問題が大分八釜しくなつて風雲頗る急を告げて來た時、東京の某新聞はニコライ教會露探事件なるものを熾んに書き立てたもので、其筆法に依ると全國重要な土地に派遣され

てある牧師傳道師は皆露探と云ふ事になつたのであるが、滑稽な事には、愛知縣の横須賀に居た傳道師を軍港横須賀と見違つて、露探軍港を窺ふと云ふやうな書き方もあつたやうである、然るに愈々日露の關係は翌三十七年に入つて斷絶し、砲火以て相見えるに至つては、案外にも苛立つた我國民の感情は下火となり、敵國に取殘されたニコライ師に同情をさへ表すものもあつたが、然し又地方へ往くと存外捌けない點があつて、卅七年二月八日函館に於ける同教會の會堂が要塞地帯にあるの故を以て牧師傳道師は他の被退去者と十把一束げに廿四時間内の退去命令を受け、一傳師の如きは駿河臺の同教會へ引揚げると、所轄警察署はニコライ師保護上差支へると云ふ體の宜い名目の下に、本人を其郷里へ追ひ立てたといふ始末。

次に同年三月中には縣下小田原に於て町民の一部と同教會との間に衝突が起り同じく四月へ涉つて静岡縣磐田郡萱間村村民と同教徒との間感情齟齬の結果約二百名の村民夜襲の擧に出でて、家屋器具を破壊し、負傷者をさへ出すの椿事出來、三州岡崎では町民が祭禮に乗じて會堂に損害を與へ、同教徒の墓を悉く壞倒し去れるがあり、其他全国各地の小衝突小事件は尠からぬ次第であつたが、當局者も新聞紙も之を公けにするのを避けたので前記小田原と萱間の兩事件が新聞紙上に見えた位で其他は傳はらずに仕舞つた。又教會側に於ても勉めて事件の表立つ事を避ける方針を取つたといふ理由は、さう云ふ事が外國、殊に露國あたりへ響くと、ソレ見たかと好箇の辭

柄を與へ、之を利用して其國內は勿論歐米にも随分尠くない宗教上の僻見に訴へて拭ふ可らざる悪感を煽動される恐れがあるからであつた。

既述幾多の衝突事件中、其の性質から言ふと參州岡崎に於て行はれた墓石壞倒事件の如きは、實に當面の生存者に對する絶大なる侮辱たるのみならず、所謂死屍を鞭つと等しき殘戾酷薄なる所業と云ふべきものであるが、幸ひ此の事件は當時少しも世間に傳はらずに済んだ、而も最も當惑したのは静岡縣磐田郡萱間事件である。其の頃の静岡縣知事は前警視總監龜井氏であつて郡長や所轄警察署長に旨を傳へて平和の策を講ぜしめたが劫々納まりが付かない、自分は當時の關係上事件突發の際急報に依つて同地へ出張した其の時の如きは判檢事が臨時豫審廷を其村に開いて漸く昨日引揚げたといふ時であつて、行違ふ村の人々の顔には尙ほ殺氣悽愴の趣きがあつて薄氣味の悪い事一方ならずであつた、仔細に事情を探ぐつて見ると村民許りが悪いでもなく、左りとて教會側が全然悪いでもなく、畢竟双方共五分々々の理非があるので容易に解け合ふことが出来ないのである、兩者の間に調停を試みると其當座は納まつたやうで歸ると又色々險惡なる情報頻頻として來る、若し此上復慘劇を演じ出すやうな事になり、夫が世間に傳つて流行を挑發するやうになつては一大事である、此點に付ては内閣や内務あたりでも餘程苦心であつた事は後日に至つて自分も知つた事である。

内には斯様な苦心の引續く處へ、皇軍連戰連捷の結果、露國の軍事俘虜が早や續々内地へ送られて、四國の松山には傷病俘虜も大分收容され、死亡者も生ずると云ふ有様、是が又一大事である、此時既に我が陸軍省には俘虜情報局なるものが設置されたのであるが、之は一千八百九十九年の海牙條約に於て新に成立した規定に基いて設られた未曾有の一新事例である、而して之と同時に同條約には俘虜救恤協會の民間に設立されることを豫期した條項がある、要するに此の救恤協會に關する條項は官設の情報局と相俟つて軍事俘虜の待遇を改善せんとする國際的意向を表明したもので、獨り情報局のあるのみで、民間に何等之と相應するものゝないと言ふ事は條約の手前から見ても世界環視の晴れの大戦争の上から見ても其儘には捨て置けぬ事である、然し協會は法人組織に依らなければならず、隨つて事業の規模は餘程大きくなければならぬので、夫は廣き社會に於て相當に顧慮される事としても、是非共此際日本の正教會が起たなければならぬ事は即ち露國俘虜宗教上の要求是れである、ポーランド人のロマ教徒、猶太人の猶太教徒等も其中には無論あつたが大多數は露國の正教徒である。然るに宗教上の事に蒐けては最も事情に暗い軍事當局者は耶蘇教と云ふ名が付けば何派でも差支ない位に思つて、松山俘虜收容所では死亡俘虜の葬儀を新教派の宣教師に依頼した事もある、或は佛國宣教師を頼まうかの様にも見えた、我々は之を傳へ聞いて眉を擡めざるを得ざると共に、最早一刻も猶豫すべきでないとは山々思つて居たが、

扱顧ると切々以て容易に手を出せる仕儀ではないのである、前にも述べた衝突事件は控へて居る、左なきだに四面楚歌を聞くが如き想ひある矢先、敵國兵士の爲に働くといふが如き事を悪く取られると、益々立場のない窮地に陥らざるを得なくなる、西を向いても東を向いても鼻の支へるといふのは實際當時の我々の境遇であつた、然るに計らずも本多監督と一通の手紙を往復したのがそも／＼局面開展の發端となつたのである。

當時各地に發生した幾多衝突事件の顛末と其真相とを最も能く知悉し得た自分は之を防ぐの途は到底事後の彌縫や一時の糊塗の以て能くすべきものでないと云ふ事も亦解し得たのである、然らば之が根本解決は如何、彼等教徒を飽迄多數壓迫の下に押込めて、舉國一致の此の一大事業から除外するが如きは決して當を得たものでない、現に彼等は二百四十人の出征者を出し、四十九人の戦死傷者即ち出征者五に對し約一人の血と肉とを犠牲に供して居る、斯くて尙ほ露探呼りの非國民扱ひをするの不條理千萬なるは言ふ迄もなく少くとも戦後に郷黨反目の餘毒を胎し、大にしては國民統致の一角を破壊し去るものである、左らばとて寄らず觸らずの敬遠主義も思慮ある業とは云へぬ、要は邦家安危の岐るる曠古の此の大戦争が心から彼等の肌身に添ふやうに仕向けるに在る、斯くて戦終つての後の歡樂にも苦痛にも、多數と共に其分を同ふする名譽と權利とを自覺せしむるが、抑々根本解決法であると考へて、一同と共に或る戦時奉公事業を計畫し、之に向

つて全力を傾注させやうとした處が、不幸にして其の事は晝餅に歸し、更に別途の策に出でんものと苦心の折柄、大日本宗教家大會なるもの開かるゝと云ふ事を聞いたのである。

神佛耶各派の人達が集つて日露戦争は人種宗教には何等關係のない事を宣言しよう云ふのが其目的である、然るに當時ニコライ派へは何等相談も通知もなかつたのを見て、自分は妙に感じた、此大會にニコライ派を抜きにしこの宣言が果して幾何の權威を有するであらう、若し又之を加へた場合如何に其宣言が事實と相俟つて生きて來るで有らう、肝腎な骨子を閑却されてあるのは甚だ遺憾なことである、其處で自分は其當時未だ本多監督とは親しく面談したこともなかつたが、如上の感じと前述衝突事件やら急に逼つて居る露國俘虜の宗教的事業やらを書列ねて送つた、當時大會の發起者中に基督側に小崎氏あり井深氏ある中に、面識もない本多氏を選んだのは何んの故であつたか今では自分も忘れて思ひ出せない、すると本多監督から折返して左の返書が來た。

「陳者正教會に對する地方人の感情舉動并に捕虜露國人宗教上慰藉等に付御懇示の趣敬承仕候、御蔭を以て眞狀を得候事深謝仕候、其筋へ通知の好機を失はず實狀を具して考慮を下さしむ様可仕候、御承知可被下候。

宗教家大會に就ては貴教派の誰殿にか是非御相談可仕存念に御座候處、幸ひ文通に付き申上候右は元來淨土宗黒田眞洞と申す人より發言せられ過日發起人會を開き候處別紙の如き趣意書出

來に相成候随つて猶數十名の賛成員を得て今日中に發表可致事に相成居候貴教派より可然方五六名の賛成者を得度候間、愛兄に於て其勞を御取り被成下候へば幸甚と奉存候、主教ニコライ氏にも其一人に相成り被下候へば至極と被存、發起人會の節も其説有之候得共、却て御迷惑になるも難計に付き發起人は先づ新教派文に致し置かんとの事に有之、不申上由に御座候〔下略〕氏の此一書が如何に沈痛なる境遇にあつた三萬の正教徒の上に局面を開き且つ戰國時局に貢獻する處あつたかは尙ほ稿を重ねて説明して置き度い。

本多監督の返書の結果は大日本宗教家大會にニコライ派からも出席する事になつた、而して當時社會が如何に之を觀たかは左の一記事を以て知る可きである。

「次て日本正教會即ちニコライ教會有志代表は大會の擧を賛する祝文を朗讀して滿場の拍手に迎へられたり、由來ニコライ教會と露國の關係に就ては無稽の想像を逞うして疑惑を此間に挿む者多く……ニコライ派を誹謗譏誣する者あるは吾人の私に遺憾とする所なりき、吾人は宗教家大會の會衆がニコライ派祝詞を喝采したる聰明の知解と寛洪の態度とを特に承認せんとするものなり。」〔毎日〕

更に本多監督は桂首相に面語せる機會に於て自分が本多氏に宛てた書中の委曲を盡くして、社會の誤解より來る日本正教徒の悲痛なる境遇を叙して注意を促がし且露國俘虜の宗教上の要求に

適當なる顧慮の切要なるを説ける結果、桂首相は尙ほ一層事情を明かにせんが爲に正教會の何人かと會見すべく之が斡旋を本多監督に囑するに至つて、自分は五月八日同首相を三田の邸に訪ひ會談するところあり、更に又本多氏は同國の好みある當時の珍田外務次官に介するありて、同次官とも會見を遂げた、一方には當時の有松警保局長を屢々内務省に訪ふて例の衝突事件に關する豫防と善後策とを打合せ等、局面展開の途は是で十分開けて來たのである。

事茲に至つては唯爲すべく又爲さざる可からざる事に着手するにある、一旦計畫して畫餅に終つた奉公事業を再計畫に附するか或は他の事業を起さんかと考慮されたが、然し我が出征兵士に對する事業は世間に於て既に其人と方法とに乏しくない、而も露國の俘虜に就ては正教徒の手を待つより外に途がないのである、兩兎を追はんよりは一方に全力を傾注するに如かずとなし、其處で集まつてゐた資金は全部之を恤兵部に献じて、更に資金を募集して俘虜慰安事業を開始する事にした、戰爭の終局までには露國俘虜の數七萬餘の大多數に達したのであるが、從來最も同教徒を睨らんで居た軍事當局者と親しく接觸するに至つて誤解を去るの機會を得たのみならず、元來此の事たる、同宗同信に因む好意に伴ふは無論であるが、一方より見れば、之も亦戰時の奉公事業であると同時に國際事業の片割れである、海牙條約に於て豫期されてある俘虜救恤協會の一部事業を現實にしたのである、而も當時其實に於ては俘虜救恤協會其儘の事業と謂つても過言で

なかつた、嘗に宗教上の要求が充たされた許りでなく物質上の事にも随分顧慮を費やし或は通信の中介にも手を盡した、三十八年四月（其以前の記録確かならぬが故に省く）から卅九年二月まで十一ヶ月間に取扱つた俘虜郵便は、

發	送	三千三百三十三件
内	内國送信	二千八百八十一件
内	露國送信	四百五十二件
受	附	一千六百二十七件
内	内國發信	千百七十九件
内	露國發信	四百四十六件
發受總計		四千九百六十件

幸ひにして衝突事件は其後全く跡を絶ち、俘虜慰安事業に全力を傾注して戦時の要求を充たし、帝國全勝の榮譽に参加して憚るなき丈けの努力を捧げ得た其端緒に遡れば全く他教派に監督たる本多氏の好意と斡旋に在る、此點は日本正教徒たるもの、永久忘れてはならぬ所の其の恩人であると共に、社會も亦海牙條約の新條項を空文に終らしめなかつた帝國の名譽はそも／＼何者に依つて築かれ又何人が其途を啓いたかを記憶して可なりであらうと思ふ。

最近氏の溫容に接したのはニコライ師葬儀の際であつた、今既に其人亡しとは如何にしても思

へぬ、人事まことに測り難いかな。」

此年十月青年會館にて昨年六十一歳にして逝ける片岡健吉の追悼會があつた。彼は土佐の政治家衆議院議長後に同志社々長であつた。本多は此會に臨み、先づその献身犠牲によりて武士道を思ひ更に目前の戦役から武士道の聖化を思ひ、次に品性の勢力を考へてその尊重を説いて、追悼の辭とした。

この日露戦役の央なるとき、十一月三日の天長節日に植村正久は東京神學社を開いた。十二月十九日には押川方義は滿洲行の途に上つた。前者は外援を借らず日本の傳道者を養成せんと欲したのであつた。後者も全く獨立して大に爲すあらんことを期し、東北學院をも擲ち、恐らく本多の止むるをも聽かず新天地を開拓せんとして立つたのであらう。

さきに記したメソヂスト六派合同の基礎案は、米國南北及び加奈陀の各教會總會は之を是認し、爲に全權委員を擧げたが、福音教會は時機尙早として應ぜず、美晋派は米國にて組合教會と合同の協議中なりとて加はらず、同胞教會は不定であつた。これがこの年末の形勢であつた。

此の日露戦の年のクリスマスに彼は維新の當年を回顧していふ。

『天下將に亂れんとす。劍を杖ついで慨然として獨り自ら誓へる青春の時を回顧すれば、風霜凜烈森嚴の情に堪へざらんとす、然れども同時に重任背を壓し荊棘足下に充滿して殆んど究まれるの記

憶を起さざるを得ず。翻りてクリスマスの時主の前に跪き、主よ我に何をなさしめんとするやと問へば心地頓に謙虚平易の體を得、靜かにして安く、勇ましくして活潑なるの感に充たさる」と。

二十、日露戦役の時(二)、歐米行等

彼は年頭弘前に歸省したが一月五日には青山に歸り同日九段教會にてエム・シー・ハリスを歓迎した。ハリスは明治六年に來朝せる美以派宣教師の一人であるが、後歸國シカリフォルニア州附近の日本人に傳道したる日本の熱愛者であるが、今東洋宣教監督として再び渡來したのである。

十四日には二度ハリスの歓迎會があつた、午後は青年會館で江原素六司會し平岩愼保、徳富猪一郎、島田三郎、尾崎行雄、夜の富士見軒では井深梶之助、津田仙、小崎弘道、元田作之進、柴田禮一、珍田捨己が歓迎辭を述べた。邦人の爲に盡したハリスの勞はかく認められたのであつた。

一月十五日、青山及神田に於ける『故を謝し新を祈る』と題する本多の演説は未曾有の新年に應じたる力籠れるものであつた。彼は日露戦役の前年の戦勝を感謝すると共に兩國及諸國の關係を回顧し、比較研究し、國土の大小、政治の比較、宗教關係、友邦關係、即ち露の友たる獨佛は其間に反目あるも、我が友たる英米の調和の存するを叙し、戦勝によりて我國民の眞價を天下に認められしこと、國民の心境廣くなり、謹嚴質實の氣風を鼓吹し、特に皇室の尊榮大に揚り、學國一致の精

神大に振ひしこと、軍費の憂も意外に甚しからざりしこと、對手に改革を促し終には露も立憲制となるべきこと等を整然として論斷した。その梗概は遺稿第四篇に見ゆる。

十七日彼は珍田捨己を訪ひ、ハリスより皇室に聖書献上の希望あることを告げ同意せられた。此日徳富猪一郎から桂首相の言を電話にて傳へられた。歐洲行は二人に決した。委細は珍田に謀れしことであつた。

十八日長女まり子は青山出身の傳道者宮之原信次郎と婚約した。まり子は温良貞淑、その實母の面影を傳へしかと思はれる。宮之原は着實にして地味なる青年であつた。寧ろ青年よりも既に老成人であつた。二人の結婚はこの年十二月二十七日に行はれた。

一月中に彼と桂首相及小村外相との別種の交渉が行はれた、此時外務次官たりし珍田捨己も其間に立つた(珍田とは津輕家々範制定に就て此頃屢々會合して居た)。この政府當路者との交渉は基督教徒として歐洲に赴き、我が義戦の旨を博く説示すべきの使命に關してである。この使命を帶ぶるものは本多及び井深梶之助であつた。兩者相伴つて桂及小村に會見し、また大隈重信伯を訪ふた。珍田を通じて政府は補助金を與へた。尙ほ此行は同時に歐洲に於ける青年會の會合への出席を兼ねたのである。

二月六日發、戦地の著者に與へられし彼の書中にはこの消息を示して居る。予は一月下旬、沙河

左岸の冬營に於て青山出身の川澄明敏が慰問使として來れるに逢ひて其旨を報じ、また弘前の第八師團が中將立見尙文の指揮下に黒溝臺の雪を踏んで露軍を迎撃せし事を書き送つたが、彼は之に對して云ふ。

『仰の通り黒溝臺附近の戦は東奥男兒等其衝に當り随分激烈なる勝負にして損害も少からざるよしなるも、結局は例に依り我軍の勝利に歸し候よし大賀仕り候、此戦は初め小戦ならんと思ひしに中々の大戦に有之候由、果してグリツベンベルグ將軍の獨斷ならん乎、随分亂暴なる事に御座候、しかし裏面には沈着の出來ぬ事情ありて損益を顧みず一飛躍を試みたらんとは信すべき事ならんと遙察仕候。』

陸奥の武夫は幾分か寒氣に耐ふることなるべしと存候得共如何にせん滿洲の寒天に夜討、朝掛、數晝夜連續の戰鬪にては嘸かし困難ならんと被存候』

この夜討朝掛などの古き兵語が彼の昔の軍學を想はせる、尙ほ予が北清事變の際に知れる露の一士官イオハンゼンなるもの、捕虜となれるに會ひしと報せしに對していふ。

『捕虜の一士官偶然舊知の人なりしとは奇遇に候、さぞかし興味ありしならん、簡様の奇談を承り候へば、どうか一度フロントに參り度心勃々と興り候、併し毎度老輩のみ人前に出シヤバリ候は餘りセルフキツシュの様に御座候間昨年以後は可成退守を旨と致し候へども、此度は偶然に佛

國巴里に開會の萬國青年大會に臨席すること、相成、三月四日横濱解纜のプリンツエス・アリス(獨船)にて出帆(井深博士同行)の積りに候』とて或は彼地にて右の捕虜のことを露國代表者に談ることあらんといひ、次に左の言がある。

『日露戰爭が露國の立憲を促すに至ることは間接の成功とは申しながら、日本が世界に貢獻する最大成功ならん乎、否、天が日本を用ゐて今世紀中大經綸の主要なる一部を成さしむることならんと存じ候、日露の大戦とクリスチャン、コンシヤスネスとレコンサイルする點は此邊を外れざる事と存じ候(此外にもあるべきも)、五十萬の同胞が滿洲の雪野に在る間に我々兩人は印度洋を経て歐洲詣をするとは些と樂過るかと思へ候得共是も亦一種の遠征なること、御許し被下度奉存候必しも彌次喜多を氣取る積には無之候、時節柄を顧み大に奮發したる積りに候』

これが前述の彼の戦時の使命をほめかせしものである。その任務は重大であつた。尙此書中に云ふ。

『日本メソヂストのマクドナルド氏は昨年歸國して心臓の攝養に懸り居り候處、一月二日旅順開城の電報を読み、餘りに喜びて心臓に激動を興へ候爲め、其隣間忽然長逝せし由に御座候、彼カナダ人なるも實に日本を愛するの人なり、されども斯くまでに日本の利害に興味を有し得るとは多くの人には解しかぬるならんと存じ候、邦人には未だ世界的思想の如何に廣く又深くあり得べ

きかを味はざるもの寧ろ多き方なり、以て鑑となさんと欲する所に御座候」

終の二月二十七日發の書には、彼名古屋に至り、捕虜將卒を慰問し中將フオーク、少將イーラム等に會ひしことを記し、尙ほ一の依頼したきことがあるとて、戦地から基督教の思想を充たせる英文の書を、巴里の行先に出し呉れよとのことであつた、『或場合に小生等の働に光彩を加ふること可有之と存じ候』と附記してあつたが、此書は奉天占領の三月十日に着し、大戦後の軍務にまぎれて時を失ひ、遂に彼の依頼に背いたのは、眞に遺憾の至りである。此書の終に前の書の意義をくり返して、『此際前線に往かずして歐洲下りとはちときまり悪き様に御座候得共誰かは參るの必要有之候間奮つて參り可申候』とある。

日露戦争中の歐洲行即ち彼にとりての第二回の歐洲行に就ては自ら記すところがある。

三月四日プリンツェス・アリス號で井深と共に横濱發、九日上海に達し、領事館の松岡洋右、日本郵船會社の黒川新次郎、木村齊雄に迎へられ、翌十日奉天大勝の快報に接し驚喜した。十五日香港、二十日新嘉坡、二十二日卑南、二十六日コロンボ、四月二日アデンを経て紅海に入り東にシナイ山脈を仰ぎ、地中海に入りエトナ火山、ストロンボリ火山島を眺め、十一日ナポリ灣よりヴェスヴィウス火山を望みてその爆烈を顧み、ナポリに上陸してボムペイも見た。翌日羅馬に着し外交官今井忍郎夫妻に迎へられ、公使大山綱昌にも逢つた。十六日の日曜の朝は英米人の會堂で井深と共に戦

争と傳道に就て演説し、夜は美以教會にて八百人許の伊國人に談り、日露戦争に關する基督教徒の所感を述べた。伊國人の日本に對する感情は盛にて司會者たる牧師も演説し激烈に露國に反對せる爲に聽者たりし某露國婦人を憤怒せしめた。

日記には十七日車中に傘を置き忘れ今井夫人が代りを買ひ求めくれしこと、十八日、扁桃腺の膨脹に患みしこと。十九日佛國新聞記者來訪のことなどを記す。

ナポリより羅馬に至りサン・ピエトロの屋上より大觀し、またヴァテイカン、カピトルのミューゼオ、ヴァイラ・ボルゲーゼ、サン・ジョヴァネ、カプシン寺、及びカタコンベも見た。

羅馬には米國美以教會の經營する男女の學校があつた。一夕宣教師クラークの宅にて集會あり、彼は一の短話をなし、羅馬に來りて懷郷病にかゝつた、その理由は伊國の風光の日本に類する爲である。また教會堂が餘りによく我が佛寺に似て居る。これは美術として珍寶なれど宗教の目的より見て如何、前代基督教の殘骸の如くではないかといつた。

伊太利に自由民權説盛にて社會主義の普及したるは一面進歩を表するも、また社會に疾病多きを示すものと見らる。日露戦に關し我に同情するは喜ぶべきも、餘り輕燥にして客氣にはやる爲尊敬し得ぬ。國中資産に富めども強大を誇り得ぬは強國中に介在する爲ならんといふ。

二十一日ゼノアに一泊し、二十三日巴里に着し、翌日留學中の五來欣造の案内で市中を見物した。

二十六日より萬國青年會大會に列した。二十箇國より集れる總人員七百二十名、米國のジョン・アール・モットは議長であつた。瑞典の皇族や獨英の貴族もあつた。本多は各國一名より成る委員會に列した。議事のこと更に判らぬと日記に記す。それで大集會には餘り出なかつたが、二十七日井深が日本を代表して演説せし時は出席しありて、その満堂の拍手を受けたる良演説を喜んだ。次で露國の代員が語り、人民が自由を渴望する趣旨を述べて同情を得た。此一對の演説は大會の光彩であつたといふ。二十八日青年會の創立者ジョージ・ウイリアムズを訪ふた。彼は一八二一年生れで今は八十五歳であつた。彼の青年會創立以來五十年、巴里大會はその記念であつた。但し眞の青年の爲の事業は一八四四年以來で六十年を過ぎて居る。

同日公使本野一郎及夫人より晚餐に招かれた。三十日公使館で我武官で倫敦より來れる宇都宮太郎及瑞典より來れる明石元次郎に逢つた。二人は共に歩兵大佐であつたが後に何れも大將となつた。戰役中明石の露國內部攪亂は著名な談である。

本多の佛國觀察の一端はその政教分離の實行に向けられた。政治家の宗教を嫌ふもの少からず、革命時代の覆轍を踏むなくば幸なりと云ひ、日本は政教分離容易に行はれ歐洲より一日の長ある如きも政教分離と宗教撲滅とは一ならず、基督は政教分離の元祖なれど、また宗教振作の張本なりといふ。

巴里の教堂も羅馬と等しく日本の寺院に類して眞の生命が疑はれた。佛國は露國の同盟にてまた莫大の債權國なれば露の勝戦を望みしもの多かりしも、敗戦によりて彼の國內の醜惡暴露せし爲今は輿論公平に復して日本に同情せるを見た。

巴里の青年會大會は三十日トロカデロの大館にて創立五十年記念祭を行ふて完結した。出席は六千人に達した。翌日は和蘭のウトレヒト市近傍のザイストに於ける學生基督同盟の大會に向つた。此地は日本に來りしフルベッキの生地であつた。

ザイストは清閑なる小邑にて富家の別墅も多い。學生大會の會場はモラビアン教徒の殖民教會堂で、裝飾も無き清素な堂であつた。集會者は百十名婦人三十二名で巴里の如く大勢ならねど代表の國數は却て多く二十九國であつた。

五日の會議で次回開會地を日本と決定した。六日彼は聖書に關して演説し次に各國一人各その改信のことを談るので之に加はつた。My Conversion と題する英文はこの時以後諸所で讀まれしと見ゆる。これは遺稿にある。七日の日曜日午後東洋に關して井深と二人にて談つた。次回大會費として六八四封度を受けた。此地方の人々多くは初めて日本人を見ると之を珍らしとし、特に戰勝の評判高き爲に逢ふもの毎に脱帽した。小兒は前後に取巻きて禮を爲すものもあつた。

五月八日ザイストを發し白耳義に入り、アントワープに着し、美術館で此地に生れしルーベンの

大作を見た。特に基督の十字架に昇降する二枚の畫を感賞した。なほ領事諸井六郎に逢つた。

五月十日ブラッセルで青年會館で談り、十一日公使加藤恒忠の饗應に與り、書記官大島富士太郎も列席した。十三日二回ヘーグ青年會館で談つた。談が餘り政治的であつたので餘り聽者に喜ばれなかつたといひし人もありしとか。夜も同所で一般公衆に談りその方が結果がよかつた。十四日アムステルダムに移り、大學小講堂にて學生に談つた。和蘭は日本開國の案内者たりし關係もあれば頗る親しきを期したが、露國と經濟關係深きと兩皇室の間も近きと、更に日本の武威昂ると共に蘭領印度領有の危険を感じるに至りて薄氣味悪く思はれたらしい。

ここに彼が旅中に認めし紀行文の一端を示すべくライン河溯航の一節を載せる。

『前回の通信は和蘭陀アムステルダムまでの記なりと記憶せり。扱て五月十六日には右同所を發し、ライン河を溯る事となれり。是より十日間に於ける見聞中の數點を記すべし。

アムステルダムを發せしは午前九時半なりしが、午後三時にコローンに着せり。此の地は大聖堂を以て名高き處なれば、兎に角一泊する事となし、カテドラル(大聖堂)の近傍なるホテル、ミナルヴァに投宿せり。寢室を定めて、取敢へず此の寺院を一覽する事となせり。前面の双塔天に聳え立つ、其の高さ五百尺ありと。教堂の塔としては世界第一等なりと云ふ。四面玻璃窓の繪畫甚

だ美なり。前面と左右の入口を飾れる幾百の彫像精妙なり。時代の後れたる(之を巴里のノートルダム等に比して)丈け彫刻の精妙なるは自然の事なり。今日は久し振りにて髪を刈り、飽くまで食ひ、入浴して安眠せり。髪を刈らざりしは閑を得ざりしが爲なり。飽くまで食ひしは、此の日まで三日間、某老婦人の客となり、丁重に接待せられしかど、老婦人の事とて食量の見積り兎角少量なり、遠來の珍客さう無遠慮に請求も出來ず、いと品よき人となりて三日を過せしは一種の難業なりき。是と同時に入浴の機會なかりし事も一の苦痛なりき。必要の路金を懐にせる歐洲の旅なれば、滿洲出征の人々に比すべき様もなければ、萬事は日本的にあらずして、些々たる物を缺くが爲めに、他の金玉も日本旅客を慰めて甚だ不足あるが如きは一種の出征と認めざるを得ざる所なり。翌日は汽車にてコローンを發し、三時間許りにしてラインの西岸コブレンツに着せり。此處はモゼル河とラインとの落ち合ふ處にして、ライン地方のジブラルタルと稱せらる。兩岸の城砦巖として侵すべからず、山紫水明の間殺氣の磅礴するを見る。人をして慄然たらしむるものあり。是より上流ビンゲンの間尤も風景の勝りたる處にして美麗なる汽船の往復頻繁なり。生等もコブレンツより汽車を去りて、美麗輕快なる汽船に移り、流に溯りて西岸の田園、市邑、城砦、舊墟を送迎し、午後三時ビンゲンに達せり。此の五時間に經過せし處は、兩岸高くして狭く、時には嵯峨として攀登り難き處も少からざれども、概しては兩岸の丘陵大浪のウネリの

如くして、自ら大陸の風趣を脱せず。多くは葡萄園にして、いと丁寧に耕耘の効を顯せり。生等は佛蘭西の平坦耕地人工の美に飽き居たれば、ラインの谷地こそ我が野趣を飽かしむる者ならんと思ひしに、此處もヤツパリ文明の被服に戦魔を覆ひし處なるを見ては少しく失望せざるを得ざりき。然れ共是は全く注文の違ひにして、ラインは元來斯のごとき者なりしなり。扱て我が船は定時を違へずビンゲンに着しければ、谷地大いに開けて大世界に臨みたるの感あり。此處に再び汽車に移りて二時間足らずにしてハイデルベルグに達せり。汽車の都合にて一泊するを便として停車場に程近きグランドホテルに投じ、直ちに舊城地の公園に歩を移せり。城は一千尺もあるべき高丘の側面に突出せる中腹にありて、數百年の古色蒼然たるものなり。緑滴る樹林に囲まれたる幽邃の地なり。園の一角より下方を眺むれば舟楫の便を有する河水市街の一方を回りて、遠く平野に向つて奔流し風景絶佳なり。我が國笠置山に登りて山下を眺めたる趣あれども、人烟の濃密市區の壯麗なる笠置の類にあらざるなり。」

ハイデルベルグよりスツットガルトに移り、ザイストの學生大會にて會ひし獨逸學生同盟の委員たりしグンドルトに迎へられてその家に伴はれた。グンドルトは内村鑑三の『余は如何にして基督信徒となりしか』を獨譯し後に日本に來た。その家族十二人、僕婢數人、長幼の序整ひ、親和の氣、

信仰の風、家内に充ち、こゝに獨逸宗教の力が家庭にあるを知らしめた。夜青年會館で千人許の聽者に對し、グンドルトの通譯により井深と共に談つた。會館は近頃の落成で歐洲第一の青年會館なりといふ。翌日會の幹事に伴はれ故將軍ワルデルゼー伯の妹なる老貴婦人を訪ふた。婦人はワ伯の遺稿に日露若し開戦せば、日本の取るべき戦略は斯くかくあらんと記したるもの、今回の實戦と符節を合す如くなりしと談りしとか。これ蓋し北清事變の際獨帝が支那に派遣して聯合軍の總司令官たらしめしワルデルゼー元帥のことならんと思はる。

スツットガルトより瑞西に入りバーゼルに三日滞在し、青年會館にて三百人に談つた。一日ルツエルンに至りしも、雨天にて連山の美を見なかつた。夜は三百人許の聽者に談つた。

次に南獨に入りてミュンヘンに行つた。有名なる麥酒の産地、天主教盛にして青年會振はず、學生群をなし決闘の蠻風盛にして路上顔面に繻帶し行くもの大概決闘の爲にして、之を獨逸の元氣といふは不當である。日本武士は容易に劍を弄ばぬ。麥酒をかぶり、劍を弄する如きは恥づべき行であると評した。著者は彼が嘗て日本青年の劍舞を見て、武士道の墮落だと評したのを聞いた。彼はミュンヘンではかゝる暗面に注意したが、かの著名なる美術館は觀賞して價値を認めた。

ミュンヘンには米人デヴィスが留學しあるに逢つた。彼は同志社に來りて新島襄を援助したデヴィスの子、身長六尺に餘り、風采父に似て、眞摯寛容國士の風あり、遠からず日本に來る、日本青

年に交るに適當ならん、その成功を祈るといふた。

ミュンヘンより塙都ウイーンに赴いた。ドナウ大河に沿ひて下る大陸の中路は眞に大陸的なるを見た。路傍多くの十字架及び辻堂の立つを見て『天主教と佛教と愚民を弄するの術、殆んど其揆を一にするが如し。人情由來東西なし、可笑しくも亦哀れなり。』と記した。

五月二十七日ウイーンに着いた。公使館の松本書記生來り迎へて共に一のパンシオンに至れば其處に元良勇次郎博士及紳博士の二名に逢つた。ウイーンの一所見は城壁を毀ち堀を埋めて大路とした跡を見て之を東京に應用しては如何と考へた。之に反し巴里が一八七一年籠城の儘なるは再び籠城せんとする心か縁起悪しといつた。然し現代戦では巴里の城壁の如きは何等の効なきを思はなかつたらし。

ウイーンでは公使牧野伸顯夫妻に歡待された。時しも日本海大戦の捷報が公使館に達して互に祝意を表したのは異境にありて最も快心のことであつた。この時英國大使館のチャプレンなるヘクラなる人が懇ろに我が二人を導き演説の通譯をした。彼は獨帝幼時の家庭教師であつた。その言によれば市の道徳頗る亂れ信仰も振はぬといふ。されば新教も盡力し青年會も運動し會館もあつた。その役員計りて一新教會堂で集會せしが五百餘人の聽者あり二人とも演説した。此地觀光も餘り爲し得ぬ程に多忙なりしは幸であつたといふ。歐洲紀行はこれで斷たれて居るが、日記によれば廿六日

洪牙利のブダベストに至り翌日演説、次で咽喉熱を覺えて苦しんだ。卅日ウイーンに歸り翌日牧野公使に招かれ會餐し、フホナツドといふ教會にて六七百名に談つた。

六月二日伯林に着し市中を見、三日にはポツダム王宮を見た。五日ウキッテンブルグに到りルツターの家を見て其質朴に感じた。六日ライプチヒにてまた元良勇次郎に逢ひ、その案内にて文豪ゲーテの遺蹟を見た。夜は市青年會で三百餘人に演説した。

七日伯林大學を訪ひ大谷家の一連枝と辻高衡とに逢つた。八日は有栖川宮御出立と記す。農學者玉井喜作に逢ふ、某學生會にて演説す。

九日丁抹のコペンハーゲンに至り、十日市中を見物し、夜は青年會で八百餘人に談つた。十一日日曜美以教會で『我が改宗』を談つた。十二日海を渡り瑞典ゴーテブルグ、十三日諾威クリスチアナ、十五日引返して瑞典ストックホルムにて公使秋月左都夫に迎へられ、公使館に泊す。公使は自ら諸所を案内された。十八日同地トリニテイ美以教會にて百五十人に談る。二十日青年會館にて四百人に談る。二十一日王宮内の臨時議會開院式に列し老皇の臨御を見、その聲朗なる式辭を聞く。二十三日クリスチアナに向ひ、翌日ドラメンに至る。諾威の國家瑞典より分れて獨立せんとする際として東洋戰勝國民として大に歡迎された。二十六日諾威青年會同盟創立二十五年祝賀に臨み演説、二十九日コペンハーゲンに戻りキールを経てハムブルクに至り、七月一日伯林よりケルンを経て白

耳義リエージュに行つた。

七日ブラッセルスに至り、外交官大島富士太郎に迎へられ、五年前の宿に入り、またウォータールーを見る。十日アントワルプ、十一日海を渡りて英國ハリチ港に上陸して倫敦に入り、青山出身の外交官龜山松次郎に迎へられた。十二日聖ポール寺院、ウエストミンスターを、十三日動物園と青年會館を、十四日美術館を見、荒川領事方にて戦時外債募集の任を帯びし高橋是清に逢ひ、十五日ドクター・バーナード孤女院記念祭に列し、十六日シテイ・テムブルにカムベルの説教を聴き、十八日青年會館にバックストンの會に出でた。十九日カンタベリ大監督、ロンドン監督を訪ひ下院を傍聴し、廿日救世軍營を見、また弟西館武雄の爲に英國の教育書を求めて郵送した。廿一日龜山松次郎に招かれ日本人俱樂部に到り渡邊千春に逢つた。

七月倫敦滞在中一日巴里にて會ひしジョージ・ウイリアムズの家を訪ふた。それは聖ボウロ寺附近の呉服店であつた。先づ青年會萬國委員よりウイリアムズの子に宛てたる紹介状を持ちて行き先づ其子に逢ひしに『暫く』といはれ、その邸宅に案内さると思ひしに何ぞ圖らん、老人は事務室の傍なる一小室に坐して店務を見て居た。數分談りて、彼は番頭をして案内させ、店内の構造と設備を示された。ウイリアムズは英人としては小柄にて溫和誠實の徳相貌に顯はれ人をして覺えず欽慕の情を起さしめる。然るに彼は此年内に八十五歳の高齢を以て逝いた。青年會の爲六十餘年の努力は

偉大であつた。翌年一月本多は東京に於て彼の記念會に演説した。その稿は遺稿にある。

七月二十二日彼は蘇國に入りエディンバラに到り、翌日王城及び聖ジョージ教會を見、二十四日宗教改革の雄ジョン・ノックスの墓を訪ふた。それよりレーク・デイストリクトを経てケジツクにて諸集會に列し、卅一日倫敦に歸つた。其處にて杉森此馬に逢つた。

歐洲大陸の旅の便は概ね青年會の機關に頼りし如く、演説も多くは青年會館及び教會で爲し、宗教を説くを主として政治の問題には間接に觸れたらしい。これは宗教家にして始めて可能であつた。然して青年會同盟を組織擴充した米國のモットの如きが彼の爲に道を具へたと見られる。我が政府當局者の内意を受けし爲、我在外外交官もまた便宜を供したのであらう。尙ほ接觸せし宗教家多からんも、英のウイリアムズ及びカムベルの如きを除けば顯著なる人物は少なかつたらしい。

八月一日公使加藤高明等を訪ひ告別、二日バックストン老人に會見寄附金を受け、三日公使館附大佐宇都宮太郎を訪ひ長談、四日大佐の案内にて海陸軍クラブに至り、またケンシントン博物館を見、五日キユー・ガーデンを見、麻生正藏に逢ひ、六日麻生及杉森此馬に送られてサザムプトンより出船、ポーツマス軍港に英佛大艦隊の集まれるを見た。

十五日紐育に着し石川和助、河合龜輔等に迎へられて日本クラブに投じた。これより井深と別れて單獨となつた。翌日ペンシルヴァニア州のアレガニー大學よりエル・エル・デイの學位を贈りたし

との申込に接したが直ちに辭退した。嘗て何處にあるやも知らぬマウント・ヴァーノン大學からドクトル・オヴ・デイヴィニテイの學位を贈つて來たが一夜の宿も許さずに返却した。それは既に十餘年前のことであつた。彼はかくの如きは反省進徳の工夫を凝らし居る一成人の頭上に、背後より無心の小兒が草履を載せたるに等しいつた。

此時米國のポーツマスでは、日露の講和談判が行はれつゝあつた。彼は我が全權小村壽太郎、高平小五郎に逢つた。その隨員たりし弘前出身の辨理公使佐藤愛鷹、青山出身の外交官本多熊太郎にも逢つた。ポストンでは弘前出身の高杉榮次郎に逢つた。高杉はバンカー・ヒルの古戰場及びコンコードなどに彼を案内した。亦共にエマースン及びフリーツプス・ブルックスの牧せし教會に行つた。

八月二十八日にはポストンを去りて、また紐育に行つた。翌日オーション・グローヴに往復し、講和談判の大讓歩を聞き快々として樂まなかつた。其間モット、ヒューエット、ガウチャー及びデイ・エス・スペンサー等に逢つた。九月一日にはマデスンに至り會遊のドルー神學校を訪ひ、更にブロンズヴィルに行きモットに逢ひ、萬國委員會に列した。

九月七日ピッツバークを経て西ヴァージニア州ホイーリングに行つた。翌日更にオハイオ川の右岸に沿ひ、西南に下りハンティングトンに至り、その東方に近きバアボアスヴィルに至り、南美以教會監督ウイルソンに逢ひ、九日南美以の年會に列し、ウイルソンの紹介によつて演説し夜も傳道

會で談り、十日には傳道會社の書記セス・ワードと合同問題に就て懇談した。

九月十一日ワシントンに戻り田村哲、田村精一に迎へられた。田村哲は青山出身の科學者で此時カーネギー・インステイテュートにあつたので、その研究所や氣象臺を彼に示した。十二日ボルティモアに至り、會て長く青山にありしジェー・オー・スペンサーに迎へられ其家に泊し、十三日ガウチャーに逢ひ、青山學院に關して種々談るところあり、大に奨勵された。十四日ガウチャーに送られ寄附をも受けて、紐育に歸り、美以のミッション・ルームに至り幹部なるレナードに逢つて見ると、三派合同のことは忘れたるが如く、スキドモアは何も知らぬ如く、ボルティモアの愉快は何れにか飛び去つた如く感じた。それよりブルクリンに行つて、また石川和助、川島某に逢つた。其地一長老教會で演説した。

十七日東百三十三街樋口方で説教し、左近義弼に逢つた。十八日旅程を定め、石川の助力を受け、夜グラント・セントラル停車場から出發した。十九日加奈陀に入りモントリオールに着し、一日滞在二十一日トロントに着、加奈陀メソヂストのミッション・ルームにてサザランドに逢つた。二十日ヴィクトリア大學に學長バルワツシュを訪ひ、また日本に來りし宣教師ミーチャムに逢ひ共に教會總理カーマンを訪ふた。かくてメソヂスト三派の領袖との會見を遂げ戦時歐洲旅行の歸路經由の米國旅行はまた三派合同の促進に用ゐられた。

二十三日シカゴに着した。宿に至る馬車中に傘を置き忘れたのは羅馬の傘であつたらう。シカゴでは清水領事、中川邦三郎、島津岬等に逢つた。公園の鳳凰殿も見た。ストックヤードでは無慙を感じた。

二十七日カンザスを経てトベカに至り青年會を訪ひ、二十八日ワツシュバーン校にて男女六百人に談り、廿九日カンザス州サライナに至りウエスレアン・カレッジにて男女二百人に演説した。三十日南下して同州ニュートンに行つた。

十月一日ニュートンの美以教會及び青年會にて談りタラハンタに向ひ、コロラド、アリゾナ等を過ぎ、四日桑港に着した。エム・エス・ヴェール、エチ・ビー・ジョンソン、廣田善朗、安孫子貞次郎に歓迎され、桑港及びオークランドの教會、青年會にて邦語又は英語を以て數回談り、九日北に向ひポートランドに着した。工藤陽太郎來り迎へ博覽會に案内した。十三日シアトルに着し吉岡誠明等に迎へられ、古屋商店の集會にて談つた。十四日晚香坡に着し、翌日鍋木五郎の會堂にて談つた。十六日ターター號にて出發した。

彼は船には餘り強くなかつた。それでも二日目に三等室に至り上陸を拒まれて送還さるる邦人を見て憐然に感じた。また紐育で求めたウイリアム・ジェームズの『宗教經驗の種々相』を読んだ。二十一日の夜天真黒にして北極星天に煌めくを見て、

わだの原、浪風荒き暗の夜、北の御空の星いや高し

と詠じた。然して今晚より戀家の思頗切なりと記す。歐米の旅八ヶ月に近く、任務は果したれど國家の將來圖り難く、教界の事もこれより後が大事である。家を忘れて事に従つて居たが大海の上、身體も快からず、夢は故山に迷ふたのであらう。風浪も可成り高かつた。

かゝる際ジェームズは讀み悪かつたと見え、徳富蘆花の『不如歸』を讀了した。『他の小説よりは上品なれど餘り陰氣に過ぎる、主人公が知れて居ると思ふと形容も過ぎたりと思はる』と記した。次で讀むべき日本小説盡きてまた英書に歸るとある。

風波で船の行くこと遅く、行程を測つて跡は幾日と日々彼は數へて居た。また何と思ひてか十月末日の日記に、『レミゼラブルのウオーター戦を記す條にロード・ヒルが砲彈の破裂を指しつゝウエリントン將軍に向ひ「閣下不幸にして戦死せば如何なる訓令を我等に残さるか」と問ひしに將軍は「予が行ふが如く爲せ」と答へしといふた』と記してある。彼も或は已に繼ぐ者を思つたのであらう。

十一月一日も聖書の後にレ・ミゼラブルを讀んで興味を感じた。『船は動搖すれども波浪の壯觀は亦何とも言ひ得ず』と記す。三日の天長節には『軍旗を取出して室の入口に掲げ、見る人日本の祝日を知る』と記した。

五日漸く横濱に着し家族に迎へられた。其地の平田平三の美以教會で歐遊宗教談を爲した。六日青山學院全員に迎へられ澁谷に着した。

八日津輕家に伺候せしに伯爵より慰勞金を賜はり、また同家相談人の一人たることを托せられた。政府の珍田、教會のハリス等、歸朝して彼の逢へる人々は多かつた。

著者は滿洲の從軍を終り十日に歸京したが、自宅の門前に彼と青山學院の教師生徒とに迎へられて面映ゆかつた。其夜學院の演說會で著者は彼と共に演壇に立つた。

十一月中、國民作新會なるものが起つた。島田三郎、海老名彈正等が宗教精神を以て政治の問題を議せんとして組織したものである。彼も之に加はり公開演說も行つた。著者もこの會に列したが、會は永續しなかつた。

十一月末、彼は弘前に歸省し仙臺、青森等で演說した。十二月七日滿洲軍總司令部が凱旋した。青山の全校は之を迎へて門前に整列し、彼の娘靜子は他の一少女と共に大山元帥に花輪を呈した。馬車の戸を開いて副官が之を受けんとせしを元帥は制して自ら手を展べて之を受けた。元帥の邸は學院に近かつた。

二十一、明治三十九年

前年の外遊中に彼が面會した萬國青年會創立者サー・ジョージ・ウィリアムズは同年末に世を去つたので三十九年一月十四日には神田青年會館でその記念會があつた。此時の本多の演說はその遺稿に載つて居る。

二月には京都、神戸、名古屋、豊橋に赴き各所で演說した。月ヶ瀬にも立ち寄つたが梅はまだ早かつた。

二月二十七日彼は上野公園梅川樓に開かれた軍人遺族救護會の役員親睦會に列した。此會はさきに青山の幹事であつた松島剛が専心經營するもので不幸なる戦死者等の遺族救護を目的とし、朝野知名の政治家や實業家等の多くに評議員を託し教界からは本多もその一員となり、著者も陸軍關係で加はつて居た。此時會長は榎本武揚子で副會長は矢吹秀一中將であつた。梅川樓では日本料理で皆座蒲團に坐して居たが、宴進みて會長は各人に献酬せんとて、順次に周つて來られた。予は我師が如何なる辭を以て杯を辭するかと興味を以て見て居ると、やがて榎本子は彼の前に行て杯を勧めると、彼は微笑を含みつゝ、「御承知の安藤太郎の弟子です」と云つた。安藤は榎本の下に函館で戦ひ後に布哇の總領事であつたとき基督教に歸し、歸國して禁酒會長と爲つて著名であつたので、禁酒に關する限りその弟子といふたのであつた。眞に當意即妙の答であつた。榎本は「オー、それでは」と云つて杯を勧めず、次に予の前に來られた。「私も同様であります」といつて予も杯を免れ

た。全く大樹の影に寄つたのであつた。

三月の青山學院の卒業説教には彼は理想に達するの道程を説いた。旅装は如何、同行は如何、長途に耐ゆる興奮力如何、よろしく熟考と速決の慣習を作れ、沈勇を養へ、旅の初期は奇道を探るとも半ば已後は變化を慎め、常に理想を見失ふ勿れと教へた。

四月十四日彼は植村正久の富士見町教會献堂式に列し説教した。此教會はこれより東京に於ける最も優れたる特色あるものとなつたことはよく世に知らるる。

四月彼は九州に下り福岡、熊本、長崎、博多にて演説し、五月甲府に赴き、六月仙臺に行つた。

五月二日より五日迄東京にて福音同盟會の大會が開かれた。會場は神田青年會館で初日に小崎弘道を議長に擧げ、次日平岩愼保とデフォレストの講演あり、四日小崎の司會にて本多の説教があつた。見るべき變化は福音同盟會を日本基督教會同盟に改め、主義目的を本同盟は普通に福音主義と稱する諸教會相互の交誼を厚うし共同の事業を經營し基督教會一般の利害に關する事件に就き適當の處置を爲し以て基督の精神を社會に發表するにありとしたことにある。然してさきに問題となつた福音主義の定義は除去した。事業としては社會道徳問題に關し意見を發表し之に適當の運動を爲すこと、教會共同の傳道をなし各地に説教者演説者を派遣し、慈善教育傳道等の事業調査を爲し、諸教會の統計及名簿を製す等であつた。

更に進んで將來の教派合同を企圖する議が星野光多外六名によつて提出された。即ち日本教化と東洋傳道との爲諸教派の合同は望ましき事なれば此目的を達する爲委員二十五名を擧げ合同の基礎を案じ且つ各派の間に交渉せしむといふにあつた。議長の指名したる二十五名は日本基督教會の井深梶之助、植村正久、石原保太郎、星野光多、熊野雄七、石田祐安、組合教會の海老名彈正、小崎弘道、宮川經輝、綱島佳吉、原田助、メソヂストの本多庸一、平岩愼保、高木壬太郎、小方仙之助、釘宮辰生、聖公會の元田作之進、今井壽道、浸禮教會の吉川龜、福音教會の高野丈三、美普教會の稻沼鑄代太、外に信徒安藤太郎、高木貞衛、角倉賀道、福岡秀猪であつた。然して小崎はその委員長となり石田、角倉を書記とし更に基礎案作成委員五名を選擧したるに、本多、植村、小崎、海老名及高木壬太郎が當選した。これによつて見ると四年前に異端として排斥した海老名を同盟はまた迎へたのであつた。この接近は何れの側から爲されたのか。

聖書の改譯は當時の急務と見られ五名の委員を擧げ在日本の英米の二聖書會社に交渉せしむることとし議長は、本多、星野、元田、綱島及渡邊元を擧げた。

五日の親睦會は大森八景園に催され本多の司會の下に肝膽吐露會が行はれ内外の諸士の感想希望經歷などの談があつた。

これによつて見るとメソヂスト三派合同が企圖せらるゝと同時に諸教派合同も夢みられつゝあつ

たのである。尙ほ議案の中に滿韓傳道、出版事業共同、基督教大學設立の案などもあつた。かくして明治十七年來存在した福音同盟會の名はこゝに消滅した。之に代る教會同盟は決議のまゝに残り組織を見たるは明治四十五年で其時また會長は本多、副會長は小崎となつたが幾何もなくして會長は世を去つた。

五月十七日の彼の日記には其日の毎日新聞に出た佛教家島田蕃根の言が寫してある。曰く、『同じく是れ水にても牛をして飲みしむれば乳となり蛇をして飲みしむれば毒液となる、富貴は濟生の志ある人にとりて最必要なるも志無き者にとりては危険なり』と。著者などは、牛が飲みても涎にも尿にもなるなどといひたくなるが、彼は素直に感じたのであらう。但し富貴の危険は著者も同感である。凡骨なる遊民は多くは富家の子である。

六月二十九日の夕、青山では珍らしき會合があつた。明治二十年に建設せられ二十七年の震災に傷つき爾來堂内に支柱を施して漸く維持し來れるガウチャー・ホールは遂に毀たるゝの運命となつた。その十九年の存在は建物として短命であるが功績は少なからず、之を徒に毀ち去るべからずと予は考へて爲に永別會を計畫した。降りつゞきし梅雨の霽れて夕涼しき午後七時數十の校友と五百の男女學生は堂に集つた。本多は會を司り、奏樂の後、ソーバーは祈を捧げ、予は開會の主旨を述べ、それより外國教師代表のチャペル、女學院代表のアリングが演説した。司會者はいふ、今夕の

會は先生方の文學會との評があると。これより舟橋雄の英文、水上梅彦の邦文、前者は『眞夏の夜の夢』と題し、後者は『ガウチャー館の講壇を思ふ』と題して終に本多を讃して一國の説教者といつた。司會者は文學會の材料にされたといつた。次で此頃學院教會の牧師たりし小畑久五郎の英語演説あり、強健ならぬ體を勵まして最近に世界を一週して歸れる山田寅之助の巧妙なる演説あり、次で流麗なる三浦泰一郎の邦文、精練せる鹽谷榮の英文、爽快なる高木正義の演説あり、終は淺田榮次の英語演説でそれはガウチャー・ホールに寄するアポストロフィーで終つた。此夕の文稿多くは校友會報に載せられた。司會者は勇者の死を論じて閉會の辭とした。尙ほ近日渡米して親しくガウチャー及マクレーに面會して此會を談ることあらんといつた。此館存在中學院入學者凡一千七百人と報ぜられた。彼の日記には、此會を『盛なる集會、淺田、鹽谷、舟橋三氏の英語は我校の榮とすべきものなり、ガウチャー館靈あらば、満足し瞑目すべし』と記してある。本多がこゝにいふた渡米は第四回の米國行である。これはメソヂスト三派合同の爲である。以下この合同の事を略記する。

二十二、メソヂスト三派合同の準備

米國美以教會の宣教師アール・エス・マクレーが横濱に上陸せるは明治六年（一八七三年）六月で

あつて次で同年八月アイ・エチ・コレル、ジェー・ソーパー、ジェー・シー・デヴィソン等が來た。十二月にはエム・シー・ハリスが來た。彼等は東京、横濱、函館、長崎に分れて傳道を開始した。翌年ジョン・イングが來りて弘前に赴き本多と關係を結んだことは既記の如くである。

最初の教會堂は横濱中坂上の天安堂であつた。次で東京明石町にも函館にも會堂が建てられた。最初の受洗者には東京では津田仙、横濱では松本總吾、河村天授、長崎では飛鳥賢次郎、函館では菊池卓平があつた。札幌農學校の學生たりし佐藤昌介、内村鑑三、太田(後に新渡戸)稻造もハリスから受洗した、最初の邦人教職は本多庸一、栗村左衛八、大貫文七、菊池卓平、飛鳥賢次郎、松本總吾等であつた。最初の年會は明治十七年に組織され議長はビショップ・ワイリー、當時教會二十四、外國宣教師十二名、日本教師三十三名、信徒約千名であつた。

後内國傳道會社成りて明治二十五年長野忠恕を送りて琉球傳道を開いた。三十一年九州を分離して別に年會を設けた。三十七年在朝鮮日本人に傳道を始めた。

傳道地は東京横濱を中心として千葉、埼玉、群馬、福島、宮城、山形、岩手、青森、各縣及び北海道に及び、西は愛知縣、九州各地、沖繩及朝鮮の一部に及んで居る。

教育機關は東京の青山學院、同女學院、青山女子手藝學校、横濱の聖經女學校、長崎の鎮西學院及活水女學校、函館の遺愛女學校、名古屋の清流女學校、福岡英和女學校、弘前女學校、仙臺自助

館、外に小學校を有した。

米國南部メソヂスト教會は明治十九年(一八八六年)傳道を開始した、支那に傳道せしランバス(Lambath)父子及びオー・エー・デュークス(Dukes)が最初の宣教師であつた。傳道地は神戸を起點として瀬戸内海の周圍にあつた。明治二十五年に至り神戸、廣島、松山の三部會を包括する年會を組織した。教育事業としては神戸の關西學院及び廣島英和女學校及幼稚園、ラムバス記念傳道女學校を有した。

加奈陀メソヂスト教會の傳道局は創立後五十年を経て一八七三年(明治六年)に至り日本傳道を企て同年ジョージ・カ克蘭(Cochran)及びデー・マクドナルド(MacDonald)を日本に送つた。カ克蘭は横濱に於て中村正直と相知り招かれて東京小石川なる中村の同人社の教師となつた。平岩愷保等はその感化によつて基督教に入つた。マクドナルドは静岡に至り江原素六と相知つた。かくて東京と静岡に教會の設けらるゝに至つた。次で東京鳥居坂に學校を建てた。之が東洋英和學校であつたが後年變じて江原素六の麻布中學校となつた。

此派の宣教師シー・エス・イビー(Ibbey) 明治十五年日本學界に唯物論、不可議論の横行するを慨し、學生に對しジョセフ・クックのポストン講演に倣つて基督教を辯證した。彼とカ克蘭とは堂々たる雄辯家であつて著者も後日之を傾聽した。イビーは遂に東京本郷に中央會堂を建て尙も大

學々生等に感化を及ぼさんと計つた。

明治二十一年六月東京築地にて初めて年會を組織した。教職會友の代議員二十三名、マクドナルドを議長としカシディ (Cassidy) と小林光泰を書記とした。年會區は東京、静岡、山梨の三部より成り、教會十二、講義所十、宣教師十一人、日本教師七人、會員千五百餘人であつた、最初に教職となりしは平岩愼保、土屋彦六、山中笑の三名であつた。

明治十九年内國傳道會社を組織し、資を募りて微弱なる教會を助け漸く自給を促し、静岡、麻布甲府等の教會は相次で自給し、尙ほ教區は福井、石川、富山、新潟、長野の諸縣に及び之を (一) 東京、(二) 静岡、(三) 山梨、(四) 金澤、(五) 長野の五部に分つた。明治四十年三派合同實現の際、教會二十九、講義所二十、會員三千三百人に達した。

教育機關としては東洋英和學校、同女學校、静岡女學校、山梨英和女學校、金澤英學院、金澤女子授産場、上田英和女學校を有した。

日本に於けるプロテスタント諸教派合同の問題は明治十一年築地新榮教會にて全國基督教徒大親睦會を催せし時既に有志の間に唱道されたが實行に進まず、かく新派全部の合同を考ふるに先だち教義と制度と相近きもの先づ合同を實現するに如かずと思はれた。

明治十九年以後日本主要の新教二派たる組合、一致兩教會の合同が企圖されて遂に成らなかつた。

この不結果は合同の勢を大に阻害した。

米國南北及加奈陀の三メソヂストの合同の希望も久しき以前より存した。明治二十一年既に合同に關して本多及び相原英賢、飛鳥賢次郎、小方仙之助、山鹿旗之進、二宮安次、倉園秀雄、岡野敬胤の名を以て米國の美以總會に出したる案の趣旨は左の八ヶ條より成つた。

- (一) 我國は島地にして四面海なるを以て人民の愛國心自から熾盛である。(二) 國風國要に適したる教會を建つる要がある。(三) 直接一貫の責任は基督教徒の品性を形成し教會の隆盛を計るに必要である。(四) 極端なる宗派主義は我邦多數人の躓きの石である。(五) 基督教は我國貧富貴賤を一致さする同情互信の連鎖たる希望がある。(六) 帝國の完全と自由に就て、政府は頻りに配慮してゐる。(七) 目下の組織では高等なる法律的の事件には費用と時日を多く要し、その處決も不完全である。(八) 日本に重なる諸宣教會社は基督教會の一致と獨立を是認して居る。

此趣旨にはマクレー、ソーパー、コレルの三宣教師も同意を表して居る。尙ほ新なる日本メソヂストの教會政治は監督制度とすることを明言した。二十一年夏青山に於ける宣教師の合同會議のこととは前に記した。二十二年に至り三派の委員は名古屋に會し合同基礎案を作成した。當時の委員は北部派は山鹿旗之進、小方仙之助、ソーパー、ロング、南部派は中村平三郎、吉岡美國、モーズレ、アドレー、加奈陀派は平岩愼保、外山孝平、カクラン、マクドナルド、計十二名であつた。然

るに此案は一頓挫して合同は中止の姿にて十年を経過し、明治三十三年に至りて再興し、三十四年春北部派本多庸一、ソーバー、南部派吉岡美國、ニユートン、加奈陀派平岩愼保、マクドナルドの六名委員となり、教會憲法の制定に折衝を重ねた。

既に信條に異議なく舊來のそれを採用し、制度に於ても監督制を採用するものなれば異論なきも米國諸教會は日本の教會設立と共に全く手を引くのではない。資力上の援助もなし宣教師も駐め置くのであつて見ると、合同獨立の日本教會對三教會の關係を當分は續けなければならぬ。之に關しては細心の注意を要するので米國に於ても好意を表しつゝも決斷は容易でなかつた。

合同後從來の三宣教會社との關係、特に經理上の連合、會計委員等に關する案を加へた。それから尙様々の折衝を経た。

合同後新團體を國民的に發達せしむるに就ては三の法があると本多は考へた。(一)全く外援を除き新舊内外の氣兼ね捨て活動猛進し、今の小過は後の大功にて償ふこと。(二)獨立の新團體は作るとも、成るべく母教會の代表者に重要な地位を與へて時の熟するを待つこと。(三)獨立の新團體と母教會との關係は、前者を主とし後者を客とし然も兩者平等と見て内外一致の實を擧ぐることに然し以上のうち第三の法を以て最も穩當と彼は思つた。

日本に於ては事實上の共同事業は一時神學部の合同として顯はれたがそれは永續しなかつた。然

るに教報の發行は初より一致協力によつて實現された。即ち明治二十四年發刊の週刊誌「護教」がそれである。その最初の編者は史論家として名ある愛山生山路彌吉である。明治三十年に至り別所梅之助之に代り三十四年に至り更に高木王太郎が之に代つた。三主筆何れも教界に特異の存在であつた。各派各教會の連絡交通一致の爲として此雜誌の効果は著しく、同時に基督教界の一誌として内外に對し論議の機關としてまた文學の田園としての功績も没すべからざるものがあつた。三派の合同が之によつて促進されたことも多大である。然して此誌の最初の發行はこれも本多によつて統轄された。山路の如き奔逸不羈の編者も本多に心服した。彼は東洋英和學校出身で加奈陀派なるが同派の先輩平岩とはよく衝突した。彼曰く、「平岩さんとは今度は仲直りと思つて出逢ふとまた喧嘩だ。本多さんとは今度は一つ議論して争つて見ようと思つて出逢ふと忽ち宥められてしまふ。汗馬に鞭うちて斷崖は登るべからずと覺つた」と。

これに連關して思ひ出さるゝは、プリマス・ブレズレンと稱する宗派否定の一派の到來に就てある。青山出身の熱心なる傳道者平野榮太郎は之に共鳴しメソヂストを棄て、同派に入つた。青森縣藤崎のメソヂスト信者で弘前女學校の經營などに少なからず助力した實業家長谷川誠三もプリマスに投じた。もと長谷川は信徒代表で美以年會にも來て居たが濃厚なる彼も意に充たぬことがあつたらしい。「平岩や山路があんまり喧嘩などして見せたからだ」と本多は云つて居た。一方教派合

同が促進されつゝある間にかゝる分離もあつた。

尙ほメソヂスト三派の外に同主義なる美普、即ちメソヂスト・プロテスタント派、同胞派、福音派をも合同に加ふる希望もあつて明治三十四年九月及十月には以上六派委員集つて合同基礎案を作り新教會は之を基督方正教會と稱し、その頭首は總理と呼ぶことに決した。翌年各派年會は此案を可決し、次で各派總會の問題となつたが、美普派と同胞派は組合派と合同の議があつて之が爲に別働し、福音派は尙早として避けた。或は微少なものは併呑を畏れたのかも知れぬ。

由來合同すべき三派は教義信條を一にし慣習も相似たるものであるが教會政治には少なからぬ相違があつた。例へば南北二派は監督即ちビショップを有し、加奈陀は總督即ちジェネラル・スープリンテンドントを有した。

名稱は加奈陀派は早く日本メソヂストと稱して居たので此名を採用すれば南北二派は之に併呑されし感がある。それで新日本メソヂスト、日本順法教會、日本方正教會など種々の名稱も提出されたが結局名は日本メソヂストとなし、統轄者は監督と稱した。

明治三十七八年我が戰勝の餘威は合同運動にも刺激を與へし如く、「教會合同の時機」「速に合同問題を解決すべし」「再び合同問題を論ず」等の高木主筆の論が三十七年十二月以後の護教に見ゆる。三十八年十一月には別所梅之助は同誌に「メソヂスト諸派の合同につき美以教會の會友諸兄

姉に呈す」と題する一篇を掲げ、メソヂスト六派分立の歴史を尋ねて、その一として我等を永久に分れしむる理由無きを示した。

かくて明治三十九年に至り合同の氣運切迫したれば其實現の爲に本多は渡米するに至つた。

この年一月三、四兩日米國ボルティモアに於て南北メソヂスト、加奈陀メソヂスト及メソヂストプロテスタント四派の委員は日本よりの要求を審議したが一般諸件は皆同意したるも監督又は總督に關して折合はず遂に確定したる決議なくして散會した。

もし大體合同を可とすれば組織に關する事は新教會に一任しても可なるのである。然るに彼等は寧ろ枝葉の點に於て決議を阻止したる如きは日本教徒には頗る遺憾であつた。この事をきゝて三月二十六日九段教會に於て我が有志者によりて合同問題協議會が開かれ、美以派からは本多庸一、石坂龜治、菊池卓平、別所梅之助、三浦泰一郎、小島雄美、飯久保貞次、吉崎俊雄、小畑久五郎、木村繁枝、中村忠藏、白鳥甲子造、木原外七、三上豊等の教役者と、普賢寺轍吉、高木正義、平澤均治、長谷川誠三等の信徒、加奈陀派よりは教役者高木壬太郎、倉長巍、三上操吉、信徒山路彌吉等出席し、明治三十四年各派の年會が採用せし合同基礎案を修正し、之に高木壬太郎の起草せる書簡を添へ米國及加奈陀の各全權委員に之を送附することゝした。此書簡には先づ本年一月ボルティモアに開かれし會議の何等決する所なく散會したるを遺憾とし、進んで日本のメソヂスト三派が組合

長老の二派に比して發達遅れ今尙自給教會は全國を通じ十一二に過ぎざる如きは二派の如く自活的ならざる爲なりといひ、今メソヂスト三派を合するも右二派の何れより劣勢なるに、分立による人物と費用の不經濟は甚だ不利なること、同主義にして尙ほ分派分争する如きは教外の人々に礙となり基督教の恥辱たること、極東にては一昨年来古來未曾有の一事件發生し、國民の自覺、精神界の變化異常なるとき教界のみ従前の儘を墨守すべからざること、三派合同の基礎案は既に進達しあれど時勢の進歩は修正を促すにより之を修正したることを述べた。その案は名稱(日本メソヂスト教會)教理、政治(監督制)、集會、財政を規定し之に宣教師及外國の補助を助くる假教會に關する項を定めたものであつた。

次で同月二十八日より開かれし美以教會の第二十三日本年會はハリス監督議長の下に議事を行ひ中に合同に關する懇談會もあつた。此年會は九州地方を除きたるもので六個の連回より成つて居るがその連回長は邦人と宣教師と相半ばして居た。即ち弘前、山鹿元次郎、北海道、カシデー、名古屋、ドレーパー、仙臺シー・エス・デヴィソン、東京信濃、石坂龜治、東京横濱、小方仙之助であつた。此年會では監督ハリスに合同基礎案を携へて歸米し當局者と交渉せんことを求めハリスは之を諾した。その出發は八月四日になつた。ハリスは本多より二年前に生れ此年は還曆であつた。尙ほ此頃來朝中の美以の監督バシユフオードの許に四月六日に達した新聞には米國テネシー州ナ

シユヰイルで南北兩美以のみの合同全權委員會開かれ、合同を決し、克蘭ストンとウイイルソンとを基礎案委員としたとあつた。二派のみで加奈陀を除かれては大事であるので、バシユフオードに頼み克蘭ストンに宛て「バシユフオードと手紙を待て」と電報を發した。

此頃の事情に關して高木壬太郎は云ふ。

『合同の爲に最も苦心し最も奔走されたのは本多先生である。合同の困難なりし理由は獨り米國に於ける三派母教會の同意が容易に出来なかつた爲のみでは無い。實は日本に於ける三派の有力者間でも口には合同を賛成して居るが腹の中では賛成せぬものがあつたからである。余は當時護教の主筆記者として盛に合同を鼓吹した一人であるが、とても合同は出来まいと思つたことが一再でない。明治三十九年四月の末長崎に美以派南部青年會が開かれ、先生はハリス監督と共に之を訪問せられ、其席上で盛に合同の必要を説かれたが、其頃加奈陀派の中には非合同説が隱然一大勢力を爲して居た故に余は内情を書して長崎にある本多先生に報じた。先生は直に返翰を贈られたが、其中に『合同若し成らずんば共に城を枕にして死せんのみ』といふやうな意味の言があつた。三派先輩の説を纏めるのに最も力があつたのは同年五月四日福音同盟會大會が神田青年會館に開かれた時、同會に出席した三派の有力者を同會館の一室に集め折柄加奈陀より來朝して居たカーマン、サザランド兩博士を其席に招待し、合同の必要を兩博士に向つて説明し、兩博士の心先づ動いて、加奈陀派の態

度が明になり、其の翌々日、本多先生の宅に平岩愼保、中山忠恕其他の諸氏が集つて此處に初めて三派の説が一致するに至つたので、此時先生の喜びは喩ふるに物が無い。之れからは破竹の如き勢で終に合同が出来たのであるが此處に至るまでの先生の苦心は容易でなかつた。」

本多の日記によつて見ると五月六日に集れるは前記の外に山路彌吉、高木正義、中村徳太郎、堀峯橋、釘宮辰生、田中義弘及び高木壬太郎であつた。一方日本に於ける諸有志の間には三月中旬にメソヂスト諸派獨立期成同盟會が起つた。今後五年を期して在日本メソヂスト諸教會の獨立せんことを目的としたるものであつた。此會は五月四日福音同盟會開會中會合し、本多を議長とし山路彌吉を書記とし規約を修正した。尙ほ組織委員として本多、平岩、山路、高木壬太郎、高木正義を擧げた。平和の合同による獨立を彼等は企圖はするが若しそれが成らずば斷然米國と斷て獨立する考は彼等にありしこと、察せられる。

五月十六日の彼の日記には、合同の概文を彼が口授して、ソーパーが之を英譯した。此時迄の賛成は美一、五五六人、日本美三五二人、南美以一四四人、計二〇五二人とある。尙ほ平岩愼保と田中義弘とに賛成者募集を託したとある。十八日にはカーマンとサザランドは加奈陀に歸航の途に就いた。六月十四日の記には、今夜貞子と合同案連名者の數を調べたりとある。彼等がかゝる數を調べある頃に小崎弘道夫妻は結婚の年を數へて銀婚式を行つたので彼等も之に列した。

少しく後に戻つて四月二十一日發行の護教第七六九號を見るに其れには「メソヂスト三派合同に就て諸兄弟に呈する書」と題する本多の一文が載つて居る。彼は一月のポルテイモア會議の無決定のこと、三月中に開かれし京濱間の有志會にて基礎案を修正し書簡を米國及加奈陀全權に贈りしこと等を叙述したる後、(一)日本有志作の基礎案は邦人の意見を代表するものなれば參考の價あること、(二)米國にては二派同意あれば其他に拘らず合同を實現すべしといふと雖、日本の現狀にては少くも三派合同ならざるべからざること、(三)日本にて合同の大體を議決したる上は委員を日本に派し、日本に於て最終の決定をなすべきことを主張し特に第二項を大切なりと説いた。尙ほ現在の三派の關係は傳道地適當に分れありて之を合すれば全國の南北に渉るものなりといひ、是れ迄も神學校及機關雜誌共同の事實ありといひ、人員からは三派合すれば日本に於けるプロテスタント第四の勢力となるとして左表を示した。

組合教會總員	一六、六三九人	日本基督教會總員	一三、八三〇人
日本聖公會總員	一三、七一〇人	之に對し	
美以總員	六、一一三人	南美	一、二二二人
加奈陀	二、八九四人	三派合計	一〇、二一九人

米國の全權委員に於ても既に二派を合するに決したる程なりとせば、三派に及ぼすは可能なるべ

く、小派分争の不可は云ふ迄もなく、自治の権無き團體は生命なき器械の如くなれば、有力なる教團を作り自治活動するは天意に協ふものなりといふべく、また母教會の本意を成す所以であつて、之が成功せば他日更に他の諸派を迎へて慶福を共にすべしと論じ、尙ほ來五月二日より六日迄福音同盟會を東京に開くにより、其際三派の有志と大に協議するの便あらんと述べた。これは有志の一人として近時の狀勢を叙し併せて彼の意衷を吐露したのであつた。

尙ほ同號には左の意味の記事がある。

三月一日テネシー州ナッシュビルに開かれた合同委員會には美以教會よりエー・ビー・レナード、シー・ダブルユ・スミス(ピッツバーグ・メソヂスト誌主筆)南美以教會より監督エー・ダブルユ・ウイルソン、監督シー・ビー・ガロウエー、ジエームス・アトキンス(ナッシュビル・サンデー・スクール誌主筆)及ダブルユ・アール・ラムバスであつた。ウイルソンを議長としガロウエーの動議が採用された。それは日本に於ける二派を合同するを可決し、監督ウイルソンと監督克蘭ストンを合同基礎案を作成すべき委員に擧げたのであつた。次で三月十五日ポルティモアに合同委員會開かれ克蘭ストン、スミス、ガロウエー、アトキンス、ラムバス出席し、終日會議、二派の日本年會に於て翌一九〇七年五月東京に開くべき總會出席の代員を選ぶべきこと、新教會の組織は監督政治たるべきこと其他の數項を決した。

二派のみの合同は日本の三派合同の希望を充たさぬ。然し加奈陀派の宣教師エチ・エチ・コーツの如きは加奈陀派の参加は望なきにあらず、意見の差は教會政治の如き肝要ならざる點にあれば調和は望みありといつた。護教は若し南北二派が監督政治を固執し加奈陀派(同派は一人の總督あるも監督を置かず)を容れずば日本の教會は斷然獨立すべしと論じた。

尙ほ同號に於て信徒宮腰信次郎は教會の獨立が第一なり自給は末なり。合同は更に末なりと論じ、禮を外國に盡すは可なるも、獨立の決心堅からば多く彼を顧慮するの要なしと論じた。

護教の主筆高木壬太郎は次號の護教に於てメソヂスト諸派の獨立に就てと題する社説を掲げ「我が三派の教役者及信徒が均しく合同を熱望せるに係はらず、尙自ら之を裁定し之を實行すること能はず、之を米國にある母教會に訴へて其裁定を仰がざる可からざるが如き境遇に在るは、我輩の唯に遺憾に堪えざる所なるのみならず、寧ろ悲極まりて泣かんとする處也」といひ、これ一に教會組織の致す處なれども眞の原因は財政的助力を母教會に仰ぐ爲にて換言すれば自給獨立の意氣と實力に乏しき爲なりといひ、前號の宮腰の意見に同意を表した。こゝに至ると要するに經濟問題で日本の教界は宣教師の精神上の力などには重きを置かず、唯だその齋らす資力如何を顧みること、イスラエル人の埃及の安逸を顧みるが如き状態にあつたと思はれる。

聰明本多の如くにして此理はよく見抜いて居らぬ筈は無い。斷然獨立分離して合同せんとせば一

時は困難を見るも後の結果は良好なるかも知れぬ。されどこれ迄の關係も深ければ成るべくは平和的解決をと彼は思つたのであらう。聞くところによれば曾て或る場合に或る宣教師が日本人は愛國心が強いといふから自給すべきだといつたら、流石の彼も奮然として、『諸君が米國人として助け居るのなら今直ぐでも斷る』と云つた。宗教の世界主義また人道主義からの援助なればこそ受くれ、國家對立の關係で彼れ主、我れ従たるは耐へ難き事なれば彼はかく憤つたのであらう。宣教師も失言を謝して事無きを得たといふ。然しこの區別は微妙であつてやゝもすれば混同される。然して三派合同も全然獨立ならぬ處に不純の分子の存するは止むを得ぬ。然も彼の聰明は果斷を爲さしめず、徐ろに勢を導いて宜しきに至らしめんとするのであつた。特に教育事業を思ひ見れば自立は更に容易で無い。彼は隱忍せざるを得なかつた。さればこそ前年既に三ヶ月以上をその旅に費した米國に今年もまた行つたのであつた。然し大觀すればこれは或は彼が一層大なる度量を以て米大陸の教會の海外傳道の行路を正當ならしむべく指導したのであるとも見られる。

この考慮を以て我々は彼の米國に於ける行動を見よう。

二十三、第四米國行

七月十二日本多は東洋汽船の信濃丸に乗つて渡米した。彼は旅費が整はねば家屋敷を賣つても行

くと決心したが幸に援助者があつた。その出發前に平岩愼保が彼を尋ねたが、彼は『若し此事が失敗すれば切腹だ』とまで云つた。これが蹉跌するならば吾に三派の爲のみならず、日本基督教全般に及ぼす害が測り難いと思つたのであらう。

船中では其頃名聲高かりし綱島梁川の『見神の實驗』を読み思ひしより健全だと評した。

七月二十六日彼はシアトルに着て吉岡誠明に迎へられた。其日第一美以教會牧師を訪ひ東部の事情を尋ねたるに『昨日此地を過ぎて日本に赴いた南美以の監督キヤンドラーがシヤトル出發前に本部より受けたる電報によれば、合同の議既に決定したりとの事なりしといはれた。然し二派か三派かも知明ならず、シアトルでは合同の事をよく知らず電文も亦漠然で明瞭で無かつたといふ。よりてポートランドにあるジョンソンに書を送りまた紐育とトロントに發電し問合せ中に牧師會に列し北西アドヴォケート誌を見て其概要を知つた。即ち七月十八、十九の兩日バファローに於て三派の委員會合して合同を決し名稱は日本メソヂスト教會とし監督任期は八年として再選を可能にしたのであつた。この會合のあつたのはカスル・インと稱し、もとフルモア大統領の邸で五十四年前こゝでペリー提督の日本行が送られたのであるといふ。尙ほ七月二十五日附にてレナード、ラムバス二人より之に關し公開狀を日本に發したとのことであつた。三十日にはシヤトル牧師會でシヤンキーといふ人の高等批評反對論を聞き感情的で却て反感を起すと思つた。三十一日には彼にレナード博士から

合同成立の返電を得た。曰く、Union of Methodist, Methodist South, and Canada effect と、彼は直に之を日本に電報した。これはこれ何等のマグナ・カータであつたらう。此時彼の妻の妹婿にてブラジルにて客死した公使杉村濬の妻と子とが歸國に際してシアトルに來り彼はその一行に逢つた。『國家の爲とはいへ、夫と父の骨を異域に葬りて母子四人萬里の山海を越へて故郷に歸るの情慰むるに言無し。』と彼は記した。この子息の一人は後年父の志を繼ぎて外交官となつた杉村陽太郎其人であつた。

其時モンタナ州シヌークに開かるゝ宣教大會が旬日の中に迫つて居たので、彼は八月八日に其處に行き其大會に出席せん爲に來り合はせし美以派の監督クランストンに逢つた。クランストンは美以代表の合同委員たりし爲に、本多は彼から事情を明に聽くことを得た。これによれば、合同委員會では保守説を採る有力者もあつて頗る心配なりしも漸く可決に及んだといふ。

彼は十五日シカゴに行つた途中大暑と床虫に苦しめられた。床虫はバググである爲に彼は之を幕軍と呼び、己は佐幕黨であつたのに何たる敵ぞといつた。シカゴでは高橋堅(後に一高教授)中川邦三郎、市橋友之に迎へられた。領事清水精三郎方にも宿泊した。彼は十七日加奈陀のトロントに赴き加奈陀メソヂストの總理博士カアマン及び博士サザランドに逢つた。この二人はクランストンと同じく翌年三派合同全權委員として日本に來れるものである。彼等からも會議の經過を聞きまた昨年の日本會議に關し意見を交換した。

トロント滞在は十一日間であつたが、子息二郎も此地にあり、高木王太郎も加奈陀メソヂスト教會總會に日本年會代表として出席の爲に來りありて旅情を慰めた。此地の中央メソヂスト教會で説教するを聞いたヘンダソンは加奈陀一の能辯家と思はれた。また此頃逢つた曹といふ支那の女性は丈高く美貌で英語も巧であつたと日記に見ゆるがそれ等は一時の注意を引いて過ぎゆく人の流である。これより紐育に至る途上シラキユース大學を訪ふた。この大學卒業者にして日本宣教師たるもの數名あり。日本人にてこゝに留學せるものもあつた。紐育では盛夏なりし爲、不在者多く不便であつた。偶々ニュー・ジャーシー州アトランティック市に青年會の萬國委員年會ありて、懇に招待し來し爲九月のはじめ其地に赴いた。大海水浴場あるこの地は俗の尤も俗なるものと彼は思つた。こゝで彼はジョン・アール・モットに逢つた。尙ほ其時は時間少なかりし爲に會遊のノースフィールドに赴きてモットとの會談をつゞけた。ムーデーの墓に詣て見ると其夫人も夫の傍に葬られて居た。九月八日紐育にゆきブルクリン・ミツシヨンの家に泊し、翌日石川和助に伴はれプリマス教會にライマン・アボットの説教を聞き、『老來益々壯なり願みて自ら愧ぢたり』といつた。次で十日にはイースト・オレンジに石川と共に老博士ヘボンを訪うた。彼は年齒九十二で尙健かであつた。ヘボンは安政六年日本に到るに五ヶ月を費せし談などをした。九月十一日には紐育で監督ハリスに逢つて共に渡米せし目的の既に達成せられたるを喜んだ。

九月十三日彼はハリスと共に加奈陀モントリオールに開かれし加奈陀教會の總會に臨み、カウマンとサザランドとに紹介せられて總會に對しハリスと共に演説した。十五日は高木壬太郎と共にマウント・ローヤルに登つた。彼は更に引返して二十日ボルティモアに至り南美以派監督ウイルスンに逢はんとして不在の爲に果さず、同地にてガウチャーに逢つた。その女子大學も見た。そのアルトデールの別荘にも行きて談つた。ガウチャーは合同問題にも間接に努力したので事情に明であつて、既に米國に於ける決定を見たる以上は速に日本に歸り準備を整ふるに若かじといつた。本多は十一月に開かるゝ美以傳道會社の總委員會にハリスと共に出席を約してあつたがガウチャーの言を理ありとし、ハリスに斷つて歸國に決した。此時ガウチャーは無論本多は新合同教會の監督たるべきを期し、青山學院長の後任者に就ても本多と協議を遂げしといふ。

九月二十三日ワシントンにゆきコングレス圖書館、スミソニアン館、國立美術館、等を見た。ワシントン記念碑の高塔にも上つた。ブルクリンに歸るとそのミツシヨンの人々は彼に五十弗を贈つた。これなくば借財を要したのであつたと彼はいふ。彼はシカゴを過ぎ新設のソルト・レーキ横斷の鐵路を過ぎ六日桑港に着し相原英賢、廣田善郎、エム・エス・ヴェール、エチ・ビー・ジョンソン等に迎へられた。上野領事の招待も受けた。桑港は去四月の震災後復興の途にあつた。パロアルトに行つて、スタンフォード大學も見た。十二日東洋汽船の日本丸上等船客百人中唯一の日本人として乗船出發した。

米國及加奈陀の合同委員の決議は彼のシヤトル着より一週間前に爲されて居たので、其目的は既に達したのだが爾後三ヶ月滞在中殆んど寧日なく奔走し教會要路の人々と談り又機關新聞記者等と會し、理解に乏しき者の意見に對しても説明に努力したのは後日の爲によく道を拓けるものであつた。

ここに附記すべきは彼と時を同じふして米國に到りし二人に就てである。彼が渡米に先だち南美以派の松本益吉は三月末出發渡米し、合同の爲に盡力した。彼は十四名より成る三派の合同全權委員を歴訪し、また書状を送つて説くところあつた。然して逸早く所見を護教に報じた。八月七日彼は紐育にて美以傳道會社書記レナードを訪うたが、レナードは本多の來りしは無用であつた。徒に時と費との損である。我々に任せておいてよいのだといつたので、松本はその然らざる所以を辯解するに努めた。

高木壬太郎は本多より八日後れ七月二十日日本を發し、八月二日米大陸に上陸し、同十八日前記の如くトロントにて本多に會し、九月十二日よりモントリオールに開かれし加奈陀メソヂスト教會の總會に列し、十四日同會場にてハリスと本多との演説を聞きその大喝采を得たるを喜び、二十四日には特に機會を得て自ら日本傳道に關する演説をなし、國情教勢を説き三派合同の必要を論じ、

カーマン總督からは彼が護教記者として多年合同に盡力せしを稱揚された。彼も日本の教會が獨立といへども尙ほ補助を受くるを要する點は頗る談るに苦しみしといふ。

本多は米國に在る間到的所に於て、先づ從來の傳道に關して謝し、次に時勢人情を察し合同を許したるを謝し、これも當初よりの宣教師が誘掖至當なりし爲とし、尙今後獨立といふも尙ほ全く援助を斷たれざることなるが、新教會は勿論努力して獨立の完成を圖るべきも、母教會は之に對し餘りに急速の進歩を望むことなく、また餘りに放任に過ぎざるべく、適當の時と適當の協力によりて發達を期せよといつた。

前にも見たる如く若し之が完全の獨立であつたら何等の願慮も無いが、尙ほ人力と資力を以てする援助を受くることなるが爲に願慮が多い。米國側より見て尙早といふ説あるも無理でない。嚴密にいへば獨立の名ありて實は半獨立若くは聯立の國家の如きものである。後日統率の苦心も豫期せられたらう。寛容隱忍彼の如くにして始めてよく此間に處し得たのであるが、教界はかゝる種類の問題に彼の如き人物を苦心せしめたるを想はねばならぬ。

歸航の日本丸の船長フイーマーは英人であつた。船中宣教師は支那に赴く浸禮派十八人も居たが船長は日曜毎に自ら英國々教式の禮拜を行つた。一日食事中海荒らく「浸禮の宣教師窓より潮水の洗禮を受く」と本多は記した。十月十八日布哇では三浦、本川、及櫻川などに迎へられた。新聞で

九月二十八日熊本の政客佐々友房の死を知つた。二十五日三等船客中男兒の出産ありて日米雄と名づけられた。

二十九日の日記には路加傳十の二十九「誰か我が隣人たる」を引いて、「(1)先づ己を知るべし、(2)己の足らざるところ人亦足らず、(3)自ら足れりとするもの人を想ひやる能はず」とある。三十日横濱着歸京。七月十二日信濃丸で立ちてより正に百十一日目であつた。

歸朝後三日は第五十五回天長節であつた。此時彼は所感を談りて聖徳を稱へまつた。曰く。「昨三十八年海外旅行中歐米人と會する毎に最多く問はれたるは東郷、黒木果して基督教徒なりや、其人物如何なりや、續いて乃木、大山、山縣、伊藤等の人物技量如何等にして、今上陛下の聖徳等に就て問ふもの比較的稀なりき、然るに本年又北米大陸に旅行したるに諸將軍宰相に就いて問はるは殆んど稀にして概して陛下の聖徳に關して質問を爲すもの多し、否多くの場合に於て彼等は予よりも多く知れるごとく、頻りに聖徳を説明して余の認諾を要求するが如きことありき。これ予の逢會せる偶然の事にして他人の經驗とは甚だ異なる者なるべきや、余は然らずと信するなり、寧ろこれ一般の状態にして人間の心理亦此れに至るべきを信するなり。

戰爭の際に於ては其舞臺に出沒して尤華々しき立回りを爲せる役者衆目を惹き人氣を博すと雖も程經て其前後左右を顧み其の現象の原因を考察し、表面より裏面に入り外圍より中心に進みて、

遂に帷幄の中に偉大なる原動力の潛むを知るに至るべく其驚異や沈着にして深大なるものを生ずるなり。

陛下は歐洲の某皇帝の如く四方に旅行して自ら視察をなし給ひ、又は自ら王公を籠絡し外交家と折衝し給ふが如きこと、又は地球の彼端より此端まで電報を飛ばして一世を驚倒せしむることきは、嘗て成させ給ひしことなし。又は某大統領の雄偉果斷俠氣一世を掩ひ天下の志士をして腕を扼し目を聳て、其舉動を注視せしむるが如きとは自ら其數を異にし給へり、彼れ賞すべし是も慕ふべしといへども之を我が皇上の百二十餘代列聖の遺烈を負ひ、五千萬忠愛なる士民を纏ひて叫ばず街はず、淡然として天祐の下に猛將勇士を泣かしめ、斷すれば天地を震蕩し安んずれば一世をして泰平を誦はしむるに比すれば、蓋しその撰を同うすべからざるなり。嗚呼壯なる哉、大なる哉、貴とき哉。』

更に進みて三十九年の治世を回顧し、基督教者としては與へられし信教の自由を感謝し、之に對し報恩の爲に斯道の隆盛を謀るべきを説き終に韓國に關して痛切に感ずるところを談つた。忠誠は言々句々に顯はれて居る。

三派合同の公報が日本に於て發表されたのは九月一日の護教七八八號に於てである。曰く、

メソヂスト三派合同の公報

美以教會、南美以教會及びカナダ、メソヂスト教會の代表者より成れる、日本のメソヂスト教會合同に關する協議員は、千九百六年七月十八日ニュー・ヨーク州バフロー市に會合せり。熟議・祈禱、二日にわたりたる末、全會一致を以て、合同案を可決し、日本メソヂスト教會を組織するに要する條項を定めたり。この議は北米合衆國及びカナダにおける上記の教會の總會の權によりてなしたるものにして、事實上、日本における右諸教會の牧師、會友及びかの地に傳道せる宣教師等、一同の確信する所に應じたるなり。

合同したる教會を日本メソヂスト教會と稱す。

採可したる十八ヶ條の信仰個條に緒言として、左の事共をしるす。

日本メソヂスト教會は、キリストとその使徒とによりて示され、この合同案中なる信仰個條に正しく記され、ウエスレー氏の新約書附註と、生存中氏の出版したる最初の五十二篇の説教中に解説せられたる、聖書の基本的教義の上に、とこしへに立つべきものとす。

日本メソヂスト教會は、三教會合同の上なるべきものにして、總會あり、年會あり、部會あり、四季會ありて、その權限各明かなり。總會は四年毎に會合するものにして、教師と信徒との同數

の總代よりなる。教師の巡回制度は従前のごとく、又一名の巡回監督職をおく。

監督及び部長の職權、左に示すがごとし。

一、監督は、指名し又は討論することなく投票を以て、總會にて選舉し、八年間その職にあるものとす。但し再選せらるゝ權あり。

二、部長をあぐるには、各年會にて討論することなく、投票を以て各部ごとに二名、もし監督の請求ある時は、二名以上を選舉すべし、而してその中より監督は必要なる人員を任命すべし。

三、傳道者をその任地に任命するは、年會にて監督、部長と評議の上、之をなすべし。年會閉會中補缺もしくは變更の必要を生ずる時は、監督その關係ある部長と評議の上、之をなすべし。

第一回の總會は、明治四十年五月一日東京市に會合すべし。これに出席する總代は次回の年會にて選出するものとす。合同したる教會を代表する全權委員は、新教會の組織せらるゝに當り、勸諭、協議に與りて、之を助くるため、この第一回の總會に出席すべきものとす。

日本メソヂスト教會は、ほゞ一萬一千六百五十名の會友と、百餘名の日本人教職とを以て、創立せらるべし。北米合衆國及びカナダの諸教會は、日本メソヂスト教會と協同して、従前のごとく日本における事業を盛に扶くるものとす。

書記

エー・ビー・レナード、ダブリュ・アール・ラムバス

これによつて見ると信條は十八條となつて居る。由來美以派の信條は二十五條であつたのを七ヶ條は時世の變化によつて不要とされたのである。然してその取捨は全く三派の全權委員によつて成された。然して制度に關しては我が要求を何れ位考慮したか明で無いが、彼等の決議は決定的であつた。それでもこゝに至るの容易ならざりし爲に日本教徒の喜びは多大であつた。もとより萬事は來年五日の總會で定まるのであるが、峠はもはや見えて居た。

それで三派合同成立感謝會が十二月二十二日日本郷中央會堂に開かれた。石坂龜治司會し三上操吉開會趣旨を述べ、本多は合同成立の顛末を報告した。次いでコーツ、松本益吉、江原素六、普賢寺轡吉、平岩愼保、ソーパー、マッケンジー、大熊氏廣の演説あり、平田平三の祝禱に終つた。來會三百名であつた。

尙ほ明春開かるべき總會の準備委員として美以派より本多、ソーパー、高木正義、加奈陀派より平岩、江原、コーツ、南美により吉岡美國、ヘーガー、松本益吉を擧げ、また座長の名を以て米國及加奈陀にある合同全權委員に感謝狀を贈ることを決した。

これより先き本多は、十二月一日神戸に赴き宣教師ヘーガー方で吉岡美國、田中義弘、松本益吉、堀峰橋、太田虎吉、芦田慶治と合同に關して談つた。四日名古屋に下り五日歸京した。二十日には青年會館に府下各新聞記者を招き明年東京に開かるべき萬國青年會大會に關して披露した。年末弘

前に歸省した。

此頃の日記に眼鏡のことがある。いつの頃よりか彼は教壇で聖書を讀み草稿を見る時は眼鏡を用ゆるやうになつた。眼鏡は彼の特徴ある眼光を遮つて示さず遺憾が少くなかつた。眼鏡を外して自由に談るとき聴者は眞の彼に接する思ひがした。またこの頃神液注射が幾度も試みられて居る。勝れたる身體も漸く違和を生ぜしかと憂ひられる。然も用務は非常に繁かつた。明治三十九年の青山校友會報は院長及校友會長たる彼の校外事務を列舉した。それは二十有一の多きに上つた。

曰く、(一)日本基督教青年會同盟委員長、(二)東京基督教青年會理事、(三)世界基督教學生同盟副委員長(委員長は瑞典のカール・フリース)、(四)美以教會日本年會傳道會社々長、(五)同日本年會出版委員、(六)同審判委員、(七)同退老傳道者扶助會社評議員、(八)日本宗教家協和會幹事、(九)海外教育會理事、(十)北海道同志教育會副會長、(十一)聖書之友評議員、(十二)津輕伯爵家相談役、(十三)青森縣人寄宿舎修養社々長、(十四)濃飛育兒院評議員、(十五)原胤昭の出獄人保護者會評議員、(十六)軍人後援會評議員、(十七)平和協會理事、(十八)國民作新會理事、(十九)福音同盟會特別委員、(二十)メソヂスト教會獨立期成同盟會評議員、(二十一)本年の基督教青年會夏期學校長。

以て如何に多端なるべきかを察し得る、このうち九、十は押川方義と事を共にするもの、十六は

松島剛の依頼による、十八は嶋田三郎、海老名彈正等と共にするや、政治的色彩あるものであつた。

二十四、明治四十年の春

舊臘弘前に歸省しありし彼は一月五日青山に歸つた。青山學院の管理は從來は名義上の校主を設け、内外人より成る商議員會ありて、院長以下教職員の任免や會計を司つて居た頗る不規則のものであつたが、本多は立案し普賢寺辯護士と協議などして財團法人組織とし、それが去年末認可されたのであつた。商議員は、理事に變へられた。其數十八名で中美以宣教師九名日本信徒九名を含むだ。而して財團の第一回理事會は一月九日招集された。

四月に開かるゝ青年會大回の爲には彼はフェイスチャー、及び大塚素など、度々伊藤博文侯を訪うた。これは日本最初の國際的集會の爲當路者の援助を求めたのであつた。伊藤は終に三十日に至り井上侯の名を以て一萬金を寄附した、一月下旬には名古屋、神戸及京都に至り演説の外に三派合同の準備委員會に臨んだ。

二月末青森縣凶作の爲に農民の窮狀甚しく地租免除を請願せんとして縣民の代表が上京した。彼等は之に關し代議士菊池九郎に依頼する筈であつたが、折悪しく菊池は病氣なりし爲、本多に頼んだ。彼は常に郷里を思ふ念深く、此時も諸方に向つて免租の運動に努め、或は貴族院側に説き、ま

た代表者を珍田捨己に紹介し、更に津輕舊藩主にも訴へた。此時舊藩主を煩はすは不本意なりといつたものもあつたが、本多は三百年も仕へた藩家に對し、瀕死の苦境にある農民の救済を訴へるに遠慮する場合で無いと云つた。津輕家でもそれでこの運動に援助した。その結果免租とはならなかつたが延納といふことゝなつた。この事は後年平澤均治の記すところである。

四月の萬國學生青年會同盟大會と五月のメソヂスト三派合同第一總會とは近くに迫つた。其準備に忙しかつた頃一の問題が起つた。前者の爲に來朝したモットは米國諸大學の學生及び校友の寄附に係はる十萬圓の金額を以て日本に於ける學生寄宿舎を建てんとしつゝあつた。然るにモットより我が青年會同盟委員長本多に宛てし書簡には、我が文相牧野伸顯が學生風紀に關して下したる訓令を見て善良なる寄宿舎の必要を感じて此寄附を爲すとありしとて、護教主筆高木壬太郎は大義滅親の義憤に燃へて、社説に於て、我が下宿の不完全なるは歎くべきも、牧野文相の訓令を以て學生風紀廢頽を證し、外人の憐れを求むるは耐ふるところにあらずと論じた。尙ほ女子青年會館其他の例を引き、海外に訴へて諸種の寄附を募るもの往々我國の名譽を犠牲にして目的を達するを非難した。

(二月二十三日護教八一三號) ジャパン・メール新聞はこの要旨を抜萃して掲載した。

本多は之を閲して、事は文相の訓令などに關係なく唯だ同盟の幹事が文相に逢ひし時、文相は一般下宿の低級なると學生の道德状態とを大に懸念すと云ひしを以て、之に動かされて善良なる寄宿舎

を要すと信じたるモットの書簡を受けしのみと辯明した。然して都下六萬の男女學生中萬餘の支那學生を含み、市民は之を家庭に迎へて保護するを得ず、徒らに一千七百四十餘の營利下宿に投ぜしめて顧みざるは極めて危険なりと彼は云ふた。(三月十六日 護教八一六號)。

然し訓令と談話とは形式こそ異れ何れも道德風紀の憂ふべく、宿所の不完全なるを知らしむるに於て差別はない。それが善美ならば勿論、不良にしても我れ自ら之を改善する力足らば外國の援助の要は無い。それがさうでない爲に助力は來るのである。この事は寄宿舎に關はれど、押し擴げて考ふれば宣教傳道の根本問題が其處にある。我が宗教道德にして完備せば外教の入る必要は無い。基督教徒はその缺陷を感じるが爲に外教を迎へたものである。極言すれば精神的被征服者である。然しさういへば儒教佛教の徒も皆然りである。要は唯だ外來の思想を執つて速に我物とし、之を育成して却てその産地以上のものとするにある。儒教と佛教はそれを爲し遂げた。基督教は未だしである。唯一の差は佛教の傳來には外資を仰がなかつた。殿堂伽藍も皆我手に成つた。然るに基督教は外資によつて會堂、學校を建て寄宿舎にさへ及ぼんとする。この經濟問題は潔癖の人をして堪へ難からしむる。之を包容し之に隱忍するは容易に爲し難いことである。

尙ほ青年會の國際的會合の爲に政府方面の助力を仰ぎし如きは嚴密なる政教分離の主義から見ればこれも不當の事であつたらうが、こゝにも包容主義が實行された。然もこの大會に列せし我が教

界の諸士も知りてか知らずか、之を問題にしたものは後に記す内村以外にはなかつた様だ。有名な妥協排斥家植村の如きもそのうちに列して講演をして居た。

萬國學生基督教青年會大會は日本に於ける最初の國際會合であつた。由來この青年會同盟大會はこれより十二年前即ち一八九五年瑞典ヴァテナ城内に開かれし第一回の會合に始まり、爾來諸方に開かれ第二回は米國のウイリアムス・タウン及びノースフィールド、第三回は瑞西のジュネーヴ第四回は佛國ヴェルサイユ、第五回は諸威ソロオ、第六回は和蘭のザイストであつた。この第四回には本多、第五回には笹森宇一郎、第六回は本多、井深が出席したがソロオの會で笹森は次回は日本にて開くべき提議を爲して容れられしも日露の役となりて果さず、遂に第七回を日本としたのであつた。

此時本多は日本同盟の中央委員長であつて世界同盟の副委員長であつたので準備に當つた。米國より總幹事ジョン・アール・モットは二月末來朝し、三月には紐育のユニオン神學校長チャールス・カスバート・ホールが來朝し十三日から連夜四回の講演を爲した。本多、井深、渡邊暢、新渡戸稻造が順次にこの講演の爲に司會した。四月一二日日光に於て萬國中央委員會開かれ總委員長たる瑞典のカール・フリリス、總幹事モット等五十餘人出席し本多と井深とは日本を代表して之に列し準備を整へた。

四月三日神田青年會館に世界大會は開かれた。二十五ヶ國の代表六百二十七名が參列した。

壇上はフリリス、本多、モット着席しフリリス司會し先づ日英獨佛清韓の國語を集めし讚美歌を異語同曲に唱ふ。フリリス次で祈り終つて開會の辭を述べ鶴崎庚午郎は之を通譯した。次で副委員長本多の演説あり、井深は大會の執行順序を報告し、これより祈禱會に移り本多の嚴肅なる祈に次ぎ、諸國語の祈は續き本多の祝禱を以て終る、これが第一日の午前であつた。午後は協議會に費し終て一同外務大臣林董の官邸に招待された。

其夜は發會式である。壇上は司會者本多を中央に、市長尾崎行雄、江原素六、フリリス、モット、グリーン、渡邊暢、笹森宇一郎等着席、渡邊の祈に次いで笹森は日英語を以て日本青年會を代表し歓迎の辭を述べ、次いで日本信徒を代表して江原素六、日本にある宣教師を代表してデー・シー・グリーンの辭あり次いで尾崎市長の演説あり、文相、外相、伊藤侯、諸威國王、米國大統領ルーズヴェルトの祝辭祝電あり、フリリス及びモットの答辭あり、司會者の祝禱を以て閉會した。

これより四、五、六、七日の間協議會と講演會と相次ぎ、日本よりは植村正久、海老名彈正、宮川經輝、元田作之進、井深棍之助演説し、支那の王正廷、朝鮮の尹致昊、印度のファガー、英のアレキサンダー・マカリスト、蘇のアレキサンダー・シムプソン、佛のアンリ・ボア、獨のテオフィル・マン、米のガウチャー等多數の演説あり、在日本正教の主教ニコライも臨席し四十五年の回

願を談つた。社交的には東京市有志者の招待あり、男爵澁澤榮一の歓迎辭あり、大隈伯邸の園遊會もありて大隈も演説し新渡戸稻造は之を通譯した。七日には當時淺草本願寺に開會中であつた佛教徒大會から二人の使來り、その會の決議により敬意を表すとの書狀を持參して來たので本多は翌日本願寺に到りて答禮した。終に四月八日南滿鐵道會社總裁男爵後藤新平は大會内外代表者及び我が朝野の人物八百名を小石川後樂園の園遊會に招いた。後藤の演説あり井深梶之助之を通譯しモットは之に答辭を述べた。

會期中會外に諸集會あり、會後十數組の演説者は國內を分擔して諸方に傳道した。

これは一種のデモンストレーションである。世界の諸國より人を集めて歡喜するは兒戯に類するもの無きにあらず、この満足の爲に力を盡すモットには御山の大将的の稚氣ありと云はゞ云へる。然しこれだけの事を爲すは容易ならず、かくして幾分なりとも世界的理解と融和とに貢獻するものとして人々は之に賛同したのであらう。

此大會に關しての世評は如何であつたか。世間の新聞は概して好評したが都新聞に於ける田川大吉郎の如き教界の事情に明なるものは寧ろ失望を表白した。福音新報は大體成功なりとし、形の成績は著明にても、精神的内容は多少失望を與へしやも知れざれど言語其他の差異を思へば止むを得ざりしと評し、基督教世界は此會によつて東洋的意識の自覺を發揮したりといつた。山路愛山の獨

立評論は、

『平生一事を爲さず、日本の精神界に些の功罪なし。一旦外人の來遊を機とし遽かに假粧の盛大を競ふ、曰く日本全國の基督教青年會の代表者意氣天を衝くと、以て噴飯すべし、以て慷慨すべし、以て恥づべし、以て泣くべし』と評し、かゝる御祭主義で精神界に何の能く爲すあらんといつた。

内村鑑三は萬朝報の英文欄で、

『余の聖書には『此世に従ふ勿れ』とあるが近世の宣教師や青年會の書記に書かれた聖書には『此世に従へ』とあるのであらう。ジョン・モットは彼れ政治家たらば大統領たらんと人はいふ、彼は偉人なり、されど宗教家にあらず、オーガステンや法然が宗教家たりし如く然らず、要するに代表的米國クリスチャンにして靈の人にあらず、かゝる人の來りて我國の爲に働くは傳道の爲に危険である。尙ほ伊藤侯が此會に一萬圓を寄附したりといふが、これは侯がクリスチャンの靈的經驗を得たるによるか、或は我教界が侯の寄附を受くる迄に墮落したるか』と罵つた。

内ヶ崎作三郎は雑誌「新人」に於て、

『思想の點に於ては彼れ恐るゝに足らざるも單純平凡の思想を中核として活動する點は彼遙に勝れり。思想表現の形式も彼の鍛鍊勝り個人體格は云ふに及ばず。日本人は國民的分子を多分に有し我は弱點を掩ひて長所を示さんとすれど彼はさる懸念なく光暗兩面を示して憚らず』と評した。

此年青山學院は其起元たりし東京と横濱との兩校が合併し土地を青山に得て東京英和學校の基を開きし明治十五年以來二十五年に當るのでその記念會を催うした、會は四月八日午後四時より、新築纒に成りて白聖未だ全く乾かざる新講堂で開かれた。本多院長の開會辭ありて、學院理事會議長小方仙之助沿革二十五年史を述べ、美以監督ハリス、ポルテイモア女子大學長ガウチャー、東京帝國大學教授元良勇次郎、美以教會監督クランストン、加奈陀メソヂスト教會總理カーマン、文相牧野伸顯(代理)の祝辭あり、終りに司會者は大隈伯を紹介して曰く、前總理大臣また外務大臣としてにあらず早稻田大學新總長としての大隈伯を紹介するを光榮とすと。

隻脚の老伯の爲に特に供へし卓子を自ら後方に押しやり、携へたる杖を其上に載せ去りて立つた伯はいふ。

「早稻田大學も今年創立以來二十五年で青山學院と同年である。然して萬國青年會の參列者は二十五ヶ國から來たと云ふから二十五の暗合である。さて今日こそかゝる宗教家の會合もあれば宗教學校の祝節もあるが三十五年前は耶蘇教は國禁であつた。當時のことは我が舊友で此壇上に居るニコライ氏をよく知るところである、我輩當路者は時々間牒を放つて氏の行動を探つた。」

七十歳の老伯がかく談れば紫色の袖の衣を着けた老主教は唯々として頻りに頷く、宛然一幅の畫圖、時代の波は其間に漂うて會衆はどよめいた。

伯は言を續ける。「それで傳道者は國禁に懸念して先づ學問を教へた。自分の如きも長崎でフルベツキ氏から英語を學んだ。若し其時から英學を止めなかつたら今日は英語演説をやるのだが。それで國禁は三十五年前に解けても傳道者は國情に適する様に努めて随分困難を見たであらう。それは推察に餘りある。早稻田でも今日迄には幾多の辛酸を嘗めたから、之によつて察すると學院も二十五年間には随分艱苦を忍んだらう。特に日本人と米國人と協同して事を爲したのだからその調和も容易で無かつたらう。然し日本人の國民性は至つて淡泊でよく善に移るのだ。この點は元良博士などに心理學上の研究を煩はしたい。何れにしてもこう淡泊だから昔から宗教上の争亂も少なく、今日に於て日本と米國とが宗教上最も自由があるので、英獨佛や西班牙などは今尙ほ政治上に於てすら宗教の紛議が絶えぬ。甚しきは内閣さへその爲に更迭する。幸に日本にかゝる事は無い。現に本校の祝に文部大臣が祝辭を送つて居る。困難は無くなつた、今後の大事は東西洋文明の調和だ、學院の如きは此點に大に努められたい。」

流石に名説であつた。青山に響いた維新元勳の聲はこれのみであつたかも知れぬ。しかも大小の差こそあれ同じく學府の長としてこゝに西南の一雄と對立した東北の一士は遙かに維新當年の對抗を顧みたかと思はれる。

終に祝辭を頼まれたニコライは一言、萬づのものは皆天に向つて神の座にいたるものであると述

べて祝禱をさしげた。

夜になつて校友會の賀筵があつた。新築校舎の方形の中庭に急造の板張をして護謨布の屋根を張つた中に大球燈を釣り列國の旗を二列に張り、美はしい食堂を現出させた。此夜は萬國青年會に來た人々をも招いたので英の大學教授も佛の伯爵も、北歐人も南歐人も、パグリを頭に卷いた印度人も、長袖辨髮の支那人もあつた。

宴は本多院長の祈に開かれて忽ち歡笑の聲は堂に充ちて融和の氣は洋々とした。唯だ白衣の給仕が足早に行き交ふと急造の床の波動が地震の如く、また船中の食堂の様な感じを與へたが幸に陥没も起らなかつた。

卓上演説の始まつたのは九時に近かつた、澁澤榮一男をはじめとし、蘇國大學のシムブソン博士、後藤新平男、加奈陀教會のサザランド博士、佛國のポータリス伯が談り、終りに前外相として紹介されて加藤高明が英語で談つた。

本多院長は立つてこの不完全な場所へ内外の賓客の會せられしを謝して會の終りを告げると、明治學院の井深總理は立ちて大聲青山學院の萬歳を唱し滿堂起立して之に和した。來賓は創立二十五年記念刊行の學院一覽と繪端書とを受けて各歸路に就いた。列席せしは十二ヶ國の外人九十八名邦人八十名と註された。これは學院未曾有の宴であつた。然もこの後幾何もなく學院の爲には容易ならぬ變化を見るの運命は迫つて居た。

青年會の大會と青山の祝節を終りて本多はガウチャー、マン等と中國及四國に赴いて大會後の傳道に従ひ、歸路獨り神戸大阪を経て吉野に行つた。四月既に暁く奥千本や西行庵も尋ねたが花は山奥に少し残れるのみであつた。藏王堂、吉水院、如意輪寺、御陵を巡りて何れも感慨の因ならぬはなく、花なくも吉野は吉野、杉林美はしく山岳重疊の壯觀に打たれた。更に畝傍に到りて神武綏靖御陵に詣でた。豊橋で演説して歸京したのは二十七日であつた。

五月に彼の説教集が發行された。青山の白鳥甲子造が三浦泰一郎に托して編纂し、之を自己の斯文閣より出したのである。自稿とその演説を他人が筆記せると混じて居るが、編者は意を用ひて略々筆致を一にした。四六判三三〇頁、國士論以下凡て五十二篇、そのうち超然人格、理想に達する道程、自重、競走の秘訣、祈る者は行ふべし、片岡健吉君を追念して其教訓を求む、歐米の慈善事業と其根本要義の七篇は遺稿に再録された。尙ほ純然たる説教の外に天長節雜感、戦後の日本、外人の眼に映じたる日本、の如き時世に關するものもあり、歐米觀察に關はるものもあるが、絶版となれるは惜しきことである。

四月中旬救世軍の大將ブースが來朝した。彼は此時既に七十九歳であつたが尙ほ元氣は盛んであつた。同軍の事業は明治二十九年より日本に移入せられ山室軍平等主として之に當りて努力せし爲

に此時既にその効果を認められありてブースは朝野の歓迎を受けた。滞在月餘地方にも赴いた。本多は五月下旬彼の送別會に臨んだ。

二十五、三派合同の總會・新教會の監督

メソヂスト三派合同を完成すべき明治四十年五月の總會を豫期して昨年來具體的なる諸問題、殊に制度に關する諸説が起つた。先づ監督は何人たるべきかは一人説が多數であつた。然れどその一人は現在宣教監督ハリスを擧ぐべしとの説さへあつたが、大體日本人説が多かつた。然るに二人説も三人説もあり、三人とすれば三派各一人を擧ぐべくして合同の實に伴はずと思はれた。或は一人を專任とし他の二人は牧師兼任とすべしとの説もあつた。されど外國關係を最も顧慮する小方仙之助の如きは三人として何れも宣教師を以てすべしとさへ思つた。然して監督の俸給問題等は勿論顧慮せられた。次に年々教役者全員と信徒代表とを招集して會議する年會の數に關しても一とすべしとするもの二とすべしとするもの、三四とすべしとするものもあつた。要するに一元か多元かの問題である。尙ほ部長を如何にして擧ぐべきか、本部の幹部は如何なるものを設くべきかの問題もあつた。監督に關する護教記者の間に答へて山路愛山は云つた。「一人で澤山だ。何に西洋人にする、そんなこといふ馬鹿があるか。本多さんの手腕はこれから判るのだ、是れ迄は御客分といふ風

だつたから、人は責任の位地に立つて見なけりや本當の處は判らない。本多さんはだゞ廣い清濁併せ呑む度胸はいゝが、餘り平穩主義ばかりやると煮切らないなどゝ悪口する奴が出来る。」

米人監督の下に開かるゝ第二十四回の美以年會は五月十四日より六日間青山學院であつた。議長は監督克蘭ストンであつた。年會は弘前、北海道、名古屋、仙臺、東京信濃、東京横濱の六連回より成りその長老司は順次に山鹿元次郎、カシデー、ドレーパー、スワーツ、石坂龜治、小方仙之助となつた。これと同時に日本メソヂスト即ち加奈陀派の第十九年會は平岩愷保を議長として麻布教會に開かれた。此年會は東京、静岡、山梨、長野、金澤の四部より成り、部長は順次に平岩愷保、波多野傳四郎、土屋彦六、飯沼權一及びマッケンジーであつた。

美以派の南部即ち九州の第九年會は既に四月中に終つた。この年會は、(一)熊本、(二)門司、小倉、(三)鹿兒島、沖繩、(四)大村、練早の四連回より成り、長老司は順次にデヴィソン、フレッツ、シユワルツ、中山忠恕であつた。南美以教會は神戸部、松山部、廣島部の三部より成り部長はヘーガー、ウイエルソン、マイアスで皆宣教師であつた。

三派合同完成の爲米國及加奈陀より六人の全權委員が派遣された。即ち米國北部美以教會よりの監督克蘭ストン (Cranston) (一八四〇年生六十八歳、來朝第二回) と博士レナード (Leonard)

(一八三七年生七十一歳、傳道會社幹事、來朝第二回)加奈陀よりの總理カーマン (Carman) (一八三三年生七十五歳にして加奈陀メソヂスト全部の總理、來朝第三回) 及び博士サザランド (Sutherland) (一八三三年生七十五歳、傳道會社長)、米國南部美以よりの監督ウイルソン (Wilson) (一八三三年生七十五歳、來朝第六回) 及び博士ラムバス、(Tambath) (一八八六年以來日本に傳道すること十二年) であつた。

總會の爲の直接準備の爲、公式に全權委員より任命されたる準備委員は美以派よりハリス、ソーパー、本多庸一、高木正義、和田劍之助、加奈陀派よりポールデン、コーツ、平岩愼保、江原素六、山路彌吉、南美以派よりウエンライト、ヘーガー、吉岡美國、釘宮辰生、松本益吉の十五名であつた。

準備委員は準備概記を發表して、(一)日本に於ける三派傳道の由來と教會の現状、(二)教會歴史に於けるメソヂスト教會の位地及び合同新教會の性質、(三)三派合同の趣旨、(四)三派日本信徒の總數其將來の豫想、(五)六全權委員の紹介。を列記した。そのうち合同の趣旨は、(一)勢力の集中と、(二)人物財政の經濟を主眼とし、三派を合して信徒總數は一二、六七一人、宣教師(妻とも)一六四人、按手禮を受けたる日本教師九〇人、普通傳道者四九人と記された。之を當年の米國美以の三百十萬人、南美以の百七十萬人、加奈陀の三十萬人、合計五百十萬人の信徒に比すれば殆んど

五百分の一の勢力に過ぎぬが、これが宣教以來三十五年の成績であつた。

合同總會は五月二十二日より前月落成したるばかりの青山學院新講堂に開かれた。この第一日は克蘭ストン議長として司會し、本多庸一の聖書朗讀、カーマンと吉岡美國との祈を以つて開かれ、鵜崎庚午郎とデイ・エス・スペンサーは書記に選ばれた。議長は本會は嚴密に云へばいまだ總會にあらず、總會を完成する爲め召集されたる代表者の會議なりと宣し、先づウイルソン監督を紹介し、ウイルソンは立ちて教書を朗讀し、別所梅之助はその譯文を讀んだ。その全文に曰く。

教 書

一千九百七年五月東京に開かるゝ總會に際し、メソヂスト監督教會、南メソヂスト監督教會、及びカナダメソヂスト教會の、日本傳道地における諸年會を代表する總代につぐ。

親愛なる兄弟。神の御攝理により、我らの主なる御子イエス、キリストの御國を擴めんと期して我らはしか信ず。この會は、數年間、敬虔なる男女が、懇に努めまた祈りたる所を實現せんとし、併せて苦心あり、犠牲あるが中に、この大時期にいたるまで守護し、愛撫したる公益を振ひ興さんとして、こゝに開かる。我らは將に勇ましく、氣高き靈のつとめに入らんとす、而して我らの中には、すでに休息に就きしもあり。

アメリカにある母教會が、その貴き、かつ心を籠めて生したてゝし子なる日本の諸教會を、キリストの御爲に尊み、かつあつく愛することは、疑ふまでもなし。いまやキリストによれる靈において既に一なる日本の諸教會が合して、列國環視の間に一體となり、而して我ら萬人の主なる君の活ける肢體として、さらに強く、さらに豊かに生長せんとするにあたり、アメリカなる母教會が日本の合同教會に對する愛情と興味とは、いよ／＼加はらざるを得ず、而してなし得るかぎり最上最良の方法を盡して、その建設を助け、その發達を計らざるべからず。母教會は合同教會が、日本のメソヂスト教會として、姿と粧ひとを改めたる上、すべての善事をなすに堪へ、その力のいたく増さんことを希ふ情、極めて強くかつ切なり。この運動について我らの望む所は、たゞ一つ、即ち日本の教會に、無上の幸あれかしとなり。こはたゞ我らが心より兄弟として共に努むるにより、父なる神の、我らの力をあはせての祈禱と同情と勞力とをかへりみ給ふによりて、遂げらるべきなり。

故に、米國諸教會の總會にて、任命せられ、全權を與へられたる協議委員らは、こゝに來りてその決定したる合同基礎案を提出す。新教會はこの案に基きて正當に組織せらるべし、而して全權委員はその組織と商議とに與りて、總會を指導せん爲、つゝしみて、こゝにその考ふべき事、則るべきことを示さんとす。この條々をあぐるにあたり、全權委員は總會に告げんと欲す、すな

はち相當なる時來らば、總會自ら合同案中の規定を左右するを得べし。されば當今の要は、たゞ最も實効ある組織を整へ、以て將來、商議と經驗とより生ずる利益をまつにあり。かるがゆゑに必要なる規定設けられ、權限、義務定められ、教會條例制定せられなば、總會の役員を選擧し、傳道局、教育局、その他現今日本の教會において必要ある諸會を設くべし。

アメリカの總會にて議事を進行せしむる法は、會議の當初、もしくは會議いまだ開かれざる前、ある規則により、總會に出だすべき總ての問題につきて委員をあぐるなり。しかして會は、この委員の報告をうけたる上に審議す。かくして總會は、一個人もしくは一派に關することなく、大主義を討議す、而してその議の最善最良の効果を擧ぐるを得。これらのことを思ひめぐらさば、條例、年會、諸局、諸役員の問題に對する諸委員の報告の裁可せらるゝまで、全權委員がその定むる所に從ひて、議會を主理する事の當を得たるは、明かならん。總會と教會と、かく事を處するの案成り、すべて之に携はるものゝ、權利と義務と定まらば、我らはその機關のいかなるものなるか、はた如何にして之を運轉すべきかを知らん。

種々なる委員は、その特殊なる事業に適せりと認むる者をあぐべし。なすべき事數多ければ、おの／＼大に耐へ忍ばざるべからず。ことに我らの無益に勞せざるやう、聖靈の絶えざる嚮導を天の父なる神に心をあはせて、祈らざるべからず。願ふは神の御心を知りて、之に從ひ、之を果

さんことこれなり。

總會に對し、その力のかぎり、すべての援助を與へんことは、全權委員らの義務なり、希望なり、また樂しとする所なり。新教會の全く組織せらるゝまで、全權委員は助言委員として、總會の將來のこと、乃至教會の生長に最もよく備ふる所あり、米國の教會に對し、また日本の若くして望多き教會に對し、その職責を省みて盡す所あらんとす。

我らは諸君が我らの精神と目的とをよく曉られんが爲、合同問題とこの基礎案につき、兄弟として包まず所思を談らんと欲す。合衆國及びカナダの人々が、開化せる他の國民の權利を尊みその國民の時務について、他より強ひて干渉せんとするときことなきは、いふまでもあらず。わが數教會の治者たる團體は、この主義を認むるにやぶさかなる者にあらねば、日本にある數協會が獨立して一結社たらんと請願し來りたる時にも、之を認めたり。されど我らは、日本帝國に自給の教會いまだ極めて少き時に之を行ふにしあれば、かゝる根本的變化の果して、この秋になへるやいなやと、多くの人をかなしましめ、又不安の念を抱かしめざるにあらざりし事實をかくさんと欲せず。もし我らの教ふる所は何等かの害あり、我らの施政は壓制に、宣教師は不親切にもしくは不適當なりとせば、土着獨立教會の組織せられんを望むも不思議ならず。しかるにすべての關係において斯ることあらず。日本の諸教會の速かに獨立せんとする理由は、明白なる國

民的組織を整へ、獨特の方法を用ゐなば、日本の教師と信徒とにとりて、その同胞を教化するに効あるべしとの、請願者の信念これなり。

われらの總會のいづれにてもこの確信の眞摯なるべきを疑はず、また果してその議論の當を得たるやいなやをも問ひしことなし。總會は、その主義と歴史とを守りて、請願を拒絶することなく、事件の全體を審議すべき全權ある委員をあげたり。これかゝる事情のもとにてなすを得る最も穩當なる手段なればなり。而してこの委員は正當に擧げられ、權力を與へられたる後も、妄りに動かざりき。平和なり、國狀舊に復するをまち、なほ日本のメソヂスト教會を合同すべしとの日本の兄弟の熱望を認めたるのち、委員は己に委ねられたる職責の重きを思ひ、細心以て、事に着手しぬ。全權委員の詳細の行動を陳述せんは、要なし。たゞいはん、種々の場所において數回の會合をとげたるのち、合衆國における二メソヂスト監督教會と、カナダのメソヂスト教會とは七月ニウヨーク州バファローに會して、當時まで合同基礎案中の大問題たる諸點につきて、一成案をみるにいたれり。この事は當時教會の諸新聞にて公けにしたるがごとし。

しかれどもなほ協議すべき細目にして、重要なもの少からず。これらはその地に赴きて決するに如かずと思惟したるを以て、委員は、一團體ごとに日本に派遣せらるゝもの各二名をえらび之に諸委員を代表する全權を委ねて、事に當らしめたり。かくは、協議のなりたるにより、日本

における三教會の年會は、合同教會第一回の總會に、總代を選ぶべきやう通知をうけたり。委員のあるものは、すでに數週間日本に滞在し、合同を成立せしめ、新教會を起すにあたり、之に關聯せる複雑なる問題を研究し、破綻なからしめ、効果あらしめんを期せり。支那宣教第百年記念會の開期中、上海に開かれたる最終の委員會にも、以前とおなじき問題の、儼として一同の心に存するを認めたり。それらの問題中には、左のごときものあり。

- 一 宣教師の日本教會及び日本教師に對する關係。
- 二 傳道資金の配付、何時まで之を繼續すべきか。いかなる法を以て之を管理すべきか。
- 三 われらは傳道會社に對して、將來のことの約定をなすべき權利なきものなれば、日本における事情のいかによりて、諸會社よりの送金大に減じ、もしくは全く送金せざる事となりて、新教會ひとり大に戦はざるに至るべきかを考へざるを得ざりき。而して左のごとき状態あらんには、事のあるひはこゝに至るべきかを恐る。
- イ 自給に無頓着なること。
- ロ 宣教師と日本教會年會との不調和なる時。
- ハ なほ正しく母教會に屬しをる大傳道地より本國教會に對する異常の要求ある時。
- ニ 母教會の教理及び政治より甚だしく異りゆく時。

ホ 國際の擾亂ある時。

見るべし、これらの状態の多くは、日本の兄弟の自らいかんとも決し得る所なるを。而して事は大方、それ自由を用ゐる精神の如何によりて定まらん。もし母教會の補助にして、子の心根をもて受けられんか、補助は、愛と喜悅をもつて與へらるべし。そは幸なる關係といふべきなり。我らは、宣教師が兄弟の親しみをもて溫和ならんことを望み、また日本の教會が之に對して、同じく道の爲につくすものとして、歓迎せんことをぞむ。かれらのこの大帝國にて爲さん事は、よろづキリストとその御國との爲なるべし。彼ら時に判斷を誤るとも、日本の兄弟はあやまることあらざれ。兩者とも心にいますキリストの忍耐をあらはさんとすべし。しばしの間は、日本におけるキリストの教會をさへ、之を盛んならしむるの責任、兩者の上にかゝれり。かゝる際、双方の權利と責任とを平等ならしめんこと、やゝ難し。されど神とその王國とは、個人いな國際の問題の上に卓出す。委員は、教務上の事件につきて、經驗を得るに十分なる自由を新教會に與へたりと信ず。新教會にして諸君の願ふ所、われらの望む所のごとく發達せば、その經驗によりて、更に大なる責任を負ふにいたらん。

我らの兄弟よ、つねに之を心にとゞめられよ。母教會にとりては、全く手を引く方、はるかに容易なりしならん。されどかく事業を廢棄するは、不自然にして、神の目にも、人の心にもよる

しからざるべし。彼らはその植ゑたる葡萄の樹を愛をもて、生したてざるべからず。これは人々のたえざる出資を要するものにて、よしや愛のためとはいへ、その資金を配布する機關を指揮するにあらずば、年々歳々の寄附、得てのぞむべきにあらず。委員らは、宣教師の爲ならず、日本の教會の爲に、この明白なる道理を認めざるを得ず。おそらく今後數年間は、事業の性質上補助を要すべし。我らの數傳道會社も之を認めその約を履むべし。日本の兄弟は獨立の團體ならんを求めたる時、補助を繼續せよとの事を記されず。従つて諸總會において之に關する何らの決議なく、委員はもとより右諸會の議を修正し、もしくは附加するの權なければ、たゞその委任せられたる件々を規定によりて審議せるなり。委員は、本國の諸教會の道理上望むべき所を認め、合同基礎案に示されたる配布法にしたがひて、この事業に對する本國の興味も薄らぐことなく、日本教會のために寛大なる應答をなすべきを疑はず。

我らはあつく信ず。日本の兄弟がその手に委ねられたる事業を氣高く維持し、かつ老婆心を以てする干涉に對し、母教會の細心を怪まざることを。兄弟よ、記憶せよ、分れ、隔り、遠かるとも、母の心は優し。われらはこの大いなるメソヂスト教會一統の名と譽とを尊むやう、われらの心霊の孫兒に、諸君が教へられんことを望むものなり。

すべてのものは、喜びをもて、日本における自給の教會と學校とが、われらの主キリストの爲に、大業を企つるにいたる力ある日の來るべきをおもへ。さはれ我らは、さらによき日と、自給の高潮とに導かるゝやう、互にしかるべき方法をとり、相當に慎み守るべきなり。

されば兄弟よ、爾らの徳をたて、かつすべて聖められしもの中において、業を爾らに與ふる能ある神及びその恵の言に、今われらなんぢらを委ぬ。我らは、なんぢらの、キリストとその使徒たちによりて説かれ、教會と信徒とのために、聖書に示されある教理に忠ならんことをいのる。我らはなんぢらすべてと、なんぢらの會友とに、神の國の祝福と權威との加はらんをいのる。』

流石に情理を兼ね意を盡したる練達の文、使徒の書翰を思はしむるものがある。議會の通譯者として小畑久五郎、平岩愼保、松本益吉その補助として鵜飼猛、小方仙之助が、擧げられた。次に代議員資格調査委員を擧げ調査の結果正式に認められたるものは左の如くであつた。

九州美以教會選出

教職 笹森宇一郎、ジェー・シー・デヴィソン、古坂啓之助、イー・アール・フルカソン、中山忠恕、

信徒 遠山參郎、菅沼元之助、木場貞義、田中省三、ミス・イー・ラッセル、

補充教職 エー・イー・リッゲビー、

信徒 成田保英、都甲長五郎、加藤マサ子、美以教會選出

教職 小方仙之助、石坂龜治、ジー・エフ・ドレーパー、ゼー・ソーバー、本多庸一、山鹿旗之進、平田平三、山鹿元次郎、川澄明敏、杉原成義、關澤義之助、別所梅之助、鶴飼猛、デビット・エス・スペンサー、

補充 シー・ビショップ、飯田兼三、シー・ダブリュー・ヒュウエツト、

信徒 後藤清太郎、伊藤榮太郎、高木正義、二宮安次、津田仙、普賢寺輒吉、平澤均治、堀田達治、和田劍之助、石坂正信、根本正、山内庫之助、舟橋雄、安藤太郎、

補充 鈴木愿太、佐藤勝三郎、近藤市太郎、

南美以教會選出

教職 吉岡美國、釘宮辰生、エス・イー・ヘーガー、鶴崎庚午郎、堀峯橋、ビー・ダブリュー・ウォーター

ス

補充 ダブリュー・エー・デビス、ゼー・シー・ニュートン

信徒 中村平三郎、長谷基一、西村靜一郎、三宮茂俊、宇野圭三、吉田履一郎、

補充 宮崎清吉、辛島汎、

日本メソヂスト教會選出

教職 土屋彦六、平岩愷保、波多野傳四郎、デー・アール・マッケンジー、飯沼權一、エチ・エチ・コーツ

高木壬太郎、太田虎吉、

補充 橋本陸之、曾木銀次郎、山中笑、

信徒 江原素六、大石豊吉、村松一、西山廣榮、高崎介藏、櫻井成明、松井豊吉、長谷川金平、

補充 暮田治三郎、兼藤龍三郎、

右のうち信徒遠山、田中、大石、長谷川、宇野は缺席し都甲、シートツ、暮田、兼藤、宮崎が各補充として出席した。

次で左の十一種の常任委員を挙げた(括弧内は委員長) (一)監督問題(コーツ) (二)條例編纂(

平岩) (三)傳道局及部局組織(平田) (四)年會區域(平岩) (五)日曜學校、エボース同盟及少年會

(鶉飼) (六)教育事業(本多) (七)出版事業(別所) (八)巡廻制度(山鹿元次郎) (九)特別傳道運

動(山鹿旗之進) (十)財政(平岩) (十一)矯風(根本)

此等のうち條例編纂、財政、年會區域決定の如き三の重要なる委員長が平岩一人であつたのは注目される。

第二日以後第八日迄ウイルソン、カーマン、レナード、ラムバス、克蘭ストン、カーマン、レナードの順で逐次議長となつた。各委員の報告、他の團體代表者小崎弘道、井深梶之助、元田作之

進等の訪問、經費、議事録出版等の雜多の議事等が行はれた。ポルテイモア女子大學長ガウチャーの特別演説もあつた。教會條例は總會に於て逐條を議する時日なきを以て編纂委員は全權委員と協議して制定すべき權限を附與された。但し既定の信仰箇條十七個條に日本人の加ふべき唯一の箇條たる第十六條「吾人は聖書の教ゆる處により凡て在る處の權は神の立て給ふ所なるを信じ、日本帝國に君臨し給ふ萬世一系の天皇を奉戴し國憲を重んじ國法に遵ふ」との條文は特に全會にて可決した。此條文は別所の筆になりたるを本多がその末句を除き代ふるに教育勅語の句を以てしたのであつた。

年會區域問題は二十五名の委員中十一名の多數は (一)九州(琉球臺灣を含む) (二)關西(岐阜縣及富山縣以西下の關に至り四國を含む) (三)中央(岐阜縣より白河の關に至る、北陸道を含まず) (四)東北(白河關以北及北海道)の四年會を可とし、九名の少數は前者の一と二とを合したる西南部三と四とを合したる東北部の二年會を主張したが總會は少數案を採用した。但し本多の動議を以て名稱を東部年會、西部年會とするに決した。

六月一日總會の第八日午後レナード議長席にあつた、條例は未だ全部制定せられぬが監督に關する箇條はその選舉に必要なを以て先づ確定せられ、ソーバーはその英文を堀峯橋は邦文を朗讀した、尙ほ監督委員の左の報告を議題とした。

一、日本メソヂスト教會に一名の監督を置くこと。

二、監督は專任たるべきこと。

三、監督の選舉は來五月二十九日水曜日議事録朗讀の後直ちに之を行ふこと。

この報告は以前に提出され卓上に置かれたので第三項は既に時日を経過して居る。石坂龜治の動議により逐次採決に決し、第一項は報告の通り可決した。

平田平三は第二項を刪除せんことを動議したが賛成十四反對三十二にて動議消滅し、報告通り可決した。

ソーバーの動議により第三項を修正し本日直ちに選舉を行ふことに決した。

監督は一人にして專任と決したのである。

議長は選舉に先だち暫く祈禱せんことを勧め笹森宇一郎をして祈禱會を司らしめた。少時全會默禱の後、石坂龜治、吉岡美國、及び笹森が祈禱を捧げた。終つて議長はウォータース、太田虎吉、高木正義及び笹森の四名を投票検査掛に命じた。出席投票者は加奈陀年會十一名、美以年會二十一名、美以南部(九州)年會八名、南美以年會十名總計五十名。

投票は爲された。検査掛と副書記と別室に入りて開票の結果は議場に報告された。

一票 吉岡美國、二票 平岩愼保、五票 小方仙之助、四十二票 本多庸一、

議長は本多庸一大多數を以て日本メソヂスト教會監督に當選と宣した。彼は本多を擁して壇に登り、カーマンは祈を捧げた。

平田平三は後に此時を追想して曰く。「此時の光景は異様の感を會場に與へ啼泣するものさへあつた。二十餘年の苦心空しからず、漸くかく報わられたのであれば一同の感興は深かつた」と。

議長は明日曜午後三時本講堂に於て監督聖別式を擧ぐると宣し、ウイルソンの祝禱を以て此の記憶すべき日の會議を閉ぢた。

この當選は既定の事實であつた。唯だ何故に四十二票は四十九票で無かつたか。

監督を三人として各派の宣教師一人宛を之に宛つべしなど、思ふ程に外人に好意を有する小方に彼等が數票を與へたのでは無からうか。さるにても誰々が他の散票を投じたか。

六月三日午後三時より青山學院新講堂に於て日本メソヂスト教會最初の監督の聖別式が行はれた。克蘭ストの司式でウイルソンが説教した、了りて新監督が壇上に膝まづく、と六全權委員及二三の日本人が彼の周りに立ち各々その右手を延べて監督の頭上に重ねた。

殆んど無意識にて明治九年執事としての按手禮を授けられてより茲に三十一年は過ぎて彼れは監督としての式を受けたのである。

さるにても彼の如き頭上に重ね置かれたる諸の手よ。

もし、神靈が手を通じて傳はるとするならば魔術觀に近い、教職の手に特異の力ありと思はゞセーサードークリズムの宗教的不遜、傍聽席にありて之を見たる我が眼中に悲憤の淚湧々、嗚呼、受洗の時と執事となり長老となりしときの誰彼の手、然して今また彼の頭上に加へらるゝ八九の内外人の手。

總會第九日六月三日午後二時總會開會、克蘭ストン立ちて總會に對し感謝と祝意を表し、母教會の名によりて新に選ばれし本多監督を議場に紹介した。全員起立して彼を迎へた。

彼は就任の辭を述べて議長席に就いた。鶴崎庚午郎とコーツとは美以教會派遣の日本及朝鮮宣教監督エム・シー・ハリスに對する感謝の決議案を提出し可決された。要するにこれは世間的に見れば、ハリスは新合同教會の成立と共にその監督としての領域の大半を失つたのである。その當然しかあるべきを期しつゝ合同の成立に熱心努力したる公明なる心事に對するの感謝であつた。ハリスは之に對して感謝と希望とを述べた。次いで石坂龜治の動議により平岩愼保は議員一同に代り全權委員に對し感謝の辭を述べた。

第十日(六月四日)議事後、青山學院内ハリス邸の後園に於て新監督の歡迎が總會員及一般信徒によつて行はれた。芝生に立ちて彼はこれ迄幾度か談りし佐野天徳寺の平家を聽く物語をまた引

き來りて、其志を述べ、聽くものをして悲壯の感に打たれしめた。

總會議事は第十三日（六月七日）で終つた。此間に任を完ふしたる全權委員は逐次別を告げて去つた。最終日に平岩の動議ありて、ハリス宣教監督を新教會の名譽監督に推すことに決し、ハリスは之に對し謝辭を述べた。尙ほ各母教會に委員を派して感謝を表すべしとのドレーバーの動議により、米國美以へ笹森宇一郎、豫備石坂龜治、同南美以へ堀峯橋、豫備田中義弘、加奈陀へ平岩愼保、豫備倉長魏を委員に擧げた。尙ほ監督局の下に傳道局、教育局、日曜學校及び共勵會總務局、出版局の四局を置き平岩愼保、吉岡美國、江原素六、別所梅之助を以て順次にその主幹とした。

財政方面を一瞥するに監督の爲の年額豫算三千圓（俸給一八〇〇圓、借家料四〇〇圓、旅費八〇〇圓）と立案された。尙ほ總會經費千三百圓なるも資金の豫備なく全國會友一人十錢の寄附を仰ぐことゝしその集るまで各ミッション會計より一時立換と決したる如きを見てもその乏しさが思はれる。

以上總會のこと概ね當時の護教の記事に據つたが、本多自らの日記を見るに、

『四十年六月一日、好晴無比、午前九時より總會を開き暫時にして散會、條例委員會を開く。午後二時總會開會監督選舉の處五十票中四十二票にて自分當選せり、今夜マサージを試みしが甚よし。責任の重きを今更の如く感じ、人々の祝詞も弔詞の如く感ぜらるゝことあり、然も、仰で奮ふべしと誓へり。』

六月二日（日曜）午前十時學院新講堂にて禮拜、笹森宇一郎氏、死の題にて説教、滿堂を泣かしむ。午後三時同所にて監督聖別式を行ふ。六全權委員より聖書を受けたり、司會はクランストン氏にて説教はウイルソン氏なり。

六月三日午前委員會、午後二時クランストン氏の紹介にて議事を司る。今晚學院法人理事會にて院長を辭す。

六月四日午前委員會、午後二時本會議、三時よりハリス監督庭園にて歡迎親睦會、七時半委員會。

六月七日 第一總會終了。

六月八日 青年會同盟中央委員長を辭す。』とある。

二十六、青山學院長を止む

これより院長を奪はれたる青山學院に就て記す。三月末學院は恩人ガウチャーを迎へたが彼は卒業式及び創立二十五年祝典に臨み、萬國青年會大會にて『米國と基督教』と題して講演し、後ち上海に到り、五月再び來朝した。同二十一日學院は彼を迎へ普通及兵式の教練を示し、爲に分列式を

爲した。歓迎會に於ては女學院も加はり本多院長司會し、舟橋雄は歓迎辭を述べ、予は校友會を代表し七寶の花瓶を贈り、尙ほ校友會が今後大に學院に盡すべきを談つた。それよりガウチャーは三派合同總會に臨み一場の演説を爲し、また建築工事等の爲に生ぜし學院經費不足の一半を支辨し、學院の理事會に對しては大學を理想として基金募集をなすべきを勧め、米國に於ける募集には及ぶ限り努力せんと云つた。然して五月二十八日彼は北京に向ひ出發した。

然るにさきに三派合同總會の漸く近づきて本多院長が新に成立すべき教會の監督たるべきこと殆んど明白となり、爲に院長を止むるに至らずやと學院當局中の或者と校友中の有志とは共に憂懼するに至つた。それで校友數名相議し五月十四日校友會總會に左の趣旨の建議を爲した。

『近日開かるべき日本メソヂスト三派合同の總會に於て現今の青山學院長本多庸一氏に如何なる新職務を帯ばしむるに至るとも、之が爲に學院長の地位を動かすに至らざらんことは本會の希望なるに因り、此の趣旨を貫徹せん爲に委員を選び合同總會に交渉せしむ。』

然るに當夜は教會の年會員たる校友も多く、議論頗る多く、或は教育よりも傳道を願慮し、或は南美及び加奈陀派の感情を害せんことを恐れ、議容易に決せず、遂に學院長の留任を希望するの意見を表示するに止め、合同總會へ交渉の議は消滅した。此夜議論盛に起り晚餐の時は遅れて午後九時になつた。

かくて年會も過ぎ總會も半ばを過ぎた。六月一日に至り、監督は一人たるべく専任たるべしと決せられ、専任の意義に關する質問もあつたが委員は『それは常識で明であらう假令ば學校長の如きは兼ねてはならぬ』と説明した。平田平三が此項を削除せんとして出せし動議の破れたること前記の如く然して直ちに選舉に移りたるその結果もまた前記の如くである。

校友會の役員たる我等は今も黙止し難くなつた。況んや學院理事會は監督聖別の翌三日の夜に開かれ院長の辭職を受理し後任をも議すべしと聞くに於てをや。此際校友會臨時總會を開くの間もなく、即ち臨機の手段を取り、本多會長當事者なれば副會長和田正幾が役員會召集の權を會長より受け三日午後六時から役員會を學院内に開いた。尙ほ役員ならざるも校友にして總會々員たる人々等を特に招いた。

予は和田議長の命によつて協議の三問題を提出説明した。(一)本會は先づ合同總會の處置は本院の權利を侵害せるにあらざるかを考究したい。然して若し然りと認むべくば學院理事會をして總會に抗議せしめねばならぬ。(二)之に反し合同總會の處置若し正當ならば、本會は適法の手段により總會に建議若くは請願し監督専任の制限撤回を再議に附せらるゝを求むべく、更に學院理事會をして同一の手段を取らしむべきである。然れど以上二條の餘地全く無しと認むべくば(三)善後策即ち院長の後任を協議すべきであると。

之に關し予の意見は學院長は學院財團法人理事會の選出により就職するものにて他より干渉を受くべきでない。然るに合同總會がその監督に選定せらるべきは誰なるかを豫測し、之が爲に専任との條件を設け、その決定の結果青山學院長の位地を動かすに至つたのは明に學院の權限を侵害したのである。故に我等宜しく抗議の手段を採るべしといふにあつた。

山鹿元次郎は之に對し、本多氏は教會の年會員である故に學院の法人理事會が之を院長に選出し、ても更に年會が之を許可して任命するの要がある。故に年會以上の總會が今回採りし手段は不法ではないといつた。石坂龜治も之に同意を表した。

淺田榮次は提議の第二段の如く適法の手段により留任請願を總會に提出せんといつた。然し別所梅之助は合同前の他二派の感情を顧慮してそれに反對した、平田平三は専任の解釋は自由で學校長の如きは差支なしと思つたので餘り手強く反對しなかつたと云つたが、田中義弘、別所梅之助はそれは誤解で總會で監督委員は明に兼ねべからずといひしといつた。高木正義はまた監督委員會の會議の經過を談つた。

川澄明敏、石川和助等はガウチャーが本問題に關する意見を談つた。それはガウチャーが専任監督を不可とせず學院長の後任も深く憂ふるに及ぶまじといひしといふにあつた。

尙ほ様々の意見もあつたが議事終結の時迫りし頃本多會長自ら出席し、『今となりては再議の餘

地なく、自己の學院長を辭する決心は確定して居る』といはれたので、また如何ともなし難く、而も時間も過ぎて提議第三項は議し得ず役員會は散會した。

予はこれから理事會にゆき會議を傍聴した。かねて校友會の意見を齎らして理事會に提出せんと欲したが、今や手中に一物も無くて遺憾禁じ難かつた。理事會は小方仙之助司り理事の外ハリス、克蘭ストン、レナード等も出席して居た。

本多院長は辭表を呈し、理事會は之を受理した。直ちに後任者選定の委員を設けんと議もあつたが成立せず。當分後任者を設けず院長代理を置くこととし、スペンサーは取りあへず院長代理を本多前院長に托せんと發議したが彼は肯ぜず、克蘭ストンとレナードとは言を揃へて辭表は受理するが、現任の期限を尙三ヶ月繼續するものとするは總會も異議あるまじといつたが、彼は直ちに解任を望むの意斷乎として動かす、理事會も強み難くて、遂に常任理事會に院長代理の選定を托して閉會した。後一日を距て常任理事會は小方仙之助を院長代理とした。

我等は憾を呑んだが止むを得ぬ。せめては心ゆくばかりの院長送別會を爲さうと決した。其會の記事は予之を青山學院校友會報第十號及び護教第八三〇號に掲げた。其全文を左に掲げる。

青山學院と本多院長との離別

『明治四十年六月メソヂスト三派合同總會は青山學院より院長本多庸一先生を奪ひ去れり、これ

詭言にあらざるなり、明晰なる事實なり。學院は爲に過去十七年の變遷を通じて指導し來れる識見手腕ある院長を失へり、大學問題の眼前に迫り來れる今日に於て、大にその偉大なる人格に待つある先達を失へり。

我學院の校友等は豫め今日あらんことを憂慮し、五月十四日の校友會總會に於て之が豫防策を討議せり。當時我等は一般の大勢に鑑み合同後の教會に於ける本多先生の位置如何を察せり、我等はもとより先生を専有せんと欲せざりき、否な學院は過去に於てすら先生の活動の學院内に限られんことを求めざりしのみならず、却てその活動範圍の年を追ふて擴張せらるることを喜びき。況んや將來をや。我等の希望はたゞ先生の位置合同教會の上に立つに至るとも猶依然として我等の院長たらんことに外ならざりき。而して我等は先生の力よく此兩任を提げて綽々として餘裕あるを信じたりき。

無情なる總會よ。「監督は専任たるべし」とは先生を青山より奪はん爲の決議にあらずや。試に問はん、若し大多數の囑望する候補者にして別人たりしとせば、總會は果してかゝる決議を爲すべかりしか。もとより總會は何を爲すともその自由なり、我等も敢て布教と教育の輕重に關して論争せざるべし。然れども此總會の處置は果して人物を迎ふるの道なりや、眞に偉人を迎へて其上に戴かんとせば、兼任専任の如何の如きは何ぞ其人の明斷と意思とに一任せざる。我等もとより此決議

なかりしとせば、果して先生が學院に止まられしや否やを知らず。然れども竊に思ふ、先生が合同獨立の前途を憂ふるの餘り總會の非禮を咎めずして其撰に當り、而してその止むことを得ざるの結果として學院を去られしにあらざりしかを、思ふてこゝに至れば無限の遺憾胸臆に充つ。

校友の或者が先生を奪ひ行く總會に對し、せめては一矢を酬ひんと期せし畫策も、時に利なくして畫餅となりぬ。學院の當局者生徒等の憂愁、熱誠も施すに所なかりき。我等の或者には、院長の葬儀とも思はれし監督任命式の翌日を以て先生の辭表は學院理事會に提出せられ遂に理事會は其辭任を認めたり。

今はこれ迄なり、せめては過去の先生の厚恩に對する滿腔の謝意を表し、惜別の想を偲ばゞやと青山學院は中心となり、青山女學院、青山女子手藝學校之に連系し、校友會も學院教會も亦之に協同し、意義深き送別の會は、六月十五日午後六時半より學院新講堂に開かれぬ。

夕立の雷雨を冒して堂に集まる三校の教師校友男女の學生等約六百餘、三校の校旗を以て飾れる壇上に、雷鳴をも凌ぐなる拍手の聲に迎へられて、先生の着座せらるゝや、司會者たる石坂正信は開會を宣し、女學生の聖歌につぎて、會衆悉く起立し、山田寅之助祈禱をさゞげ、終りて全員の席に復するや、司會者は「先生を止めんとせし思考も計畫も共に空しくなりて、此會を開くに至れるは遺憾止みがたきも、今は唯だ所信の教によりて天命と認むるのみなり」とて開會の辭を述べ。先

鋒は生徒の代表者にして、學院中等科總代鈴木長治、高等科總代脇山司家太、相次いで別辭を朗讀し其調頗る沈痛、神學部の總代赤川美盈は「神學生が如何に先生の高風に化せられ、如何に先生の精神を以て心となし、世に立つべきか」を演説し、女學院總代澁谷うて子、手藝學校總代荒木すま子之に次いで文章を朗讀す。

會衆は肅然としていよ／＼しめりがちに成りぬ。神學生及高等科生の四部合唱に次ぎ、女學校職員を代表せるミス・スペンサーの別辭あり。次に學院高等科及中等科職員を代表せる別所梅之助左の別辭を朗讀す。

『本多先生を送るとや、われはさる心地せざるなり。

先生は依然として、我らのうちにあり。

世の常の人の、さちよしと進一步せんとき、先生は退一步す。

先生の構は、おほむね正眼なり。われらは先生の大上段に振り冠られたるを見んと欲す。しかも先生之を敢てせず。

先生は理詰の勝負をなせども、奇捷を得んとあせらず。あらず、先生は戦はずして、時に笑ふなり。これ先生の天分にとめるによるか、はた工夫を積めるによるか。

戊辰の歳の折衝や、横濱にて學ばれし道や、民選議院の請願や、メソヂストの教會や、その教師

たる事や、その外遊や、わが國憲の制定や、窮する所は、即ち通ずる所なるを味はれたる先生は、私意をさしはさむこと少くして、いと高きものに導かるゝ事を欲せらるゝならん。

後進之をまなぶも可なり、はたまた一新方面を開かんと妨げじ。先生はもとより百花の色を一にせんとするがごとき無粹なる士人にあらず。

先生は依然として、われらのうちにあり。さなりこれ先生を送る辭にあらざるなり。』

神學部職員の代表たる淺田榮次は左の意義の演説をなせり。

『今夕の離別は生別にあらず、死別にあらず、關係を斷つにあらず、東西に別るゝにあらず、たゞ上下にわかるゝなり。先生は昇れるのみ。雲雀は昇るに従つて影少なけれども先生は昇れば昇る程大に見ゆ、否實に大になれるなり。神學部の如き今後先生の指導にまつこと従来よりも多からむ、何となれば院長の監督となれるは家長の村長となり、局長の大臣となれるが如し、故に悲しみ送らずして喜び迎ふべきのみ。されば一二の希望を述べん、日本基督教ありてより、邦人の監督となれるもの先生をはじめとす。今や我國のみならず、支那も朝鮮も先生の手腕をまつもの多し。願はくは他の悪例のごとく監督になれる爲に老ゆることなく、却つて益々壯ならんことを。また神學上の意見、教會に對する態度、年會に對する處理、獨斷に陥ることなく従來とひとしく寛宏海の如き先生たれ、要するに監督の本多先生にあらずして本多先生の監督たれ』

パーテルス夫人の獨唱 “King of Love, my Shepherd is.” に次ぎ、青山學院教會を代表せし白鳥甲子造曰く、

『教會員として先生を送る子の父を送る如し、送るは迎ふのはじめなり、雲中に見えずなりしモ一七は十誠を携へてまた我等に臨まん。由來日本の傳道は不満足なりき、願くはこれより傳道界の旗幟鮮明なれ、政界の如きも今や革新の氣は迫れり、宗教界の事に通じかねて政界の事に明なる先生願くは濁れる社會を清洗せよ。此際先生の立てるは日本の爲め喜なり』

外國宣教師の代表者なるソーパーは常になく英語を以てはじめ、二十年來の交誼を叙し、其友が新監督の榮職に上れるを祝し、はじめて日本人の監督を設けしは我教會の誇なりと主張せられたり、所々日本語を挿はさまれしは中々の愛嬌なりき。

離別の悲は前數氏の演説に消されて會は殆んど監督祝賀の會と化したるを本意なく思へるか、岡田哲藏は立ちて本多先生時代と青山と題し、

『如何に二十年の昔に於て當時の學生が偉人を渴望したるか、如何に新島先生の率ゆる同志社を羨望したるか、如何に東北の人物たる本多先生を發見し之を渴仰し、その明治二十年の秋に初めて青山に來らるゝや如何に之に信服したるか、また先生が僅に一年にして青山を去り米國に赴き其前途の政治界なるをきゝて失望落膽したるも、再び教界に歸へらるゝときゝて歡喜し、學院の

爲に邦人の院長を求めて先生を擬し、遂に如何にして其希望を遂げしや』を叙述し『以後院長としての先生が保守的反動の時代に當り、學院を率ゐて逆境に處し、内を治め外に當り、其衰運を挽回し、尙ほ個人としては或は福音同盟會に、或は青年會に、或は海外の教育布教に盡瘁せらるゝと共に、其名聲隆々として偉大なる人格を世に認識せらるゝに至りしに、今や學院は一轉して大學たらんとするに當りて、先生を失ふはカナンを望めるモーセの峯雲にかくゝる如くにして、後繼者たるヨシヨアは求むるに難く、エリアの外套は風のまにまに漂へども之を受くべきエリシヤなきを憂ふる念慮の如何に深きかを論じ、痛く先生を失ふを惜みぬ。なほ演者は徳川家康の戦法と事業とを擧げ來りて之を先生の方針と生涯とに比論せり。

之より校友を代表して先づ高等科卒業者として郵便局長會議の爲に在京中なりし藪内敬之助、『校友としては深く先生の去らるゝを惜む、先生は我等に理想を示し、我等の意思を煉り、永久忘るべからざるの印象を與へらる。我等は卒業後社會に出で常に青山の母校を有するを榮とし先生の薫陶を受けしを誇とせり。學院の過去を想へば幾多の困難あり、國家主義の跋扈の際の如き特に然り、前途もかゝることなしと云ふべからず。況んや解決すべき問題數多あるをや。願くば學院の將來をして新島氏歿後の同志社の如く、押川氏去りし後の東北學院の如くならしむる勿れ

之を思へばよしや直接ならざるも間接に先生の助力を冀はざるを得ず、尙ほ新事業の成功を祈る」

次は豫備學部の卒業者として海軍大學校在學中なる丸山謙、

『もとの豫備學部今の中等科は高等科の如く専門的ならざるを以て、社會各方面に人物を出すこと多く、遠洋に航海し萬里の天涯にその出身者に接すること多し。此等の人々の意衷を叩けば、何れの地にあるも皆な小本多を以て自任せざるはなし、以て先生の感化の如何に大にして博きかを知るべし、思ふに現在生徒諸君の腦中にも皆先生の分子あらん。願くは相共に努力して先生の教に背からざらんことを。』

次は淺草教會の三浦泰一郎、神學部の卒業者として壇に立つ、

『神學生たりしとき、我等に鐘を鳴らさしめたる學校の處置に不満を抱き、之を院長に訴へしも効なく、以爲らく先生は不得要領なりと。然れども後に至りてこれ不得細領なることを悟れり。今日青山が先生を失ふは賀すべきかまた憂ふべきか、これは教育重きか傳道重きかの問題とならむ。今や校長の位置重くして、大隈伯は政界を去りて早稻田の校長となれり。然るに本多先生は學院を去りて純然たる宗教界に入れり。先生は嚮の日校友會に於て「己が青山に止まるは善きこともあり悪しきこともあり」と云はれたり。されば慥に善しと認めらる點もあるなり。然れども

一面には先生は單に監督なるが爲に、之を受けしに非ず、獨立せる教會の監督なるが爲に之を受けられしなり。然して現時の青山は未だ先生を止むるに足らず、これ校友の大に盡力すべきところに非ずや、基督教會は大學を有せざるべからず、少くも慶應、早稻田に比すべきものなかるべからず、要するに先生は大に見るところありて青山を去られしなり』云々

校友として終に壇に上られしは元良文學博士なり、博士舊職員を代表して左の趣旨を述べ。

『今日の日本の思想は、西洋思想の傳來の爲に動搖し、兩思想觸接の結果として、諸般の變化を來し居れり、此際偉大なる人物の出づるに非ざれば解決すべからざる事多し、此點に於て余は先生の新位置を賀す。顧みれば十九年前余の歸朝して此院に來りしとき先生あり、然して幾何もなく先生は米國に赴けり。當時世人は先生は政治界の視察の爲に洋行せられしと思へり。然るに米國にて其考一變して、基督教會の爲に働かるゝことゝなり頗る世人を驚かせり。されど世人は尙ほ或は先生が政界に入らるゝこともやと疑ひ居りしが、今先生の決心愈々現はれ來り遂に本多監督となられたり。思ふに人間の思想には程度あり、差別あり、昔より偉人の世に誤解せられしもの少しとせず、これ見る人によりて解釋を異にすればなり。例へばソクラテスの死後其の弟子等は各彼の一方面を取りて學派爲に分立せり、ソクラテスをして是等を見せしめば、これ何れも皆我思想なりと云ひしならむ。世人は或は政治界より、或は教育界より、或は宗教界より種々先生に

對する觀察を異にすれど、先生が日本の爲に働かるゝ思想は一定して動かす、たゞ場合により方面の變化ありしのみ。過去の成功は云ふ迄もなし、將來益々健にして日本の爲に努力せられんことを希望す。」

多端の學説が冷靜なる學者の批評によりて整理せらるゝ如く、喜憂に關する今夕の異見は博士の演説によりて統合せられたり。送別の辭はこれにて終結せしが、尙ほ學院教員生徒全員の微意の表象として金製時辰一個を先生に呈せん爲め、和田正幾全員を代表し、之を贈るの辭を述べ。尙ほ之に附加して、氏の述べし左の回顧談は特殊の注意を以て全員にきかれぬ。

「本多先生をはじめて此校に紹介せしは誰なるかを知る人少し。余は明治十九年十二月青山を辭して仙臺に赴きしが、去るに臨み當時の校長マクレイ氏は、余に學校の將來に關して問ふ所あり當時マクレイ氏は餘程此事につきて心配し居られしなり、余はその時それは唯一策あるのみ、即ち本多先生を迎ふるにあるのみと答へしに、マクレイ氏曰く「己に屢々其意を本多氏に傳へたれど、どうしても來て呉れず」と。余は曰く「それは呼び様が悪しきなり、充分に活動の自由を與へて呼ばゞ必ず來らるべしと信ず」と。此答はマクレイ氏を動かせしと見え「然らば學校よりも交渉すべく、幸ひ足下も仙臺に赴かるゝ故、尙ほ直接に本多氏に頼み呉れよ」と云はれたり。この話が事實になりて、二十年の夏より先生は青山に來られたり。されど、此事は知る人少く、た

ゞかのスワルツ氏はよく知れり。當時氏は余が青山を去るのみならず、仙臺より本多氏を取り去れりとして余を怨まれしときけり。かくの如くにして本多先生は青山に來られしなれど、當時何ぞ四十年の今日に於て先生終に青山を去ることを計るべきや。余は竊かに先生が監督に撰まるゝも、尙ほ之を辭せらるゝこと先年米國某大學のドクトルの學位を辭せられしと同じからんと思へり、然るに事實は之に反せり。余は祝意を表することなどは思ひもよらず、大に學院の爲に憂ふるものなり、この頃二三の院長候補者談をきけども、一も余を満足せしむるものなし、諸君は今夕萬歳を唱ふとも、余は先生の過去の功勞に對してならば同意なれど、監督の爲ならば萬歳のばの音も出でざるなり」

辯を好まざる演者の單純なる言句と、誠實にして憚るなき所見の表示とは、過去の隠れたる事實の發表と共に、深沈なる一念を聽者の胸中に起さしめしが、つゞきてうたへる女學院生徒の "God be with you" の一曲は益々此想を深からしめぬ。既に壇に立てる者多くして、夜は更け電燈の光冴えていひ知らぬ幽玄の氣場に充つるとき、本多先生は徐に立ちて謝辭を述べらるゝ。

「三校の教員生徒及校友等の諸君が、精神を籠められし鄭重なる送別を深謝す。諸君の言に一々答へんとせば、少くも三時間を要せん、これは今夕の時が許さゞれば、簡單に答へざるを得ず。諸君は或は祝せられ、或は憂へられたり、余の監督となりしとき、末子なる幼兒に如何に思ふか

と問ひたるに「電車の監督か」と云へり。監督にも様々の監督あり、市長にも倫敦の市長あり、東京の市長あり、又は近村を組み入れて僅に二萬五千の人口を充たせる市の長もあり、余は今受けし職務を尊敬す。然れども有體に云はゞ、世間に對しては院長の方が名譽かも知れず、今日は學校長の位置漸く重きをなし來ればなり。されど今は諸君と手を分たざるべからず、たゞ今後もなし得る限り學院の爲に盡さんと欲す。

こゝに立派なる物品を頂戴せり、余は今迄金製の物を身につけし事なし、或は昔の刀には多少の金を鏤ばめしものもあらん、されど祖父も父も刀劍を金飾することは嫌なりき。昨年カナダにて或新聞記者は、余が金縁の眼鏡をかけて演説せりと記せしが、これは記者の金製なりき、然れども學院の賜物なるが故にこの金製の時計を喜び謝して受けん、若し學院の贈るにあらずば、余は一生金製のものを身に帯びざりしならむ。

岡田君はエリアのマントルを受くる人なしと憂慮せられたり、然れどもさまで憂へらるゝに及ばじ、今後二種の人ありて何れかゞ之を受けん、其一是自ら進みて取る人なり、其二是自ら立たざるも他の人々が此人ならではと指して強ひて立たしむる人なり、此二種の人何れかの出る機運を待つべきのみ。和田君の御不興には甚だ困れり、然れども最早致し方なし、餘りに御不興にして健康を害せられざらんことを祈るの外なし。三浦君は傳道の不振は何故かと叫ばれしと覺ゆ、

余は曰はんとす、我宗教界には書くこと、喋ること、餘り多くて、爲す事少き故なり。今の様に書きてのみ居らば、日本は反古の國となるより外なし。

女學院及手藝學校の諸君よりの御好意をも深謝す。これ迄世人は往々兩校を以て學院の一部と見做し、誤つて兩校の事を余の許にもち來せし事ありて、間接に諸君の用をなせしこと少なからざりき、故に諸君との縁故深きを感じ、別に臨み將來兩校の進運を祈る。

生徒諸君に對しては、今後充分なる勉強を祈る、諸君の努力により益々學校を顯彰するに至るを望む。職員盡力すとも、校友助力すとも、諸君にして努めずば何の益あらむ。顧みれば宗教學校の非運甚しかりし時ありて、我全校生徒僅に七十人に過ぎざりしときあり、松島君、和田君等つとめて社會に學院を知らしめんと計りしも、生徒來らず、實に心配の至りなりき。かゝる時はたゞ黙して時を俟つより外なし、しかもかゝる際に尙ほ留まれる生徒のありしには感謝したりき、尙當時憂を共にせし教師諸君には深く謝せざるを得ざるなり。

余は今學院より出されしとは思はず、自ら出しとも思はず、よしや縁故は今迄の如くならざるも、同情は變せず、故に特に諸君に望むところは、學院の宗教教育に一層の力を込められんことなり。今日は人數増したれど、果して職員も生徒も學院の本領の爲に充分に盡しつゝありや、若し宗教々育の効果現はれずば、形體の大なるも喜ぶに足らず、諸君乞ふ大に信念の涵養品性の發

達につとめられよ。返すくも諸君の御好意を謝す、淺田君の御注意の如く余は若くなりてつとめんとす。また特に元良博士の御好意を謝す、世人は如何に見るとも余の一念は變らざるなり。神を信じ人類の爲に力を盡くし天職を全ふせんことこれなり。』

先生の別辭終るや、女學院の全生徒先づその校歌をうたふ、次いで學院の全生徒その校歌を合唱す、春風悠和の調と怒濤澎湃の音と相和して青山に未曾有の響を傳へしが、司會者は起立して曰く「これより本多先生の萬歳を唱へん、和田君の注意もありたるが萬歳の意義は唱ふる諸君の心のまに／＼何れにても可なり」と、かくて學院の千田民治郎の發聲と共に、本多先生萬歳の三唱は堂を搖がすばかりに響き渡りぬ、時に十時を過ぐるこゝ二十分。

四時間の長きに涉り、十七人の演者を有せし類少き送別の會も十七年の久しきを閲せる先生と學院との縁故に比しては涓滴に過ぎざるの感ありて名残は盡くべくも非ず、たゞ別所君が所謂「先生を送るとや、否、先生は我等のうちにある」とてふ觀念のみぞ會衆の慰藉となりけらし。』

此夕青山女學院總代の讀みしは左の文であつた。その作者は原口愛子であつた。

『緑の香たゞよふ初夏の青山！青春の色みなぎる美しの青山！潑刺たる生氣は雄壯の樂を奏すれど哀韻の伴ふあるは何故、幾多若やく面に憂愁の影ひそみ不安の色のかべるは何故、見よ我青山の誇にて居ますたふとき大人の頭に、タイムの翁は監督の花冠をさゝげて伴ひ去らむとするな

るを、ホワイトマウンテンの村人が朝に夕に望み見て渴仰措く能はざりし冷たき巖のそれならで底ひもわかす果てしも知らぬ師が胸中の靈の海原偲ばるゝ温顔あたゝかき血汐もかよひやさしき清き涙に霑ひけむなつかしき面は既に我等のものにあらざるか。

「愚なる兒よ」いづこともなく朗々たるこはねは我耳朶をうてり、「彼を私すべからず靈界の牛耳を握るもの彼を措きて何處にか求むべき、日の光は之に浴するもの多ければとて、御身の受くる恩澤の量を減すべきや」聲の主はタイムの翁なりき。おゝ靈界の霸王！我等が耳にはさして尊くひゞかざりし監督の名も師によりていかばかり光を増しけむよ、師は只に青山の誇に非らざるなり、日本の誇とのみに非ず世界の人としての師の前途は遼遠なり、自愛せられよ大人、喜ばしきかな此日、我等の父たるべき此契をたつべきものは世にしあらねば、我等は師を失ふに非ざるなり。

かくて我思ひはいつしか幻の境に辿り入りぬ。時は明治六十五年青山大學院創立五十年祭とてさしにも廣き講堂も立錐の地をあまさず、正面のプラットフォームに着座せる神々しき二老翁を見る、其一人はガウチャー博士、他の一人は監督本多庸一氏、タイムの翁は更に監督の頭上に雪白なる榮光の冠を捧げたりとおぼし、今し椅子をはなれ銀髯を撫しつゝ、徐に語らせ給ふ朗々たる御こはねやさしき御ゑまひは二十五年の昔とつゆもかはらせたまふことなく

諸人の教への長のすぎませし

地に花さけり道のしるべと』

明治の六十五年たるべかりしは昭和七年である。この年青山に創立五十年の祝はあつた。しかしこの美妙なる幻影は久に破れて映すべくもなかつた。

二十七、監督公書、「護教」、旅行、韓國行

七月九日彼は監督として『日本メソヂスト教會の兄弟姉妹に呈する書』と題する第一の公開書を發した。先づ多年の問題たりし合同が事實となり、幾多複雑の事情ありしも遂に茲に至れるを感謝し、自己が監督に選任し、缺點多くして大任に耐へ難しと思へど、大問題の解決に際し組織に澁滞を來すは母教會に對しても本意ならず、新教會の機勢を殺ぐの虞あれば、一身の疑問を度外に措き高き助に依頼し就任したれば、幸に兄弟姉妹の親切寛厚なる補助を得て忠勤を遂げたしというた。彼は更に進んで、然も新教會は若武者の初陣の門出の如く唯に一身の榮辱にあらず、母教會の榮辱ともなり、同主義教會の一般に關すること大なれば努力奮闘を要すといひ、特に信條中の第十六條即ち全く日本總會が制定したる個條に言及した。尙ほハリス監督の關係一變したるも之を新教會の名譽監督に擧げしことを報じ、自己は成るべく毎年各教會を訪問するを期するも少くも一年の經

験なくばその可能なるやは明ならずといひ、教會は訪問する部會長牧師の存するところ聖典の執行に於て自己は唯だ補助者の位置に立つのみと言明した。此書は總會直後に發すべかりしを急に朝鮮に渡りしたため遅延したのであつた。

次には新教會と宣教師の關係に就て陳じ、『我が合同獨立は力餘ありて生じたるにあらず、力足らざるが故に起りたるものなれば内外の力を調和して融合を圖るは自然の勢なりというた。また母教會との關係に就ては彼の全權委員の教書中にある關係斷絶に至り得べき五個の場合を考へ、如何なる不測の事あるやも知り難き故に、一日も早く自給の基を確定する様努力すべし』というた。

更に護教に關してその過去十六年の功績多大なりしを認め、若し之れ無かりしならば合同の進路も意外に故障を生じたらんといひ、自今之が新教會の機關となり、山路、別所、高木の逐次の三主筆に次いで鵜崎新主筆を得、その第三高等學校の椅子を擲ちてその職に就けるを稱揚し、會員擧げて此機關を利用するに至らんことを望んだ。然も護教の經濟の半ば以上は尙ほ母教會の補助に待つものなりといふを聞けば我々はこれさへ然るかと驚かざるを得ぬ。

此種の公書はこの後久しく續いたのであるが我等は先づこゝに云はれし護教に就て考察する。三派合同成立より十六年前、即ち明治二十四年創始せられたる週刊の機關雜誌護教はさきに云へる如く三派共通のものであつた。三派の神學校は或は合し或は離れたが護教は一貫して各派の氣脈

を通じ相識を増すの機關であつた。主筆は最初は山路愛山であつたが、明治三十年から別所梅之助となり、三十四年から高木壬太郎となつた。明治三十九年三月愛山は自己の雜誌獨立評論に於いて教界の諸誌を評して云つた。

『福音新報は詩的也、時としては信仰の最高潮を示す。護教は論理的也、其議論は大膽也、其教界の時事を談するや頗る常識に富めるを示す、共に耶蘇教會に於ける第一流の文字と謂ふべし。基督教世界に至つては近時少しく遜色あり、新人は猶ほ峩冠長劍の人の如し、之を望んで畏るべし。内村君の雜誌に至つては即ち漢代の南越王也、其一方に割據して南面王と稱する所、意氣眞に敬すべき也』

この福音新報は植村正久の主筆たる週刊誌で同時に事實上日本基督派の機關であつた。基督教世界は組合派の機關たる週刊、新人は海老名正主筆の月刊、内村鑑三の雜誌は聖書之研究と題する月刊であつた。

護教が三派合同の成立に盡したる功績は偉大であつた。最近の主筆高木は牧會と神學校教授を兼ねつゝ編輯に當つた。今や功成りて新教會の發達と共に彼は閑を得て他に成すあらんとし主筆の職を止むるに決した。本多監督もその望を容れ、南美宣教師ラムバスの案に基づき當時第三高等學校の教授を勤めつゝ牧會しありし南メソヂスト派の鵜崎庚午郎を説きて高木の後任とした。七月二十

九日の第八三五號に於て高木は讀者に別を告げ、兼務なりし爲に専ら力を致し得ざりしを謝し、

『且つ夫れ余や性愚直にして言辭禮容に嫻はず、假令無意識なりしにせよ、機關新聞の記者として不似合なる言論をなしたること少からざりしなるべし、然るに我メソヂスト教會の當局者が深く之を咎めずして六年の久しき余をして此地位に安ずるを得せしめたりしは、由來メソヂスト教會が寛大を旨とする爲なりとは云へ、抑も亦當局者の寛弘なりしに基せずんばあらず。』

といひ、長く期待せし三派合同も成りて護教は新教會の機關となりし爲、素志を遂げて任を辭すといひ、後任其人を得たるを祝し、併せて在任中前主筆別所梅之助、中村忠藏、三浦泰一郎、倉長巍等が特に助力したるを謝した。

次號に於て別所は『新舊の主筆』と題していふ。

『高木君はよく戦ひたりき、而してその戦や、わが愛山君がよく外と戦ひしに比して、やゝ内と戦へるなりき、けだし時の然らしめしならむ。高木君の言は往々苦かりき、さはれ我らは我が教會を以て苦言を容るゝの雅量なきものと信ぜず、さなり、我らは、わが教會を以てよく君に聴きたりとなす。私に惟ふ高木君の文はわが教界の逸品なりと、天下いはんと欲する所をいひ得る者決して多からず。しかるに君は之をよくす。その秋の水のごとく澄み渡りて滯る所なき、及び易からざるなり。我らは亦後任者としてわが鵜崎君を得たるを喜ぶ。日本メソヂスト教會新に成り

ぬ。これが機關たる新聞を經營すること容易ならんや。君が安全なる地位を去りて新に荆棘を拓かんとするは、その使命を重んずればなり。一身一家の事は小なるが如くにして實に大なり。我らは君が冠を掛けて儒服をまとはれんとするを壯とす』と。

同號に於て鶴崎は傳道主義と題し、新教會の前途を想ひ、自給獨立は肝要なるも傳道は更に肝要なりといつた。

山路の如き文豪も高木の如き理論家も教會よく之を包容したりといふは、先達に本多の如き人ありし爲であらう。彼は今鶴崎を起したのである。然して彼の亡き後、高木は一人を距て、青山學院長となり、鶴崎はこれも一人を距て、メソヂストの監督となり、共に本多の位地を繼いだのである。山路は明治大正の間、山路愛山なるものありしを後世に覚えしめんと志し、夥しき著作をなした。別所は聖書の改譯、讚美歌の編纂に當り文集、歌集、紀行併せて十卷と共に聖書の動植物學及び考古學に關する著者となつた。事業と文章と後世は孰れをより長く記憶するであらうか。

三派合同は成りたるも教會條例は平岩、高木、平澤等の編纂委員の手にありて容易に成らず、東西年會の組織、部門の編成、人物の配置等は來年を俟たねばならぬ。然も合同の記念なる特別傳道は各地に開始された。新監督はこれより單身戦線を巡り衆を奨励し自らも努力を致さねばならぬ。茲に於て彼の旅行はこれより殆んど斷間なく續けられた。その足跡は直ちに從來別派たりし區域に

も入つた、到る處の教會は新監督を歓迎し、また説教演説を求めた。教會以外の學校等で演説を求むるものも多かつた。此間に彼は監督公書を草し、また紀行を綴りて護教に發表し續けた。明治四十年の後半に韓國行を始とし北海道から沖繩に及んだ旅行は十一回に上つた。

彼は先づ六月十八日を以て韓國に行つた。これは明治二十八年及三十七年に次ぎ第三回の同國行であつた。米國の全權委員等も六月中韓國に赴いた。彼は十九日京城に入りハリスと木原外七とに迎へられ名古屋城に入つた。翌日同地の美以及南美以の年會に臨み次いで統監伊藤侯を訪ひ、古谷久綱の案内にてクランストン等と一行七人韓國皇帝に謁見した。二十五日は仁川に二十九日は平壤に赴き。七月一日京城に歸り、釜山を経て同四日神戸に着し、六日美濃に到り養老瀑を見て歸京した。而して此月二十五日は日韓新協約が發表された。

監督としての内地の旅は八月先づ信州に赴き次ぎに長崎にまで延びた。この間に愛兒の病と死があつた。それを彼の日記によつて次ぎにしるす。

二十八、傳道旅行と愛兒の死

(日記に據る)

八月十五日 曇天時に降雨。朝六時五男直哉と共に家を出て信濃町より飯田町に到り信州に向ふ、猿橋邊より風雨、午後六時松本に着、裏小路池田屋に投じた。夜は小柳町會堂の歓迎會に臨んだ。

十六日 風雨まだ止まず。朝人車にて淺間に往き芳の湯にて四時過ぎまで上田の飯沼権一、長野の川村兵治、飯田の内海正紀、松本の加藤新太郎、甲府の土屋彦六、高田の長谷川金平等の諸教役者と談り共に浴した。夕に横濱時代の友で日本基督教會の牧師なる眞木重遠を訪うた。夜開成座演說會に臨み川村兵治、内海正紀と共に演說した、聽者三百人。

十七日 天氣定り暑氣回復す、午前淺間に到り懇談入浴昨日の如く、松代の飯田兼三も來り甲斐信濃及高田の總勢が集まつた。これは地方に於ける舊美以派と舊加奈陀派との最初の聯合であつた。彼は午後松本小學校紀念館を見、夜はまた開成座に飯沼権一、及び飯田兼三と共に演說した。

十八日(日曜) 晴天大暑、會堂の脇で信者の一人が會友及び教役者一同を撮影した。禮拜は飯沼說教し、彼は午後飯沼と共に麻績小學校々友會に臨み演說、八時會堂にて說教した。

十九日 晴天大暑、終日在宿、開書を草し、また各部傳道者の俸給調をした。

二十日 飯沼、加藤、牧田等に送られ輕井澤に向つた。輕井澤で驟雨至り人馬車なく停車場前の油屋に投じた、秋風既に落葉松を侵すを見た。

二十一日 朝輕井澤舊道に到りソーパーとボルデンとを尋ね十時より三派宣教師團を代表する九名の委員會に臨み、午後油屋より荷物を移して鶴屋に投じた。テニス場の大繁昌なるを見、別所梅之助、稻垣信、三輪源造を訪ふた。夕ハリスの宿する三笠ホテルに到り入浴し晚餐を饗せられた。

二十二日 未明晴、曉曇、午後大雨、午前午後とも委員會、タミス・ヴェール方ソシアルに臨み續いて晚餐の饗を受けた、ヒュエットと談り北海道連回を一週日延ばし九月十七日よりとした。

二十三日 昨夜より暴風雨、昨夜ハリスの帽を誤つて持ち歸つたことを知りヴェール方を尋ねたがハリスは早朝歸宿し雨も頻りなれば其儘にしたとある。内外監督の椅子ならで帽子の交換であつた。朝委員會に出で更に主張を繰り返して席を去つた。午後輕井澤を發した。途中大雨、高崎で組合派牧師堀貞一に逢つた。夜上野に着き直哉及び川村重猪の迎をうけて十時歸宅して見ると、九歳の七男鐘七は病みて熱は三十九度以上、腸カタルと思はれた。

二十四日 降雨數回、新聞は諸所の水害を報じて居る。昨日歸つたのはよかつたと思ふ。午後三時教文館にて傳道局委員會に臨み八時に及んだ。歸宅して見ると鐘七熱尙高く或はチブスならんかを疑ひ、加藤醫師の手のみでは如何かと心配になつた。六男羔六も川村も腹工合悪しく熱がある。

二十五日 昨日浸禮教會傳道書記ウイelson及同伴者フライトンが來訪したが不在なりし爲今朝電話で時間を問合せ四時半帝國ホテルに訪問した。次に伊藤侯を訪うたが出掛けなりし故名刺を残した。鐘七の加減いよ／＼宜しく無い。

二十六日 降雨はまだ止まぬ、今日は多く書狀を認むべきであるが一昨夜より鐘七の看病の爲に能はぬ。鐘七の容態何分宜しくないが、加藤醫師は盲腸炎と診斷した。偶ま有田珠子が來たので看

護を依頼して是にて安心し、今夜出立と定め十一時直哉を伴ひ靈岸島に赴いた。これは東海道出水の爲船によつたのである。

二十七日 曉四時第二徳山丸といふ小蒸汽船でラムバス、ウエスト二人と靈岸島を發し、横濱に向つた、便船は急設で不便が多かつたが辛ふじて九時横濱發のマンチュリア號に間に合つた。十時鬚を剃り珈琲を飲み假睡一時に及んだ。覺れば船は天城山に並んで走る。多少波あれど大船なれば安かつた、宅とモットに書狀を認めた。同室は田中といふ醫士、食堂では神戸の鶴谷忠五郎、大阪の善積武太郎と同卓であつた。

二十八日 朝六時船は紀伊を廻つて居る。七時和田岬外で檢疫あり、九時入港十時半上陸、波止場にニュートンが居て助けられた。直ちに停車場に行く、手荷物を赤帽に托し、楠氏の墓を訪ふたが屋根あり庭あり甚だ俗化した。停車場にて食事し午後一時五分發車した。岡山で辨當を求めた。寢臺を取りて寢たが此日炎熱焼くが如く夜に入つて漸く涼しくなつた。『時々刻々鐘七を思ひて祈り送れり』と記す。

二十九日 午前六時二十分下關着、直ちに門司に渡り、七時半門司發、朝は小倉、晝は佐賀にて辨當を求めた。此日も炎熱九十度、三時半頃尾の道驛にて笹森宇一郎の出迎に逢つた。笹森は電報を渡した。心驚きて開き見れば、鐘七危篤。

兎も角長崎に達しスコット方に到り投じた、停車場よりは電報を出した。六時より夕陽會で一場の演説を爲した。歡迎會でも少し談つた。九時過より協議會があつた。十一時歸宿、午前一時半まで支度、一時十三分笹森が電報を持參した。愛兒の病險惡の報であつたらう。

三十日 曇天少雨。朝六時二十分笹森及び中山忠恕に送られ、監督バシユフォードと共に長崎を發した。乗車券は姫路近傍の會根までを買つた。その先は過日線路故障あり、其後報知なしといはれた。『無責任も甚しからずや』と記してある。一時過門司着、二時四十分馬關發。

三十一日 午前六時二十分神戸停車場にて朝食、七時半江尻に向つて發した。正午名古屋に着、笹森より追尾の電報、鐘七午前三時十分、死去の報であつた。朝來マニラより到れる某米國大尉夫妻と母と同車になり世話をしやつた。江尻から商船學校の練習船大成丸に乗つた。

九月一日 午前八時雨中横濱に入港、九時上陸直ちに停車場に到つたがバシユフォードのトランクが遅れたので一足先に十時の列車で歸り十一時半青山着。

午後四時長者丸會堂にて葬禮、立山に葬つた。中村忠藏司會、石坂龜治、小方仙之助、山田寅之助、ハリス等皆式に與つた。『小兒としては大葬禮なり、鐘七餘榮ありといふべし。鐘七は伶俐なる小兒なり、從順なる幼者なり。残念なる哉、療治は後れたり。彼は主の懷に成長すべし。『天父と同じ經驗を嘗むるは光榮なり』と山田氏は祈れり、心から首肯す』と記さる。

二十九、明治四十年の秋

九月五日 關西に向つた。箱根の隧道水害に損じ小山の邊を徒歩連絡して滿身流汗であつた。攝津の有馬にて南美以宣教師會に列し、歸途六甲山を徒歩し全身雨に濡ふた。神戸で説教し、歸路は箱根で駕籠に載つた。

同十四日東北及北海道の旅に上つた。函館は前月二十七日の大火の爲に焦土となつて慘狀見るに忍びなかつた。罹災したる牧師三谷雅之助に迎へられ假會堂で説教した。小樽では神戸壬四郎、札幌では杉原成義及びヒュエツト、旭川では木村繁枝等が歓迎した。土佐の政治家坂本直寛が旭川日本基督教會牧師となれるにも會つて感慨の多かつたのは自己に似たる彼の經歷を思つたのであらう。二十六日歸路八雲の記に曰く。

『夜來風雨の爲汽車延着、五時より十時まで待ち合せたり。此間三四の會友と教會に爐を圍みて語り澱粉餅の馳走に與れり。二時函館着、三谷氏に投ず。十日前より假屋も一倍せり、三谷氏にて新しき袴と單衣を借りて着たり。』

二十七日函館の記に曰く。

『午前八時谷地頭の避難所を見たり、目も當られぬ様なり。何れも極貧者にあらざる如し、勞に

堪へず、乞ふに堪へず、困難の至りなり。九時千代ヶ岱の遺愛女學校を見たり。理想的のものなり。午後二時濱町棧橋より乗船せり、辛ふじて三等切符を求め、終日甲板にて暮せり。八時半青森に着し長谷川氏に迎へられ其家に投じ安眠せり』

二十八日 弘前に行き石場旅館に投じた。生來弘前で旅館に宿泊するは始めてだと彼はいふ。蓋しその家は最早他人の有と爲つたのであらう。弘前では連回開會中でカシデイ、山鹿元次郎、栗村左衛八、平川基、白戸良作、吉崎俊雄等が青森、秋田等より集まつて居て彼を歓迎した。説教數回彼は故郷に崇めらるゝ豫言者であつた。然していふまでも無く監督の名などは故郷へ飾る錦では無し。

彼はもとより到る處で談る。されど讀書の時乏しきを憾みとした。何處でもよく眠り、大抵の物は食し得たが、車中讀書を難しとし、ウエスレーが馬上讀書し得たのを羨むと記して居る。

十月二日 盛岡に到り牧師坂本富彌及仙臺より來れるスワルツ等と會し演説した。翌日、『當市の出身にして最も古き新教信者たり、又自由黨員として辛酸を嘗め、然も國會開設の曉を待たずして世を去りし鈴木舍定君の令弟巖君に逢ひ、共に岩手公園に散策せり』と記す。この鈴木と本多と河野廣中とが東北の三傑と呼ばれしことありしを、我等は知つて居る。此日公園に於て本多は日露役に戦死したる青年將校南部伯爵の銅像を見て賛辭を惜まなかつた。

五日の夜仙臺で岩崎城主中村家の二男小次郎と共に教壇に立ち彼が信者として縣會議員たりしことを特に記して居るが、これも自己の過ぎし姿を新人に見たのであらう。

八日歸京して東海、北陸、甲信の特別傳道方略既に成れるを見て、これに従ひ來る十二日より、『再び鞭を揚げて函嶺を越え富士川を渡り、薩埵峠大井川を跡に見て遙かに突進し、會て家康が門を開いて信玄を惑はせし濱松城を會釋も無く襲撃せんと心の帯を締め直したり』と記す。この意氣軒昂の態度と勇武なる辭句とは平常の彼に怪しまるゝばかりである。但し直に之に續けて『幸に全教會の祈禱に助けられ旅順的勝報をなし得る様祝福を蒙り度誠恐誠惶』とあるはクリスチャンらしい。

駿遠の傳道は十月十二日より二十三日に至つた。濱松、静岡、豊橋、沼津での活動は江原素六、安藤太郎、平岩愼保、鵜崎庚午郎、鵜飼猛等が之を助けた。古澤繁治郎、加茂喜一郎等は地方にあつて迎接した。

北陸の傳道は二十五日より月末に及んだ。福井、金澤、富山はもと加奈陀派の區域で宣教師ヘーガー、マケンジー等彼を迎へて共に行動した。此時神戸青年會幹事ヘルムの死を聞き彼が在京中の知己なるのみならず日本に於ても數年間喜憂を共にしたるを想ひ、神戸に赴きその葬儀に列した。

十一月九日よりまた信州、甲州に入り長野のノルマン、甲府の土屋彦六等に迎へられ平岩愼保、

山田寅之助、川澄明敏等と共に活動した。市川では渡邊家の青州文庫を見、甲府では信玄の墓に詣り、日下部では飯泉規矩三に案内され惠林寺に信玄の像を見て感慨を記した。十七日歸京。

十一月二十七日よりは京都以西琉球に到る來年に涉る長旅である。同志社にてその創立二十二年記念會に列し新島襄を語り、大阪では公會堂で平岩及松本益吉と共に演説し、廣島では北條時敬の校長たる高等師範校にて演説し、吳より松山を経て別府に涉り波多野傳四郎と同宿し『偶然一夜休息を得たり』といふ。以て到る處に夜々必らず演説したるを知る。偶々石坂龜治も來り合せ中津にて共に語り、博多より長崎に到り、笹森宇一郎及びスコットに迎へられ、郵便局長たる藪内敬之助の家に宿し、鎮西學院と活水女學校とにて演説し、熊本にてはデザインソン、值賀虎之助、遠山參郎等に迎へられ十二月十三日より三連夜の演説をなし、川内より串野木に到り女婿の家なる宮之原家の厚遇を受けた。十八日鹿兒島にては中村徳太郎、井上太一郎に迎へられ、城山に上り西郷を想ひ、師範學校及會堂にて演説した。餘りに多く語りて咽喉頗る悪しく、鹿兒島病院の治療を受けた。上の平の南州館の朝に海を隔て、見る大隅の山の日の出は美しかった。

二十日 琉球行の爲め沖繩丸に乗つた。偶然青山女學院に在學せし立井晃子が同行者となつた。灣外風浪高く屋久島邊より一度鹿兒島に引き返し再度出で、山川港に風浪を避け、二十三日夕漸く出船し大島を経て二十五日那覇に着した。宣教師シュワーツ牧師村井競、同比嘉保彦之を迎へた。

奈良原知事は學務屬官をして案内せしめた。南陽館にてクリスマス祝會を行つた。首里、讀谷山にも行つた。年末を溫暖春の如き那覇に過ぐし、「沖繩に縛られて越す今歲かな」と吟じた。鹿兒島出身の沖繩縣知事奈良原繁は會見して大に彼の人物に感じ之を西郷に比したといふことが後に傳へられた。

三十、明治四十一年

彼は那覇にて元旦を迎へ、名護に往復し、六日那覇を發した。途上大島古仁谷、名瀬の兩港に立寄り、十日屋久島海峡の壯觀を眺め鹿兒島に入り、演說三回、十二日義州丸に乗船し十四日神戸に着し、翌日歸京した。長途の疲勞と病とにより一月の後半と二月の前半は不快を續けつゝ事を探つたが、十四日夫人と共に鎌倉材木座森村別荘に到りて靜養月末に及んだ。此間昨年六月以來の海陸旅程を調べて見ると、汽車、電車九、七二哩、船二、二五八哩、人車と駕籠一六一哩、徒歩二五哩總計一二、一六六哩、即ち五千里弱で地球半周以上であつた。これは一所より他所に移る行程で一所内の奔走を除いての數であつた。

彼の住宅は尙ほ青山學院内にあり、然して彼は學院法人理事の一人であつた。

三月上旬には學院に一の事件があつた。青山の神學部の部長エー・デイ・ペリーは獨身の宣教師

で強硬堅固なる正統派の神學者であつた。教授には山田寅之助、高木壬太郎、小畑久五郎、左近義弼等があつたが山田は主として基督傳を講じ左近はヘブライ語と舊約書を講じ、高木は新約神學を講じた。小畑は米國に在りしときペリーと同學で思想相契合し且つ學院教會の牧師であつた。然るに高木の説に正統派の説に反するありとの非難が起つた。本多の三月十日の日記に「ペリーと高木の事を談る、不結果なり、左近の事は稍光明を見る」とある。後者の事情は著者は與り知らぬが前者の件には關與した。ペリーは高木の講義の草稿を求めて其内容を閲すことを小畑に求めたが、小畑は自己の立場から之を避けてペリーをして局外なる予に閲讀を求めしめた。予は之を讀みて危険思想無しとペリーに告げ且つその質問に應じて講義の要旨を説明した。或はこれは危険なる批判者であつたかも知れぬ。十四日の本多の日記には、「ペリー本日高木を訪ひ熟談事情大に變り光明を生ぜり」とある。

十七日の日記には「學院の法人理事會で職制を議定した」と記されて居る。これは法人の寄附行為は既に成立せしも院長以下職員職務の職務を規定する條文なかりし爲に理事會の求により予が原案を作りたるものであつた。日本の諸學校の獨逸式に組織立ちたる制度を參考としたのであつて米人には奇とせられた。

三月四月は新教會の東西兩年會が各その第一回を開くべき時期であつた。同十八日本多監督は先

づ西部年會を開くため、神戸に到り部會長と準備會議を開いた。本會議中さきに全權委員の一人たりしラムバスより宣教師ヘーガーに對し、宣教師は年會員の特權を享有するに決したと報じて來た。監督はこの報を受けて深く考へ眠を妨げられたというて居る。されど結局總會の決議を守り宣教師を年會の贊助員即ち Associate Member たるに止めんと決した。それで二十日に西部年會の組織會あり、出席正會員四十名、試補七名、信徒總代七名、關澤義之助、田中義弘を書記に擧げた。南美の宣教師十三名は贊助員として列席した。翌日關西學院の歡迎會あり、夜は神港クラブにて本多、ハリス、笹森の三人が演説した。この新教會第一の年會は従前の美以派の名古屋附近と九州、加奈陀派の北陸、と南美以派の全部とを混和するものであつた。

監督はこの年會の開會の辭に於て、この第一年會の特殊の意義は全會衆を動かさしあるべく、自己も萬感交々至るといひ、合同の成立を日本維新の開國と比較し、進んで人物と財力の肝要を説き殊に人物に關しては「篤く主を信じ父の愛を感じ自己の功名を念はずして神の御事業の成功を願ふもの」と定義し、その人物は拔驅の功名を考へず、衆力を結合して進むべしと説き、特に煩はしき内外人の關係を圓滿にせんことを願ひ、ルツターやウエスレーの如き優越なる個人に導かれて進むにあらずして、委員の協議によりて成りし教會の性質を考ふべしと諭した。

されど各部の組織的編成、特に適材適所の各牧師の任命には初めての事として頗る困難を覺えた。

部の編成は之を十一部となし、部長は新條例によりて各部候補者二名を公選しそのうちより監督が之を任命することとした。西部年會の任地及任命は左の如くである。

西部年會

- (一) 名古屋部(部長ギデオ・エフ・ドレーバー)、渥美半島(和田秀實)、西尾(エフ・エチ・スミス)、名古屋中央(關澤義之助)、名古屋第二(成瀬戒三)、小牧、犬山(田中龜之助)、新城、海老(部長兼任)、豊橋(古澤繁治郎)、岐阜(未定)
- (二) 金澤部(部長デー・エル・マケンジー)、金澤(太田虎吉)、七尾(部長兼任、萩原勝三郎)、富山(川合錠治、吉田利管)、高岡、新庄、魚津(エー・テイ・ウイルキンソン)、増澤正喜、松本常、福井(渡邊常三郎)、在福井宣教師(イー・シー・ヘニガー)、敦賀(未定)
- (三) 神戸部(部長堀峯橋)、神戸(部長兼任)、神戸東部(ジエー・シー・ニュートン)、御影(テイ・イー・エチ・ヘーデー)、兵庫姫路(エス・エー・ステュアート)、丹羽素直、木下春三、大阪東部(柳原浪夫)、同西部(日野原善輔)、同北部(ダブリュー・アール・ウイクリー)、堺(赤澤元造)、京都(田中義弘、エス・イー・ヘーガー)、多度津(元吉潔)、高松(ダブルユー・ケー・マシユウス)、關西學院職員(吉岡美國、ヘーガー、ニュートン、ヘーデン、マシユウス、蘆田慶治、松本益吉、村上博輔、吉崎彦一)、護教主筆(鶴崎庚午郎)。
- (四) 福岡部(部長古坂啓之助)、福岡(部長兼任)直方(大竹常業)若松(藤岡潔)、門司、小倉(伊地知九郎)、博多(イー・エチ・フレツツ)在米國(原田爲造)

- (五) 熊本部(部長ジェー・シー・デヴィソン)熊本(川瀬小太郎)久留米(中村徳太郎)、大牟田(岩切與助)、山鹿限府、(渡邊椎庵)、八代(成田保英)、人吉(部長兼任)
- (六) 長崎部(部長中山忠恕)、長崎中央(部長兼任)、長崎ウエスレー教會(川崎升)、同市傳道(エフ・エヌ・スコット)、佐世保(部長兼任)、大村(小林矩表)、鎮西學院職員(笹森宇一郎、エフ・エヌ・スコット、ダブルユ・デイ・エル・キングスベリ、川崎升)、上海青年會(川島末之進)
- (七) 鹿兒島部(部長賀虎之助)、鹿兒島(部長兼任)、國分(井上太一郎)、川内(岡安慶輔)、宮ノ城(未定)、青山神學校(江口篤生)。
- (八) 沖繩部(部長ヘンリー・ビー・シユワルツ)、那覇(村井競)、首里(大保富成)、名護(野原玄三)、讀谷山(比嘉保彦)、八重山(未定)
- (九) 京城部(部長木原外七)、京城、仁川(部長兼任)、山下篤志(平壤(村田重次)、部内宣教師(ギデオ・エフ・ドレーパー)。
- (十) 廣島部(部長釘宮辰生)、廣島(部長兼任)、ジー・デー・マイヤース、岩國(三戸吉太郎)、大島(吉見雅太郎)、柳井(ダブルユ・ジー・カラハン、丸山伊太郎)、山口(今田參)、三田尻(シー・ビー・モズレー、砂本貞吉)吳、福山(キヤラハン、白川三郎、松下績)、下ノ關(柳原直人)、元山(マイヤース、工藤繁)
- (十一) 松山部(部長、太田義三郎)、松山(部長兼任)、デー・ダブルユ・デマリー、今井昭徳、大分(中村金次)ダブルユ・エー・ウィルソン、菱川精一)、宇和島(近藤良董)、八幡濱(ダブルユ・ビー・ターナー、佐藤高堅)

中津(白石和三)、中津(ビー・ダブルユ・ウオーターズ、奥村忠太郎)
 以上邦人七十人、外人二十二人、成立せる教會三十三であつた。
 西部に續いて東部第一年會は四月一日より十日迄青山學院講堂に開かれた。出席者正會員七十一名、試補三名、信徒總代六名、書記高木壬太郎、通信書記三浦泰一郎、統計書記飯沼正己、年會々計米山定昌を擧げ、尙ほ諸委員の任命、各部の報告、議事ありて五日の日曜には監督は『傳道上最大緊要問題』と題し使徒行傳二六・一八を引きて説教した。『天國の目的は古今の差なければも教會は時處により或は神學問題或は政治問題などに逢遇する。されど日本の教派は今創業時代なれば必ずしも海外の問題を移入すべきにあらず、最肝要なるは人物を興すにあり、それは『目を啓き暗を離れて光に就き、サタンの權を離れて神に歸し、基督を信するにより罪の赦と聖められし者の中に於て業を得たる』人を要するのであつて、日本には古來高尚なる倫理道德あれど、それは思想であつて人格に對するもので無い。然るに基督教は基督の人格に對する經驗を重んずる。我等は我慢で無くて溫き感化に浴す。尙ほ罪の觀念は我等に薄弱なれば之れに重きを置き赦罪の道を進むべく、而も自己中心で無くて皆基督にある一人とならねばならぬ。天國には基督に在る身を以てゆくのであつて、メソヂストやバプチストたる爲に行くのでは無い。我が教會の機關は備はらぬ。されど使徒時代の教會にもヒドイのもあつた。信條も古いかも知れぬ、然しウエスレーはカルヴィニズ

ムの臭高き信條を活用して之に信仰と經驗とを加へた。かゝる根本に於て一致し足並を描へて進まば主の事業を勸むることが出来よう。我等は教會中より人物出でんことを祈り、各自基督にある一人たるを自覺し、その證人たることを祈るべきである。」

東部年會は舊美以派の北海道、弘前、仙臺、横濱、東京東部、同西部の六部と舊加奈陀派の静岡長野、山梨の三部を合したのであつて舊南美以の部は無かつた。

いま此等を合せて九部を組織し左の如き任地及び任命が定められた。

東部年會

- (一) 北海道部(部長エフ・ダブルユー・ヘッケルマン、旭川(木村繁枝)、岩見澤(新田豊)、札幌(杉原成義)、小樽、坂本富彌)、岩内(高見常藏)、函館(三谷雅之助)、八雲(未定)、
- (二) 弘前部(部長山鹿元次郎)、弘前(部長兼任)浪岡、黒石(對馬良三)、大館、能代、小坂(工藤官助)、秋田(平川基)、藤崎(白戸良作)五所河原、沼館、木造(未定)、青森(栗村左衛八)、八代(吉崎俊雄)、弘前部内(藤田匡)、部内宣教師(エス・エー・カシディ)、
- (三) 仙臺部(部長川澄明敏)、盛岡(神戸壬四郎)仙臺(部長兼任)同講義所(エチ・ダブルユー・スワルツ、竹田虎作)、福島(鶴飼捨吉)、米澤(石井勝彌)、山形(村岡菊三郎)。
- (四) 長野部(部長、飯沼權一)、上田(部長兼任)田中、(土屋増次郎)、小諸、岩村田(葭原梅次郎)、松代(斯波源七)、長野(川村兵治)、屋代(未定)、高田(長谷川金平)、松本(加藤新太郎)、池田、鹽尻(藤田正喜)、安

曇(青木堅治)、部内宣教師(ノルマン)、

在外者、シカゴ(加藤秋眞)、ボートランド(相原英賢)ブルクリン(三浦金吉)。

- (五) 山梨部(部長土屋彦六)、甲府(部長兼任)同講義所(飯田兼三)、日下部(飯泉規矩三)、勝沼(手塚久造)、市川(白石喜之助)、河東、大井、小笠原(新田東作)、韭崎(鳥山芝六)、谷村(米山定昌)大月、上野原、猿橋堀内(伊那(須郷瀧太郎)、飯田(内海正純)、部内宣教師(シー・ジェー・エル・ベーツ)、在外者紐育(島津岬)トロント(小野善太郎)

- (六) 静岡部(部長波多野傳四郎)、沼津(高北三四郎)、吉原(山中笑)、静岡(部長兼任)、同講義所(末久義太)江尻(高橋静壽)、藤枝(八木小兵衛)、相良(原野彦太郎)、見附、中泉、袋井(外山孝平)、掛川、堀ノ内、森(深町正夫)、濱松(曾木銀次郎)、同講義所(藤井浩)、氣賀(磯部久作)部内宣教師、(ホームズ)、(アームストロング)、在外者、ヴァンクラー(金澤敬次郎)、

- (七) 横濱部(部長平田平三)、横濱(部長兼任)、同講義所(ジー・エフ・ドレーバー)(京極惠三郎)、神奈川(小崎正静)、戸部(池田徳松)、鎌倉(美山貫一)、小田原、國府津、大磯(市來敬太郎)、竹ヶ岡(小島雄美)、在外者、布哇(時政英作)。

- (八) 東京東部(部長小方仙之助)、三田(長谷川貞助)、銀座(山田寅之助、赤川美盈)、下谷(中川邦三郎)、淺草(三浦泰一郎)、佐原(白井晋三郎)、安食、三里塚(草間積)、水海道、川又(澤井弘之助)、匝碓、飯久保(貞次)、宇都宮(長谷川朝吉)、西那須野、佐久山、白河、(今井信義)、福音會夜學校(アール・ビー・アレキサン

ダー)、教文館(ディー・エヌ・スペンサー)銀座(シー・ビショップ)在外者、紐育(長崎勝三郎)、員外(鶴飼猛)
 (九) 東京西部(部長石坂龜治)、中央會堂(平岩愷保)(カナレ)駒込(大澤孫一郎)、牛込(市橋友之)、城西
 (石坂龜治)、九段(山鹿旗之進)、青山(石川和助)、青山學院教會(小畑久五郎)、麻布(橋木陸之)、川越、川
 角、毛呂(飯沼正己)、豊岡(白鳥甲子造)、熊谷、小川、深谷(牧田忠藏)、島村、本庄(宮之原信次郎)、
 青山學院教授(エチ・エチ・コーツ、エー・デイ・ベリー、シー・エヌ・デヴィソン、別所梅之助、左近義彌、高木
 壬太郎、シー・エヌ・バーテルス、イー・テイ・アイゲルハート、山田寅之助)、同幹事(白鳥甲子造)、在外者
 (ジエー・ソーパー)、オークランド(倉長魏)、布哇(中村忠藏)、サクラメント(吉田森藏)。
 以上、邦人九十九人、外人十八人。完成せる教會は六十二であつた。

之に西部年會を加ふれば傳道者邦人百六十九名、外人四十名、教會九十五となる。而して兩年會
 傳道者中、古坂啓之助、平田平三、山鹿旗之進、同元次郎、山田寅之助、澤井弘之助、笹森宇一郎
 長谷川朝吉、藤田匡、關澤義之助、三浦泰一郎、須郷瀧太郎、高北三四郎、吉崎彦一、同俊雄、平
 川基、白戸良作、藤岡潔、古田とみ子は何れも青森縣出身者にて其數邦人傳道者の十分の一を占む
 る。この一事を見ても郷黨に及ぼせる本多の感化の大なるを知るべく、恐らくかゝる地方的勢力の
 例は日本教界に他に無類であつたらう。尙ほこれより四年の後本多の世を去りしときに弘前の人に
 して初より傳道者となりし男女を數へしに其數六十八人、青森縣全體としては八十人であつた。出
 身學校から見れば舊來の美以派は青山學院、加奈陀派は東洋英和學校、南美派は關西學院の各神學

部より出でたるもの多く、而してこの三者が合同して居たことは極めて短かゝつたが、前二者は久
 しく結合して居た。此外米國學校の出身者あり、日本の神學校を出でて後米國に遊學したのもあ
 った。

されど年會に於ける監督の態度は全員に對して地方の別なく三派の別なく公平無私なるは勿論ま
 た極めて謙抑であつた。護教第八七四號は年會に於ける彼の言として傳へて居る。

「昨年監督の職を奉じまして以來私の身に取りて一の心配は不肖の身に拘はらず多くの兄弟姉妹
 に助けられて現今唯一の監督にあることは非常の光榮であるが之に伴ふ危険があることで御座い
 ます。由來凡夫は高き地位に上げられ重き責任を負ふときは謹慎でなければならぬに高慢の心油
 斷の心が生ずるのである、自分も或は此病に罹りはせぬかと掛念して居ましたが年會に出で此患
 を免かれて居ると存じます。」

昨年以來幾ど毎週又失敗したとの感がありました、年會に際して益々其感を深くいたします、
 自分はモ一少し譯の分つた男であると思つた位である、實は毎日々々困つて居ます、困りますが
 一方には私に平和を與へます、私は高慢になる心配がございません、只鞭たれたる馬の如くクル
 〱廻つて居るのであります、之は神のお恵みに依ると存じます、老人になつたと思ひません、
 未だ若いからであると思ひます。」

この會期中監督ハリスの爲めその傳道四十年の記念會が催された。また下谷教會の牧師たりし故三上操吉の追悼會があつた。その遺子が四人あつて孤兒院に托せられたのもあつたがそのうちの一人を監督は家庭に引取りて養育した。四月十一日の日記に『三上操吉の遺子敬を本日貞子、羔六、靜子等を伴ひ迎に行きて連れ來れり』とある。自家の子女多く且つ日常親戚の者や書生を多く預る家庭にまたこの遺子を加へて憐みをかけたのであつた。

翌十二日の日記に『笹森に托すべき覺書を草す』とあるは笹森宇一郎が日本新教會を代表して來月ボルテイモアに開かるゝ米國美以教會總會に出席するのでそれに日本監督のメッセージを托したのであつた。

四月十四日ガウチャーとハリスとの歸國を横濱に見送つた。翌日小樽の教會から新任命の牧師其地に不適任なりとて謝絶の電報が來た。これは新監督の任命に對する最初の反抗である。之が爲に彼は小樽行に決し、二十日上野を發し、途中問題の關係者を見つゝ小樽に至りて其地の關係者に會し、熟議の結果、小樽と盛岡と牧師を交換すべかりし任命を取消し兩地とも從前の儘據置に決して事を收めた。

かゝる行旅にも途中諸所の演説は伴ふた。歸路津田仙逝去の報に接し廿七日青山に歸り翌日青山の講堂に於ける津田の葬儀に於て説教し明治初年以來の舊知を悼んだ。

五月三日には去年日本に來りて基督教と東洋意識に關する數回の講演を試み歸國して本年逝きしユニオン神學校長ホルの爲め青年會館に於ける追悼會に列し演説した。歸途また懷中物を掏換に掠められた。

五月四日より甲信地方に旅し、上諏訪、坂下、飯田、葦崎、甲府を巡説し十四日歸京した。

六月一日より二十日迄、静岡、京都、多度津、宇和島より大分に旅した。

七月七日子息二郎の妻滋子が逝去した。滋子は紀州の人普賢寺轍吉の女、青山女學院を卒業し、三十八年本多家に嫁したるも幾くもなく二郎加奈陀に赴き滞在三年に及びし爲、居を同うせしこと少く、しかも病に親しみ廿九歳にして逝いた、彼女は著者が女學院で教へた最初の學生の一人であつた。容姿端麗、靜淑溫良の佳人であつて、其若き死は彼女を知れる衆人を悲しましめた。かくて本多家は三代續いて夫人の早世を見た。

七月廿五日より八月十五日迄は彼は北海道及び東北に旅した。八戸、青森を経て函館に至り遺愛女學校の獻堂式に臨み、歸りて陸奥五所河原、沼館、木造、藤崎等を経て弘前に入り、能代、秋田、天童、山形、米澤、白河に傳道した。至るところ演説の間には揮毫を求めらるること多くなつた。

歸京すれば教會の條例委員と屢々相會し、また北海道學田の事にて屢々押川と交渉した。八月三十日三好退藏の葬儀には司式者の一人となつた。

九月上旬は關西に赴き大阪より濱寺に至り、歸路關ヶ原古戰場を見、静岡、藤枝を経て歸京した。

九月後半は信越の旅に過ぎた。十九日出發越後高田に至り、春日山に登りて謙信を偲び、また巨利淨興寺を見た。次に高田より荒井に至り附近の飯田村に郷紳増村慶次の設立せる有恒學舎を訪ひ松代、長野、屋代より小諸に至り、豊科に行き、長野に歸り、上諏訪より甲府を過ぎ病める土屋彦六を訪ひ廿九日歸京した。

十月第四回の韓國行を爲した。六日發釜山、京城、平壤、鎮南浦、黃州を經、廿四日大韓醫院の開院式に列し、大邱、釜山より馬關に歸り、山口に至り、歸路豊橋よりまた長篠を訪ひ十一月二日歸京した。韓國旅行四週間の記は遺稿に載せてある。

此頃監督事務所は銀座のメソヂスト書店教文館内にあつた。五日豫算委員石坂、波多野、土屋、平田、平岩、ビシヨップ、コーツと會し三派ミツシヨンの關係を考へたが未だミツシヨンの態度不明であつた。

十三日米國美以教會總會に赴きし笹森宇一郎歸朝して所見を報告した。この總會は去五月ボルチモアに開かれ開會に當り嘗て日本に來りし監督グッドセルは監督院を代表して牧會書（ペストラル・ドレス）を朗讀したが、そのうち日本に關しては、

『日本メソヂスト教會の組織を必要とせしに就ては克蘭ストン監督より諸君に報告する所あるべし、此必要は宣教師及び宣教監督ハリス君の證言に基き、總會の裁決によりて吾人之を認めたりと雖も吾人は今後總會が其教會の維持に要する金額を殆ど全部寄附せざるべからざる時に於て妄りに獨立教會たることを承認せざらんことを望む、概して自給は自治を許さるゝに先ち充實し居らざるべからず、補助を撤去するの外に何等の抑制なき獨立教會に對し、長日月間補助を與ふることは危険の分子あり、克蘭ストン監督は日本教會の組織に於て教理と秩序の保存に對して保障あることを諸君に報告すべし、日本に於るメソヂスト教會の合同は止むなく總會をして宣教監督ハリス君の身分及事業を考慮せしむ。』

と云うた。議場では本多監督の贈りし書も讀まれた。ハリス監督も日本及朝鮮に關し報告した。笹森も一場の演説を爲し、其中に『日本教會の條例は三派の條例より拔萃取捨して編纂したるものに條例中最良のものと信ず、吾人は貴教會より離れたるを悲む、然れど合同は分離無くしては爲し得ず、而して貴教會派遣の宣教師は我が年會に於て日本人同等の權利を有す、吾人は尙ほ貴教會の援助を望む』等の言があつた。獨立と其後の援助とは到底調和せざるを、無理に調和せしめざるを得ざる實際の必要は疑義の餘地多く、新教會は寧ろ辛ふじて成立するのである爲に苦心は多い。實力本位の米人には日本人は徒に體面を重んじ美名を好むものと思はれたかもしれぬ。たゞ宗教界な

ればこそ政治界などに存し得ぬ現象が成立つのである。

この後の監督は十一月後半を北陸東海の旅に過ごした。十六日發、金澤、魚津、富山、高岡、七尾に至り引返して金澤、福井、敦賀に至り、名古屋、小牧、西尾、濱松、相良を訪ひ十二月一日歸京した。

十二月五日長野に至りノルマン方に泊し翌日長野教會の献堂式に臨んだ。

同九日關西に至り京都、伏見、神戸、姫路、福山、廣島、三田尻、徳山に至り引返して宇品より松山に往復し、大阪、京都を経て二十一日歸京した。

十二月二十三日 三派交渉委員會があつた。宣教師は尙ほ三派併立して日本教會に對する爲である。彼は此頃腰痛強くして屢々注射した。

二十五日 埼玉縣黒須に至り石川製絲工場の男女工八百人村民二百人とクリスマス祝した翌日川越教會のクリスマスに列した。

三十一、明治四十二年 靜養半歳

彼は此春は東京で迎へたが、一月十五日には關西に向ひ出發し靜岡で部内傳道師達と談り翌日神戸にて關西學院及神戸教會にて談り、山陽道を過ぎ馬關よりの船に同縣人西村陸奥夫が佐賀縣知事

として赴任するに會ひ、十九日門司女學校にて演説し、爾後若松、直方、中津、豊津を過ぎ福岡に至り、ハリス監督と會し、佐世保に至り、長崎に轉じ、二月一日久留米、それより大牟田、山鹿、熊本に至りデヴィソン部長と八代にゆき、七日鹿兒島に達した。前々年末琉球行の途次來りしところであつた。十二日米之津より引返し二晝夜海陸直行して遠州掛川に來た。途中腹背に腫物を發し、惡寒に艱み、十九日家に歸れば家にも病兒があつた。此行説教と演説と合せて約四十回に上つた。此間に牛込教會牧師市橋友之を喪つた。

三月、青山學院の理事會は、彼を學院名譽院長に擧げた。同時に院長心得小方仙之助を院長とした。

同月十六日 東京中央會堂で第二回東部年會を開いた、部長は杉原成義を北海道部長とした外前年と同じであつた。年會中の演説『指導者の心得』は遺稿にある。『吾人は日本に與ふるよりは仕ふるなり、主の後に従ひて仕ふるなり、主の指導法は是れなり』といふを主眼とする。

第二回西部年會は三月廿六日より福岡にて開かれた。中村金次を大分部長とした外、部長は前年の如くであつた。牧師の任命は種々の事情ありて容易に決し難く、彼も自ら男が小さくなつたといつた。

四月十二日 彼は宣教開始五十年記念振興運動なるものを企圖し其趣旨と計畫とを發表した。安

政六年新教三派の宣教師渡來より正に半世紀の経過を略述し諸派合して内外教役者二千人と七萬二千餘人の信徒を得たるを謝し、特に自派の責任を感じ、また信仰復興を期し進撃的傳道を試むべしといふた。

此間彼は三月には甲府、四月には那須野、佐久山、五月には信州、六月には下總に行つた。

かくて過る二年の頻繁なる傳道旅行は彼の健康を害したれば六月布哇に行きて稍や休養せんと欲せしも彼地に同盟罷業の影響ありて果さず、遂に醫師高田畹安の診察に因り輕微なる肋膜炎と認められ、靜養を必要とすといはれし爲、弘前に歸り半世紀前に跋涉せし岩木山西南麓の常盤野なる嶽温泉に潛むに決し、七月十七日出發、途中頗る疲れ磐城平驛に下車休息を要する程であつた。弘前からは西方四里半、人車も通ぜぬ悪路なれば荷馬車にて目的地に達した。

跡に青山學院にては七月廿一日より九日間第二十回青年會夏期學校が開かれた。これは青山に於ては空前絶後のことであつた。校長は井深梶之助、牧師は鶴崎庚午郎、講師は植村正久、小崎弘道、元田作之進、原田助、今井壽道、笹森宇一郎、笹尾彗太郎、柏井園、千葉勇五郎、島田三郎、ハリス、シカゴ大學教授バートン等にして來會者二百餘名であつた。諸般の問題を擧げた討議會では我等は盛に論議したが、名譽院長たる本多は遠く故郷の野にあつて關知しなかつた。

常盤野に約一ヶ月を過ぐした彼は通信を護教に載せた。これによれば海拔約五百米の此野は牧場

を有し牛馬七八十頭あるも人家六戸、人口二十五にして極めて素朴、以てヨルダンの荒地を想像すべしといふ。岩木の峯は此地より更に千百米高く聳え屋後の二つ森に登れば西北四里に日本海を見る。かゝる境地にあれば殆ど羽化登仙の想あれど唯だ毎日數里外より來る郵便が之を妨げた。且つ彼は『國勢一覽』などを閱して宗教勢力の比較を爲し、全國神社十萬八千神官神職一萬二千人、佛寺十萬九千、住職五萬一千人に對し基督教會と講義所千六百七十五、男女宣教師五百五十人日本教師四百六十九人を對照して居る。また日本傳道に關する意見を表白して居る。

此間一の悲哀は山田寅之助老母きよ子の計であつた。彼女は天保十年弘前藩士の家に生れて十八歳にして山田貞量に嫁し二男一女あり、男源次郎及寅之助は共に傳道者となり、女徳子も信徒となつた。きよ子は實に明治十年受洗し、爾來三十餘年弘前教會に列した。七月二十二日七十一歳にして逝ける彼女の計に接し、彼はその翌日常盤野にて追想を書いた。

『弘前教會の母も一人なくなれり、きよ子老姉と唯二人にて會堂に祈禱會を開きし事幾度ぞ、掟橋の脇に親方町に和徳に寒風に青年と共に傳道を助けし事幾十百回ぞ、山田愛姉は教會の友を援けしのみならず、眞の骨肉なる子女をも神と教會に捧げて直接に榮光を顯はさしめたり。今や其靈は待たれたる且つ備へられたる父の家に歸れり。いと貴き主たる兄たる君の導き給へるは勿論の事なり。是ぞ遺れる我が慰めとなるの想なるぞ畏こき。』

これより二十年前著者もこの老信女を見、屢々その祈の聲を聞いた。
本多監督が今かく休養するは明年の爲でもあつた。今は身はこの僻遠の地にあれど明年は五月米國南カロライナ州の南美以教會總會、同月ワシントン萬國日曜學校大會、六月の蘇國エディンボロの世界宣教大會、九月には加奈陀メソヂスト教會總會に招かれて居る。かゝる世界的連絡が今は斷ち難くなつた。

九月に入りて北地の高原既に秋涼なる頃、多年の友監督ハリスの夫人が七日に逝きし計に接し、彼は上京して十日青山學院に於けるその葬儀に説教した。夫人名はフロラ、一八五〇年二月生れにて未だ六十歳なれど久しく病身であつた。詩をよくし、讚美歌も作つた。山鹿旗之進は後に彼女の傳『ハリス夫人』を著しその徳を傳へた。彼女はよく日本人の美質を見た。本多はその説教に於て『ハリス愛姉は日本國人に献身犠牲の精神あることを常に誇賞し、然して猶ほ此の精神をして一步を進ましめ愛姉と同じ動機と工夫とによらしめんことを祈るものなりき』といつた。

九月十二日 青山學院出身の外交官龜山松次郎の葬儀が學院で行はれた。彼は同じく青山を出でし本多熊太郎とよく轡を駢べて進み來つたが病に斃れた。本多監督は爲に説教した。

同二十六日には南美以教會監督セス・ワードの計に接した。ワードは前年東洋に來り日清韓三國を觀察し、日本の傳道には基督教を知的に現はすを要し、爲に教育高き傳道者を要すといひ、朝鮮

とは大差あることを示し、清國の傳道は有望なるに國の將來は望少しと見た。この東邦の知人に對し本多は篤き弔辭を九十九里濱から送つた。

彼は如何して九十九里濱に來り如何に其の處に日を過ごしたかは、彼の逝きし後、山鹿旗之進が『九十九里濱に於ける故本多監督』と題し護教一一〇一號に載せし一篇が最よく之を叙述して居る。ここに筆者の許諾を得て殆どその全文を載せる。

『監督が僅に小閑をぬすみて、上總の九十九里濱に靜養したのは、明治四十二年の初秋であつた。靜養の家は山武郡片貝村の伊藤榮太郎氏方であつた。伊藤氏は元東金の人なりしが、壯年の頃横濱に出で、商業を營み、明治十九年の末、同地メソヂスト監督教會に、栗村左衛八氏が牧師たりし時、信者となつたのである。今や業成り、身退きて、靜に閑雲野鶴を友としてその餘生を樂んで居るのである。』

伊藤氏夫婦は、年來の恩師が來遊の事であれば、心より歡迎して居心地よく優待した。監督の部屋は、渺々たる太平洋に面せる二階座敷の八疊と三疊の二間であつた。毎朝五時前には起床、浴衣がけに尻端折りて、露しげき夏草を踏みわけつゝ海岸の運動に出掛けた。そして眞龜の川より作田の川まで、夢の如き景色のうち、一里にあまる長汀をぶら／＼と散歩した。歸れば直ちに湯殿に入りて、大きな水瓶一杯とバケツ二杯ほどの冷水浴をした。それから七時には伊藤氏の家

族と卓を圍みて朝餐をすました。毎日勉強の外には、大抵九時半より十時半まで運動した。午後三時過ぎにも亦屹度一回は散歩した。時には潮流の加減により、波うち際の白砂なめらかにしてさながら白紙を伸べたらんやうの時には、身にあまる六尺餘の太き棒千切りを肩にかけて、砂上に一間四方もある大文字の手習をした。

斯て家に歸れば、机上書信の山をなし、一々それを取調べて返信すべきは返信し、それから讀書するのである。監督自身に持參の書籍の外には、伊藤氏文庫の『徳川實記』や『東鏡』などを愛讀して居られた。書見に倦みて習字をする。それに豫ねて四方より囑托せられしものにや、幾枚となく揮毫する。そのうち伊藤氏の需に應ぜしものは、畫仙紙に隸書體もて山上の垂訓を認めたものである。これまで本多監督の行書や、草書はおほくあれども隸書は極めて罕である。而かも伊藤氏所藏のものは、その筆の蹟美事にして、實に天下一品であると思ふ。

午後の五時には入浴する。監督は湯が好きだから、伊藤氏の廣い浴室と清潔なる湯槽に、底の底まで見え透くやうな清水を溢るゝばかりに湛へてあるので大層に悦ばれた。『魚の鮮なるは御馳走なれど、据風呂の清きも亦格別の御馳走である』と。入浴をはりて六時半には食事となる。監督の最も賞美したのは師の鹽焼と、鯉魚の刺身とであつた。取り分け『刺身茶漬』は又なき味とて好まれた。丁度その頃は師の旬ではあつたが、當年は珍らしき大獵であつた勢か、例年よりは大

きなものがあつた。監督は大抵八寸位のもの五尾位を平らげた。それに刺身は、東京邊の二人前餘は造作もなかつた。監督のいふには『醫者は私に肥大つては不可と申されたれども、私の好物ばかりだから肥大らずには居られませぬとて、いつでも師の鹽焼と鯉魚の刺身の時には、『ドレお醫者さまの規則を少し破りませうかな』とて、日頃は二杯の御飯を三杯にした。夕食後には、四方八方の世間話に打興じなどして九時にはかならず臥床した。

日曜となれば、伊藤氏の家族をあつめて教話した。其他に尙ほ二回ほど公開演説を試みられた。その一回は、とある民家を借受けて、通俗の宗教談をし、他の一回は、當地の有志者より成る『向上會』の依頼によりて、片貝小學校の講堂に演説された。基督教界の名士が演説と聞き傳へて四方より百人足らずも集會した相である。演題は『日本國粹三論』とあつて、その演題の梗概に『國寶と國粹とは混同され易し。國寶は珍藏すべきもの、國粹は時勢に應じて進歩せしめざる可らず。』と説き起し、更に本論に入りて、『第一は敬神の事。日本は敬神の風習ある國柄なれども、其方法宜しきを得ざる可らず。第二は家族制度の事。日本の家族制度は他國に見ざる美風なれば、尙ほ一層夫婦間の道を明かにして、子女の品性を高めざる可らず。例ば子女をして孝子たらしむるには、兩親も亦それだけの品性を修めて尊敬を拂はしめざる可らず。それより第三は日本人の健康状態の事。日本人は體格小なりと雖、臨機に活動し、敏捷に活動し、困苦に堪ゆるの國民で

ある。人口は年々五十萬づゝ増加して喜ばしき事ではあるが、一方に國は段々に狭くなる。佐渡の金山も掘盡した。鐵も日本からは出ないで、支那から取る。余裕のあるものは、山と海と青年である。山は日本の三分の二ある。宜しく之に植林すべし。海は太平洋といふ大なるものを持つて居る。併し先達而來、毎々海岸に出ては、片手網を見物したが、どうもあの位の獵では中々二十億の借金を返す事は覺束ない（會衆みな笑ふ）。日本人は生れると直ぐ五十圓の借金を負ふ次第である。されば此負債を返却して、尙ほ余裕あらしむるのは、青年諸君の力である。殊に青年の腦と腕とを要するのである。腦力をよくするには、酒や、煙草を嗜んではならぬ。青年を教育する所の教師諸君も、酒や、煙草を慎んで貰ひたい。これらは家庭と學校の兩方相待つて、大に其功を奏するものである云々。』

この演説の梗概は、片貝村の篤志家にして、向上會の會員なる中西忠吉君の筆記し置きたるものであるが、聽衆一同に多大の感動を與へたさうである。余は當時中西君が本多監督の演説は偕ておき、監督自身に就ての印象と感想とは如何と問ふたら、鳥渡當惑の體であつたが、忽ち莞爾として『左ればなり、最初私は基督教界の名士とあるからには、定めし嚴然と構へて、其お話しなども今少し難解しかろうと思ひましたら、案に相違でりました。マア一言に約めて申せば、毫しも勿體ぶらぬと、何處となく大きいとの二點であります。』

監督は歸京後、伊藤氏に禮狀して『先日中は言語に盡しがたき御懇待を蒙り、山岳萬謝仕候。去る四日無事歸宅仕候。翌日より晝夜別なく多忙に相暮し申候て不思御無音に打過ぎ恐縮の至りに御座候』余は此書翰を見て、端なくも我主エス、キリストが受難前に、ベタニヤ村に宿りて愛弟子に歡待せられし故事を思ひ起さざるを得なかつた。

千秋依然たる九十九里濱の波浪、鞆々岸邊をうちて、無限の暗示をなして居るやうである。』
安政六年即ち一八五九年新教宣教師日本渡來より、明治四十二年一九〇九年迄正に半世紀になり信徒の數は七萬に上つた。こゝに宣教開始五十年紀念會が企圖せられ十月五日より十日迄神田青年會館にてそれが實行された。委員長は小崎弘道及びイー・アール・ミラー、副委員長は本多、井深平岩、元田、中島力三郎及び宣教師五人、委員は頗る多く、婦人部には本多、井深、兩夫人も加はつて居た。

初日の感謝會にジエームズ・エチ・バラと本多とが演説した。共に時勢の變化の大なるを實驗によつて説示し、前者は特に同勞者多數の名を擧げた。後者は信教の自由、家庭の良風、慈善矯風、教育、神佛兩教への影響、思想文學への交渉を擧げて感謝を表した。小崎弘道とイムブリーとは各五十年の回顧を談つた。禮拜説教は宮川經輝が之に當つた。祝會には桂首相、小松原文相、東京府知事阿部浩、東京市長尾崎行雄が祝詞を贈つた。他に十種の講演會あり、教育に關しては井深、原田、笹

尾等、文學は柏井園、加藤直士等之に當り、日本倫理宗教思想及國民生活に及ぼせる基督教の感化を海老名と新渡戸と共に論じ、日本教育並に文明に及ぼせし宣教師の功績を理學博士藤澤利喜太郎が局外より稱揚したのは異彩であつた。女子教育婦人事業に就ても内外十三人の講演者あり、本多夫人もそのうちに入り教會の婦人會に就て談つた。其他社會改良、慈善事業、牧會説教、傳道、日曜學校各種の問題の講演あり、終に過去將來に於ける宣教師の事業に關する、デヴィス、ダンロツプ、ヘーデン、本多、植村、綱島及び山本秀煌七人の講演があつた。本多は第一に宣教師は日本人と廣くまた親密に交際することを望み、萬國主義の普及に努むるを冀ひ、第二に時勢を察し教會政治を司るよりは精神上の指導者たれと望み、眞の敬神の念は我等未だ經驗足らざれば、代々を経たる信徳の模範を垂れよと求め、第三に諸派漸次合同するに至ることを希望した。この會の記念講演集は會の主任書記鶴飼猛が編纂し翌年之を發行した。

これより半月の後、即ち十月二十六日公爵伊藤博文はハルビンに於て韓人の銃丸に斃された。本多は彼とは屢々會見し、嚮に韓問題に關し意見を提示したこともあつた。それは韓に對し勇斷にはやるを不可とし例を我が維新にとり『その際西南の無經驗にして無同情なる青年政治家が東北を蹂躪することなかりせば東北の進歩は十年を早めたるべし』といひ、『況や韓國に對しては威武と法律とのみを以て治むべからず我官民の徳望を以て悅服せしめざるべからず。若し今日日韓の區域を

要せざるに至る程の勇斷を敢てせば我が官民の倨驕甚しくなりて韓民之に堪へざるべし』といつた。然るに突如伊藤の遭難の報に接し彼は左の一文を草した。

『伊藤公爵の遭難には天下皆震駭せり。斯程の大才を拳銃にて斃したりとは余りに無造作にして遺憾の至なり。兇行者は韓人とあれば政治的の意味を離れぬ様なれども恐らくは見當違ひの公憤二分私怨八分ならん、現時藤公を暗殺するは韓國の國運に大害ありて小益なきことは甚だ見易き事なれども忿恨熱血に浮かさるゝ時は稍識ある者と雖も或は這般の誤に陥ることあらん。日韓の關係大勢既に定まれり。百の統監を暗殺すと雖も影響あらざるべし。暗殺は馬鹿らしく恐ろしき事なれども其効果甚少し。幕末に當り幕府の當路者亦其忠義を任じたる連中が頻りに勤王黨を暗殺したれ共、彌々其勢を増すばかりなりき。大勢の定まる所如何ともすべからざるなり。然るに今般の凶變に際し我同胞中にも此變事を利用し、宗主權域を擴めんとか韓國民の責任云々とか頻りに騒ぎ立つ様なれ共、藤公若し瞑せずして、之を聞けりとせば如何なる評を加へられん乎。公は狙撃者の韓人なりと聞きて馬鹿な奴と一言せられしよし、此場合喧しく論ずる者ありと聞かば同じく馬鹿な奴と言はるゝも計り難し。抑も事の政機に關する者は須らく冷血冷眼、智と意を主用して感情をば尤も末座に置かざるべからず。藤公は苦勞人なり。下情にも上情にも能く通ぜし人なり。韓民の情を熟知せり。古くは神后近くは豊太閤己來の日韓の關係を知れり。尤も近き明

治現代の關係は自家の舞臺にして座主なる公の爲めには慮外千萬、天下に對して申譯なき様の失敗も我邦人によりて演ぜられたる新なる記憶もあり、旁々公が韓國皇室は勿論一般人士の爲めに同情あるは明なる事實なれ共、何分にも公の本意が防げられ勝となり來れるは是非も無き次第なり。而して公が韓國に同情を抱きて彼よりも同情を得度は勿論なれども公は猶ほ大なる同情を欲するものなり。世界列強の同情を欲する者なり。是さへ得らるれば本邦の實力を以て臨む時に韓國はどうにもならぬ事なかるべし。公會て曰く韓國の實力に乏しきは明治維新前防長二州の實力にも及ばぬ程に微弱なりと、頗る惘然に思ひし體なりき。今般の凶變は實に遺憾愛惜の至なれども思慮ある韓人の同情を動かしたり。又大に列強の同情を動かしたり。不慮の効果とは申しながら多分の損失を償ひ得たりといふべし。此上繼續者の當局並に一般同胞が冷血沈靜、以て寛仁の體を失はざれば蓋し公の薨去をして一層有効なる者となすことを得べし。公は遂に人柱となりて日韓堤防の決潰を補へり。恐くは人繩となりて島帝國と韓半島とを繋ぎ合せ永く離るゝこと能はざる者となしぬと云ふべし。嗚呼犠牲歟。何の場合に於ても犠牲ほど有力なるものはあらずと知らる。』

これ監督本多庸一の名を以て明治四十二年十一月六日の護教九五〇號に載せられたる公書である彼の善良なる意味の政治家は躍如として居る。何れの宗派の管長の如きものがよく此時かゝる公訓

を發したるものがあらう。然もかゝる一篇が僅かに微弱なる護教に出でしのみにて天下の大新聞に掲げられざるを思へば彼の位地に對して憾なきを得ぬ。

但し彼の憂慮は顧みられず韓國の併合は翌年實行された。

十一月には青山女學院が創立三十五年の祝會を催ふした。彼は之に臨み女訓小言と題し、特に第廿世紀の女子教育に於て今日の世界を知らしむる必要を訓へた。此年のクリスマスには次の一文を草した。

『クリスマスは來れり。一年の月日を暮したのに相違ない事である。信者となりてより已來是は三十八回目のクリスマスである。此間自分の境遇も多少變つて居る。或年は外國に居つた事もある。併し今年は尤變つたクリスマスに出逢つた様に感ずる。其は外でも無い。病氣靜養中といふ譯である。是は三十九年中唯一度である、例よりは考ふる追もある靜なる淘綾の海濱に閑居し風雨さへ烈しく無ければ波打際に逍遙するのは第一の仕事であるから成丈けぼんやりもする積りである。だれ共、止むを得ざる書狀を毎日二三通、時によると五六通も書くことがある位である。だから隨分色々の事が思ひ出さるゝなれども参考書を持参しない故に六ヶ敷事は書けない。あつさりした所感を二三認める。

一、世界思想の自ら養はるゝこと。廿世紀の世の中に安全なる社會を組織して文明の恩澤に浴

するには國家思想の旺盛なるを要することは申す迄もなければ去りとして二六時中國家中心の考のみなることは決して健全なる養生にはあらざることも明である。然るに我々日本人は兎角國家中心に麻醉せられて世界的の思想に於ては餘程勉めなければ出て來ぬ様に見ゆる。されどもクリスマス計りは誰でも餘念なく世界的に考へ不知不識に廣い心になつて居るは誠に貴き事である。一年たつた一度の事であるが國家的機械に天來の世界的膏油を灌ぐことは眞に此れ貴重なる生命である。自分は半年冬なる東奥の端に生れて誠に無精に生長せる爲めどうも御祭り騒ぎが面倒臭くて見供らしくてならぬ方なれば信者となりて後もクリリマスに何分氣乗りのせぬものなりしが全くこれは我まゝの事で他の御祭りは兎も角もとしてクリスマス思想は我等の爲めに誠に大切である。と心付きしは甚だ延引ながら改めて此の迂濶を披露するのである。』

クリスマスで監督も嬰兒に返つた様であるが、こゝにも世界的思想が顯はれて居る。此文は更に進みてクリスマスは萬人一致の焦點なることゝ、その誕生は頗る尋常の誕生なりしことを説いて居る。これも遺稿に載らなかつた。

三十二、明治四十三年、米國及蘇國行等

前年は特別試煉の歳で轉地靜養に半年を費したと彼自らいふ。今年一月中旬沼津にゆき高北三四

郎がトしおきし千本濱の公園の閑地に就いた。十七日静岡に移り、また興津にゆき富士合資會社の原崎氏の別荘に山海の美を賞しつゝ滞在一週日を過ごした。月末濱松に移つたが偶々海老名彈正と食卓を共にして閑談し、海老名がアングロ・サクソン人の品格を稱揚するをきゝて同感を表し、曾て巴里にて新渡戸稻造より佛人が性質上ヒューゲノの如き嚴肅主義に適せずとの説を聞きしを想起し、日本のアングロ・サクソン氣質に似たる士風の漸く地を拂はんとするを慨した。

濱松より名古屋を経て神戸に往き魚崎なる中村平三郎の住宅にて厚遇を受けた。

三月六日には彼は青山教會にて工藤東三郎の葬儀に説教した。工藤は弘前の人にて米國デポー大學に學びしもの、曾て十七歳の時彼より受洗したが、今四十一歳にして逝きまた彼によつてその最後の式を行はれた。

同月十九日彼の弟西館武雄は逝いた。兄より十年後に生れ俊傑西館孤清に養はれた武雄は豪邁の資を有した。さきに記せる如く一度東奥義塾々長となり、後に青森縣八戸、島根縣濱田、福井縣福井秋田縣大館及び奈良縣文武館の各中學校の校長に歴任し、教育界に盡すところ多く、尙爲すところあらんとせしも五十三歳にして世を終れるは惜しかつた。

第三回日本メソヂスト西部年會は三月九日より大阪東部教會で開かれた。それは柳原浪夫の牧する教會であつた。出席七十二名、川崎升が書記となつた。部長の新任は無かつた。本多監督は『我

が同勞者に告ぐ』と題し過る三年を回顧し、メソヂストの合同の性質は日本基督教會及聖公會と異りて三派合したる上に内外共力の特徴を存するも、短所もこゝにあれば一層の努力を要すといふた。また『我等は果して厳しき主の僕なりや』と題する説教をなし、萬國の民に福音を傳へるとの嚴命に對し、キリストの愛の道を教ふると共に、愛を實行するを要すといつた。

三月二十三日より青山學院に於て第三回東部年會は開かれた。書記は高木壬太郎であつた。出席は正會員六十一名、試補十一名、信徒總代五名であつた。東部にても部長の變化は多かつた。

病後兩年會を司つた監督は四月六日出發。地洋丸にて第五回米國行の旅に上つた。神戸部々長堀峯橋と平壤教會を辭して留學に上る村田重次とが同行となつた。監督は海氣の呼吸にて咽喉の惱も薄くなつた。十五日布哇に着し牧師堀貞一、本川源之介、中村忠藏に迎へられた。布哇内外の新聞は監督の寫眞と小傳とを掲げた。青山出身の芝染太郎の主幹たる布哇新報はいふ。

『日本メソヂスト教會監督本多庸一氏歐米漫遊の途次當地に寄港さる。氏はメソヂスト派の名士たると共に基督教界の元老にて、我が日本の精神的事業の上に貢献したるもの少に非ず。日本メソヂスト教會が現今の如く獨立支部に至りしもの又主として氏の力によらずんばあらず。素より同教會は經濟的には尙外人の助力に待つものあるべしと雖も、兎も角政治的に獨立の體面を維持するに至りたるは氏等奮勵の力に倚らずんばあらず。殊に日本の基督教界に於ても美以一派は

他派に比し兎角頑迷固陋の嫌ひなきにあらず。信仰の點に於て、教會制度の點に於て、儀式典例に於て、新教中最も保守臭味を帶び、從つて同派の一般を通じ萬事に於て進歩の遲々たるものと雖も、近來に至つて大に面目を改め、政治的に獨立したると共に教派一般を通じて新空氣の横溢せるものあるを見るに至りたるは、吾人の同派の爲め、日本基督教界の爲め賀せざるを得ざる處なり。而して斯る新氣運に向ふを得たる所以のものは主として本多氏の如き斯界重鎮の指導啓發の宜しきを得たるの結果ならずんばあらず。』

これは全く當らずとも遠からざる評言である。

太平洋上にて監督の認めたる公書は本國の教會に宛てたるものであつた。彼は合同後三年にして米國に向ひつゝ日本を顧み感慨無量、教會員に薦むるに六條の綱領を以てした。曰く、

(一) 我儕各其身を神の心に適ふ活ける犠牲として之を神に獻じ、聖靈の導に従ひ全力を盡すべき事。

(二) 我が教會の條例を學びて之を守り教會の規律を正しくする事。

(三) 我儕は皆神の教會即ち十字架の軍に屬する者なれば我が教會を愛し之が自給獨立の爲に心身の力を惜しむべからざる事。

(四) 我儕各稟る所の賜物に隨ひて同胞を主の御下に導き兄弟姉妹心を協せ力を戮せて教勢を

振ひ興すべき事。

(五) 各目を醒し心を勵して教會の氣風を新にし團結を鞏固にすべき事。

(六) 各信仰の修養に心を用ゐ常に主の御側に侍べり父の御慈愛に沐浴するの實驗を保ちて、

恩寵の下に生長上達せんことを勉むべき事。

尙ほこれに附記していふ。

仰ぎ願くは主耶蘇基督の御靈我兄弟姉妹の裏に其家庭の中に、亦我教會全體の間に住み賜ひて豊かに恩化を蒙らしめ賜はんことを。

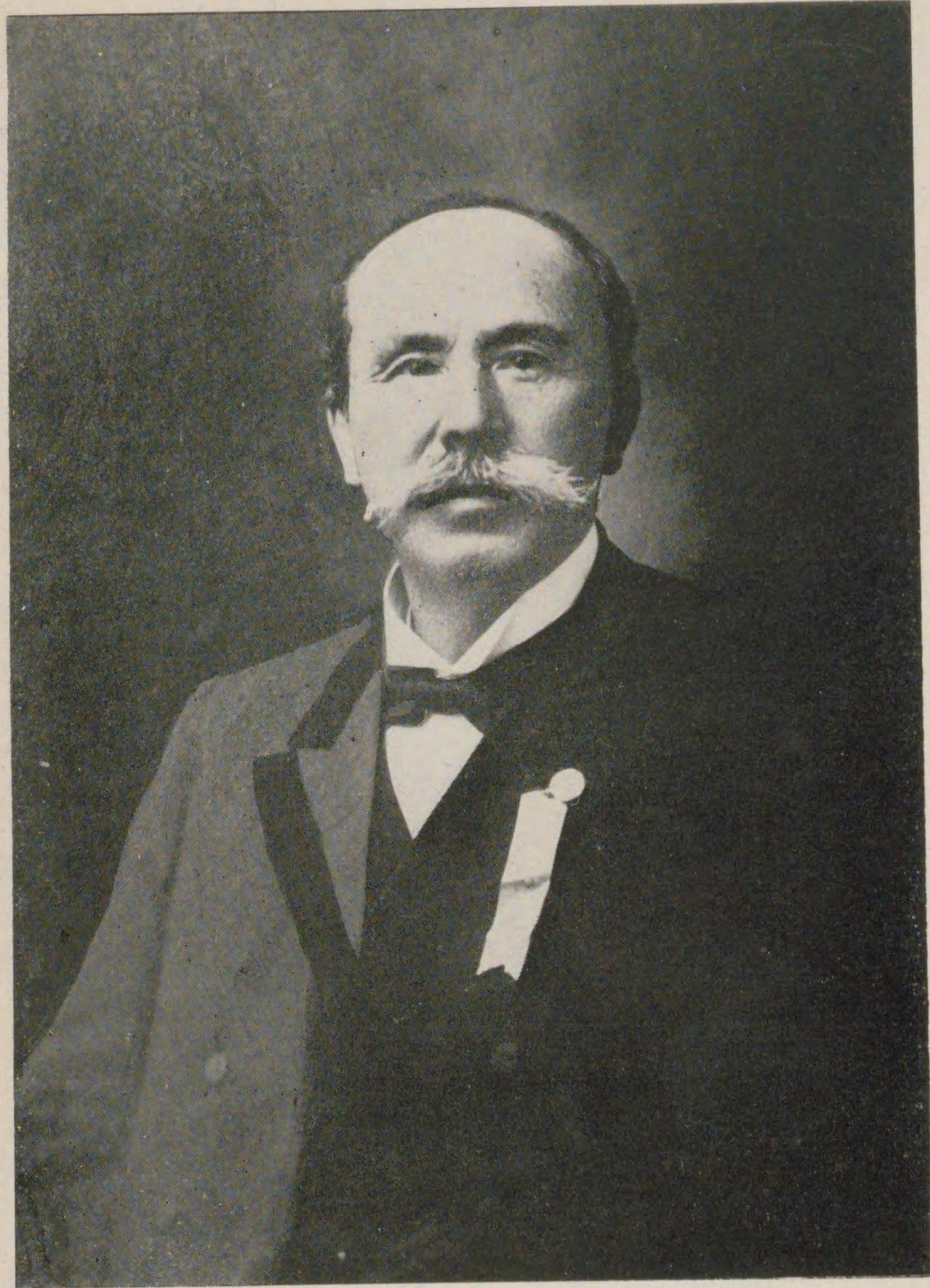
これは彼の使徒的の書翰である。

米國上陸及横斷の様子は今明でないが五月四日より南カロライナ州アシユヱイルに開かれし南美以教會總會のことは略々明である。本多監督は堀峯橋、田中義弘と共に之に列した。

議員三百十名傍聴者日々四五百に上つた。七名の新監督の法定得票を得る爲數回反覆して投票するのまかゝる會の習慣であつた。本多と堀とは五月十三日同總會にて演説し、好評を博した。

尙ほ二人は出發に際して各告別の辭を陳べた。

萬國日曜學校大會は五月十九日より六日間ワシントン市に開かれた。出席一萬に及ぶ盛會であつた。日本人は本多庸一、田村直臣、田中義弘、西尾幸太郎、西村靜一郎、鵜飼吉次、小野善太郎等



一九一〇年ワシントンに於て

が出席した。初日の夜コムヴェンション・ホールに於ける大歓迎會には大統領タフト、及び日曜學校に熱心なる實業家ジョン・ワナメーカー、及びコロンビア州代表のドクトル・グリーン歓迎演説をなし、英國代表ドクトル・ギブソン、亞細亞代表、本多監督、アフリカ代表ハーツセル監督の三人が答辭を述べた。

タフトは先づ大會が大統領の爲に祈らんことを求め、次に此都が年中最も美觀を呈する季節に衆を迎へしを喜び、米國にては公立學校にて宗教教育を施すの困難なる事情は兩者を混同する國よりも日曜學校の必要ある所以を述べ、進んで日曜學校の略史及現狀に言及して、この教育が生徒と共に教師に及ぼす感化の極めて良好なることを力説した。

本多は先づ、亞細亞は世界の大部にして波斯、印度、支那及び聖地パレスティンをも含有するに後進にして領域狭く、宣教地として新なる日本より來りて之を代表するの適當ならざるを想ひたれど、日本を世界に紹介し、また日曜學校の組織者たる宣教師を派したるは米國なれば之に謝せんことを思ひて此任に當るといひ、大統領以下の歓迎を深謝し、米國が地上に於ける神の國の理想に達せんことを祈り、一轉して日本が傳道の容易ならざるを以て聞えたる國なること、然して近來別種の記録を作り、即ち陸海軍の進歩を見たる爲め、外國の猜疑を受けし事に言及したるが、之が反面には現に日曜學校の如きは一九〇〇年に全國のその教員と生徒三萬三千人なりしが一九一〇年は十

萬五千に上りし如き、戦場の日本軍隊の如く進歩したるものありといひ、然も無防備なる亞細亞に國を爲す日本が軍備を整ふるは止むを得ざる事にて、しかも列強の風潮を追ふに過ぎず、本來平和を追求するものなるが日曜學校の如きは平和將來の爲有力なる解決の一手段である。顧みれば一八五三年提督ペリーが江戸灣にて船中に禮拜の式を挙げしことはこれ日本に於けるプロテスタント最初の日曜の守られたのである。日本は全く基督教化せられずして日曜を公休とし七百萬の學童皆その日に休暇を有するは日曜學校の爲の特別の攝理である。然して今や亞細亞は其本土に復歸しつゝある基督教を迎ふる準備をなしつゝある。教友諸君、日本と亞細亞を記憶し且つ助力せよ。これ聽て諸君を益し、之に由て吾人の共に拜する主の名を大ならしる所以であると彼は結んだ。

この演説は亞細亞代表としては日本を語るに過ぎた觀があるが、他の國々のことは後に各その代表が語る機があるのであるから、或はこれでよかつたらう。それにしても世界の元首中、彼の演説を聞きしは唯だタフト大統領のみであつたらう。

六月十四日より蘇格蘭エディンバラに開かるる萬國宣敎大會に列する爲、本多は米國から同地に赴いた。此會は英の政治家バルフォア卿を會長として世界各地各派の代員千二百名を集めた。會の主腦は英米人で正にアングロ・サクソン族の世界的宗教的雄圖の縮圖であつた。日本からはハリス監督、井深梶之助、原田助、千葉勇五郎、及び青年會のフイツシャール等が列席した。凡そ二千の人

々が三ヶ所に別れて會議した。米國青年會の總幹事モットははじめに青年會の世界連合を企てて成功したが今は青年の領域を大人に擴張し、この宣敎大會の議長となつた。

此大會に於ける本多の演説に就ては同會に列席したる小野善太郎が次の如く談つた。
「當時先生は亞細亞を代表し日本語（フイツシャール氏通譯）を以て演説せり英人の血を湧かしむる城の内にて大和言葉を以て演説したるは先生の外未だ曾て之を聞かず。當時列席したる東洋諸國の代表者咸な演説せり。我邦の井深氏千葉氏海老名氏等亦演説せり。或は從來受けたる恩恵に對して謝辭を述ぶるあり或は布教宜しきを得て總理大臣より感謝されたりと報告するもありき。然れども當時先生は眼中メソヂストなく大日本に於ける基督信徒として説く所あれり。云く諸君が異邦人と稱する吾人の爲め從來宣敎師を送られたるは感謝の至りなり。然れども成績の擧らざる有るも可なり無くも可なるが如きを送らずして常に好成绩を擧ぐる底の人物を吟味して送れ。然らざれば却て少からざる障害となり何等の甲斐なきに終らん。而してその缺くべからざる資格として毎日の生活儼として基督教の生活をなし酒と煙草を嚴禁しその人格の吾人をリードし得る底のものならざるべからず。且夫れその遣はされたる宣敎師の縦し忠實に吾人を導くも彼等を送りたる本國が戦争の準備に汲々たるが如きは沙汰の限りなりと喝破したる時の如きは滿場水を打ちたるが如くその大膽勇猛に一驚を喫せり。」

尙ほ此事に關して長崎青年會主事堀江政太郎は記して云ふ。

「我が青年會同盟の幹事フイツシャー氏は嘗て余に語つて曰く、「一九一〇年エディンバラ市に開かれたる萬國宣敎大會に於て余は本多師の演説を通譯せり。演説の意味は通譯によつて始めて外國人に了解せられたるも、通譯前に於て聽衆は既に自から感動せるを目撃せり。余は通譯終りて其故を某人に聽く、曰く「本多氏の莊重なる態度と謹嚴なる音調とは日本語を解せざる我等にも多大の感動を與へたり云々」と」。

翌々年四月の雜誌開拓者には此時の演説をフイツシャーが英譯せるものを左の如く抄譯して掲げてある。

「當人は國民性の理想を有するが故に教會にも國民的精神を發揮するに至らんことを望むものなり。國民性の強からざる國家は其進歩頗る困難なればなり。國民性には獨立の觀念及び個人的責任等を含むものなり。夫れ國民的精神並びに獨立の精神を認めざる宣敎事業は薄志弱行にして依頼心ある信者を作り又國際問題を惹起するに至らん。而して國民化せる教會の理想とする處は決して宣教師を不用なりとし又は宣敎事業に關し爭論を醸すに至るものにあらず。例令ば我國に於ける四教會即ち日本基督教會、組合教會、聖公會、及びメソヂスト教會の如きは實際上獨立自治の状態にあり、斯の如く日本の教會に於て日本國民の精神を認むる事は實に教會員に對する大なる價值あるのみならず、又教會外の一般國民に對する大なる感化を與ふる事と成るべく、然らずんば寧ろ基督教に對する偏見を増進せしむるに到らん。日本の如くに基督教迫害の歴史を有し、且つ國民性の強大なる國に於て特に國民化せる教會を打ち建つるの必要ありとす。然れ共世界何れの處にか國家を愛せず又多少にても國民性を有せざるものあらん。而して宣敎事業宣教師共に之を蔑視し之を破壊せんとするが如き事あらば實に不幸の結果を來すや疑なし。教會が悉く獨立自治と成るの日は豫知する能はざれども、教會を愛する精神にして鞏固なるに到らば教會指導の責任を其國民に負はしむる事を躊躇せざらん事を以て至當なりとす。」

ブリテイツシュ・ウイクリの記者をして「基督に對する忠誠によりてのみ限られたる、日本國民主義の精神は特に今日顯著にせられたり」と評せしめたのはかゝる立場が示されし爲であつたらう。宣敎せられたる國土は東洋の舊文明の國と其他の未開國があるが問題となれるは主として前者であつた。東洋宗教思想に對する態度も頗る寛容且つ公正になり、その價值も認識された。特に日本の代表者は交々立つて我が精神や國情を説示した。其他支那の宣教師にして支那の經典及び五常の道の價值を説くあり、印度人にして改善したる印度教を説くもあつた。要するに基督教と東洋思想の融和は此會の一主調となれる如く見ゆる。著者は此會の觀察を「宗教的雄圖」と題して當時の開拓者に掲げたが、之に對して鼎浦小山東助は同感を表し同誌に意見を寄せた。

エディンバラの大會は六月二十三日終了したが、これを第一回として後日に續くものとし、爲に繼續委員が擧げられた。それは英米歐各十名と南アフリカ、アウストラリア、日本、支那、印度各一名で日本代表は本多に定められた。

此時以後歸國迄彼の自記がある。彼は井深、千葉と共にグラスゴーよりカリフォルニア號に搭乘し、北海峽を過ぎ愛蘭の北を廻り大西洋に出で七月三日紐育に着した。ここにて加奈陀メソヂスト外國傳道主幹サ、ランド逝去の報に接し之を悲んだ。サ、ランドは三年前合同全權委員の一人として日本に來たので熟知の人であつた。齡は彼より十一歳の長者で七十四歳であつた。

加奈陀横斷の旅に彼はカナディアン・ロッキーの壯景に感じた。彼はいふ。

『八月三日紐育發、五日トロント發、三日目にロッキー山脈に入りバンフといふ山間の一小都會に達して二泊、此地瑞西のルツェルン又はジュネーヴに比すべく而して山水の幽邃高壯は一層上なり。これより一晝夜にして晚香坡に達するなるが此間の山水は生涯見たる最も壯大なるもの、一萬尺以上の高峰秀嶺は千秋の氷河を抱いて送迎に追なからしむ。森々たる老樹幾百哩に連り際涯を知らず。之を縫ひて蜿蜒々長蛇の如き鐵道あり、虹の如き高橋あり、人の子の業も亦驚に堪へたるものあり。』

彼は八月十四日よりヴィクトリアに開かれし加奈陀メソヂスト總會に臨み廿四日會場にて演説し

廿六日に告別した。日本宣教師コーツ、ペーツの二人も此會に出席したのであつた。彼は加奈陀の土地豊饒にて廣濶なると山水の秀麗なるは世界に冠たりと見、人口も増加し教會も發達しあれば二十年も過ぐれば強大なる國民となり盛大なる教會も現出すべしと考へた。此時東亞にありては彼の憂ひたる韓國併合が行はれた。それが八月廿九日であつた。

二十六日ヴィクトリアを發しシアトルに至り、同地及ポートランドにて演説し、南下して桑港に至つた。

太平洋沿岸日本人美以第十一年會は九月二日より桑港、バイン街教會で開かれた。監督イー・エチ・ヒュースを議長とし、出席者は北澤鐵治、小室篤次、白戸八郎、川島未之進、藤井茂雄、及川勇五郎、吉岡賢秀、吉岡誠明、宗音江、廣田善朗、田中久彦、吉田森藏、有馬純清、馬場小八郎、島崎十助及びびさきに長崎及青山にありし宣教師エチ・ビー・ジョンソンとエム・エス・ヴェールとであつた。本多監督は聖餐式を助け、訪問演説を爲し、また聯合教役者會で談つた。外に桑港、オークランド、アラメダ等で演説し、ロスアンジェレスにも往復した。海外に於ける多くの同國同信の人を見ること此地の如きは無類なれば彼は國家と教會との爲に深く考へたであらう。北澤鐵次の談るところによれば此時ある會合に在米日本領事某出席し、沿岸の教界に人物乏しきを惜しむと談つたが、本多は之に應じて外務省でも人物缺乏には困つて居らうといつたといふ。かゝる應答は彼

の特長の一であつた。

九月十三日サイベリア號にて桑港を出た。太平洋は六ヶ月前の往航の時より太平であつた。十八日ホノル、に着しさきに青山及弘前にありし宣教師ジェー・ダブニー・ワドマン夫妻、牧師本川中村、堀、奥村等に迎へられ、上野領事からも好遇され、ワイキキの望月亭を二週間運動の根據地とした。リヴァー街及びキング街の日本人美以教會、組合教會、青年會館及び諸學校で説教演説十六回に上つた。特に日本兒童の學校では感慨深かつた。彼は七萬の邦人の力を多とした。牧師中村忠藏は布哇に於ける彼の行動を報じて終に曰ふ、『先生が當地に於ける二週間の運動は唯に教會員の信仰に覺醒を與へしのみならず門外の人々にも多大の感化を及ぼしたり、ワドマン氏の談るところによれば白人間にも深き印象を與へたりと。』

海島布哇、その好風光、驟雨と虹、其他の奇勝は彼を楽しみました。海風強き懸崖ヌアヌ・パリの古戰場に至りて之を布哇俱里伽羅とも唱ふべきものと云ひしは絶妙である。

十月三日の夕マンチュリア號にて布哇を去り十四日横濱に入つた。四月四日出發以來正に六ヶ月長途の旅、而してこれが歐米行の最終であつた。

半歳の外遊より歸りて休む暇も無く彼は第五回の朝鮮行を爲した。それは韓國併合後未だ三月に足らぬ時節であつた。十一月一日より朝鮮美以宣教廿五年祝會が京城の李花學堂で開かるるので

れに臨んだのである。五日には平壤に至り故津田仙の三男判事和田純の家に迎へられた。平壤の日本人會堂は伊藤公の紀念物として彼に思出が多かつた。八日鎮南浦に至り、十一日京城に歸り木原外七の家に迎へられたが咽喉の惱多く演説は苦しかつた。朝鮮は彼に多くの感慨を催ふさせた。彼は朝鮮の統治と進歩は大日本の世界に於ける大試験である。何人も之を妨げず列國は高棧敷にて見物しあり、日本朝野の責任甚大にして未だ萬歳を叫ぶ時ならず、よろしく謹慎努力天助を祈るべしといふた。

彼は月末歸京したがその旅行中即ち十一月二日に同志社創立以來新島襄の助力者にしてその傳の著者となりしジェー・デー・デヴィスが七十三歳にして米國に於て逝去した。彼が新島と肝膽相照しその同志社の教育を援助したる功は絶大であつた。本多は彼に比すべきものを青山の教育に於て有せなかつた。況や彼を傳する外人をや。

彼が横濱時代以來の先輩にして日本教界の元老たる奥野昌綱は十二月二日齡九旬に近くして逝いた。奥野は上野輪王寺宮の寺侍であつた。本多より二十餘年の長者であつたが基督教に入つたのは同年であつた。その教職退隱の後も本多は彼に篤かつた。日本最初のプロテスタント宣教師の一人るチャニング・モア・ウイリアムも八十二歳の高齡を以て奥野と同日に逝つた。

『身も靈ももとより神のものなるをさゝげたりとも思ひけるかは』の一首は昌綱の名吟である。

年末彼は此一年を回顧し將來を望み萬感交々する間に全國の教會に公書を發した。此年四月彼は北米三母教會の招に應じ海を渡り到る所に懇待せられたる獎勵と刺戟を受け、且つ身を責任の地より離して健康を回復せんとした。その経過を概観すれば南美以傳道局にて南米と西阿に新傳道地を開く壯舉を開き、シカゴに於ける平信徒宣教運動の大會に四千の信徒北米の各地より集れるを見、アッシュヴールの南美以總會に於ては同教會が三十年以前北部と分裂後、各方面に於て發達し今は百五十餘萬の信徒を有するに至りその進歩は北米諸派に冠たるを聞き、ワシントンの萬國日曜學校大會にては全世界新教九大區の日曜學校生徒總數二千八百萬に上る。そのうち日本は十年間に三倍となりて尙ほ十萬餘に過ぎず朝鮮の十四萬二千に比して遜色あるを遺憾とした。エディンボロの世界宣教大會三千の代員過半は宣教師と傳道局員にして何れも我等の田園は世界なりと唱し、其間に列して田園の收穫物の如く思はるるは例令之が傳道の勝利の證なりとするも、證據物件なるものは後進たり劣者たれば窃かに暗涙を吞んで旻天に號泣したりといひ、再び北米に歸り加奈陀メソヂストの總會にては、此教會が二十八年前四派合同して十六萬五千の信徒を有せしものが今や三十四萬を數ふるに至り、更に今後長老、組合二派と合同せんとする大勢なるを見た。太平洋沿岸及ホノルルに至り同胞の移民を見れば之を國勢發展の果と見るも心あるもの暗涙に咽ばざるを得ず、然もこれ本國の幹に含めるものを海外の枝葉に發せるのみと嘆す。歸來急に新領土となりし朝鮮に至り、

新附の民の間に福音傳播の勢盛なるに比し我が居留民にあつては舊態依然たるを嘆いた。顧みて自らの教會が來年に於て第二總會を擧ぐるを思ひ、去年夏發表せし六條の綱領を再考すべしとて之に註釋を下した。特に第三條の下に合同教會の三年半に於て自給教會を増すこと僅に五にして總數十九に過ぎざるを遺憾とし、之を朝鮮に比するに比較的貧なる彼等の努力我に勝るあるを見るといふ。尙ほ日本の近時全國各派合同の勢も勃興したるも自らの教會の自給今の如くでは合同にも孤立にも如何ともすべからざるを思ふといふた。言々凱切、その教會を思ふの念と責任の感と如何に篤きを見ることぞ。

三十三、明治四十四年、第二總會等

一月二十一日 東京本郷なる中央會堂は宣教師シー・エス・イビーの創立以來二十年となれるを以て祝會を催した。平岩はその略史を述べ、本多は新渡戸稻造と共に演説を爲した。彼は今日の如き國勢にあつて日本の國民精神が先進國に對しても後進國に對しても餘りに狹隘且つ高慢なるを戒しめ、かくては畏敬と信任を期し難しと説き、天父の下に四海兄弟となり、道德の制裁を確實にし救主を信じて安心する者國に充ちかくて天國を地上に來らすべきを説いた。

同月二十六日 彼は東京各派教役者の新年會に臨み歐米所感を談つた。

第四回東部年會は三月廿四日より青山學院に開かる。今年秋は合同後初めての總會開かるべきにより先づ之に出席すべき代議員教職及信徒各十八名を選擧した。兩者同數なるは教會の經營が主要問題となれるを暗示するものと思はれる。現場の出席に徴しても教職六十六名信徒十名のみにて之が爲に過半数前者は三十四票後者は六票を以て得點とするに徴しても比倫を失するものである。但しこれ教職の謙讓か、將た信徳高き信徒の増加か。

選舉の結果、信徒は勿論邦人のみなれど教職は定員に三名豫備員に一名の宣教師を交へた。これも自給教會以外補助教會及び傳道教會存在の理由を談るものであらう。然して部長の任命に於ても東京東部の小方辭してソーパー代り、札幌の杉原辭してヘッケルマン代れるも同一の理由の爲と察せらる。

牧師中の古老菊池卓平及び本多齋は退隱した。今年逝去せる老牧師大貫文七の爲に追悼の會が催された。

第四回西部年會は四月五日より廣島に開かれた。總會代議員は教職信徒各十四名を擧げた。ここにも三名の宣教師を加へた。三月逝きし熊本の牧師中村徳太郎は追悼せられた。長老に擧げられ按手禮を受けしものの中に後年第四代の監督となれる赤澤元造があつた。本多監督は「傳道本戰の時機」と題する説教を爲した。

彼は世界を見渡して新教の宣教は三十三所、歐米宣教師一萬九千人、傳道地にて傳道者となれるもの九萬八千人、教會一萬六千、信者三百萬を數ふは半世紀の効果なりといひ、奉天會戰の鴨綠江軍の困難を以て傳道戰に比し、一轉して某宣教師の問に答へて、現今の傳道者の要性は敬虔、克己、犠牲、質朴、同情、丈夫らしきこと、學問と常識寛厚にありとし、傳道上の要點は眞神を説き、世界愛と共に愛國を訓へ、家庭の清潔、社會の淨化、罪と救の高調にありとした。最終に一番槍の働を爲し、「我すでに世に勝てり」「天國近し」の聲を聞き、討死の覺悟にて奮闘すべしと結びたるは一年後の自己を暗示する如く思はれる。

彼は廣島より長崎に至り十三日鎮西學院の落成式に臨んだが院長笹森の病は彼を憂慮せしめた。十六日には京都に至り青年會館にて「生ける基督」を説いた。

此頃全教派合同の運動が東京に起つて居た。五月七日教派合同期成同盟會の發會式が神田青年會館にて擧げられた。準備委員山本邦之助會の成立を報じ平澤均治開會辭を述べ渡邊暢、中島力三郎、今井壽道、植村正久、海老名彈正、井上文慈郎、平岩愼保、松野菊太郎、岡田哲藏、石川角次郎、コーツ、星野光多、小崎弘道の演説があつた。式後議事に移り十五名の理事を擧げた。此時本多は名古屋にありて此會に列せなかつた。彼は勿論此會の趣旨に賛成であつたらうが今一派の爲に専念して更に大なる合同の爲に盡す能はず、この期成同盟會も諸派の對立依然として存し、統一は成ら